
名探偵コナン~キッドside~

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン～キッドside～

【ZPDF】

Z1827B

【作者名】

ペロロ

【あらすじ】

これは、怪盗キッドから見たコナンとの戦いです。原作と合わせてお読みください。なお、自分の読みたいお話だけ読むというのも一つの読み方だと思われます。ちなみに、「漆黒の星」からスターし、「奇術愛好家」、「世紀末の魔術師」、「黄昏の館」を収録。「奇術愛好家」以外は最後にちょっとオマケあります。オリジナルを少々含んではいますが、楽しんでいただけたら嬉しいです

始まりの挨拶

オレは高校生怪盗、黒羽快斗・・・
なーんてどっかのアニメみたいに始めてみたけど、普通は高校生が
怪盗なんてやつてるわけねーよな。
まあ、やり始めた経緯はこの位置にといて・・・。
さてと！

POZ

みなさま、じんにちは。怪盗1412号、通称怪盗キッドです。
これから始める物語は、あの小さな探偵君と私の戦いの物語です。
ここでいくつか注意があります。

まず1つめ。

このお話は「名探偵コナン」のキッドKidとしてお送りします。
なので、セリフがかぶつてこないことが多々ありますが、『トモ承下さい。

2つめ。

このお話は、私キッドの語りでお送りする形になります。

「　」がついていないことじりは私が思っているのだと考えた上でお
読みください。

最後に3つめ。

今から始まるこのお話。TVで放送されたもののみでお送りします。
原作すでに書かれても放送されなければ、そこはカット
させていただきます。

あ、映画の方もですよ！

さあー、以上の点をふまえて、それでも読みたいという方は
最後までお付き合いよろしくお願いします。

それではまたお会いしましょうーーー！足先に本編へと向かっておき
ます。
では！

POM

始まりの挨拶（後書き）

ところへいりで始めてしました。ペロロです。
連載小説「名探偵コナン～キッドside～」です。
マイペースですが少しづつ更新していくので、最後までお付き合
いをお願いします。

漆黒の星ー（前書き）

とつあえず、ブラックスターからスタートさせていただきます。

漆黒の星1

「快斗ー！」

朝から元気なこの声は、オレの幼馴染の青子。

「快斗ー？！起きてるんでしょー！？早く行こ！つよー！」

そう、今日オレ、黒羽快斗は青子と一緒にある宝石を見に行くのである。

その名も”漆黒の星”！！

鈴木財閥の秘宝の黒真珠・・・。そして、今度のオレの獲物でもある。

「今行くから待つてろ！..」

「分かったー！..」

オレが階段を降りていくと、青子が玄関で待っていた。

「早く行こ！..」

「おう！」

「それにしても雨があ・・・。まだ春先だから雨だと少し肌寒いね。

「ああ・・・」

今・・・今すれ違った高校生ぐらいの女人2人・・・片方は確かあの鈴木財閥の・・・
だとすると、もう一人は・・・

「ちょっと聞いてる！？」

「あ・・・ああ・・・聞いてるよ。アホ子はアホだなって話だろ！？」

「バ快斗！そんなにアホアホ言わないでよ！青子、アホじゃないもん！」

「ケケケ・・・」

つと、そんなこんなで米花美術館到着♪

「わ～！きれい！！」

「・・・そうだな・・・」

「これ・・・一セモノじゃねえか・・・。となると、やつぱり予告状はああして。

そして・・・

「それにしても珍しいね、快斗が宝石見たいなんて・・・」

「・・・まあな。たまにはいいじゃねえか。」

次の獲物だから・・・なんていえるわけねえって。まだ予告状出してねえし。

そして、次の日。オレは鈴木財閥と警察宛に予告状を出した。

” April fool

月が二人を分かつ時
漆黒の星の名の下に
波にいざなわれて

私は参上する

怪盗キッド”

漆黒の星1（後書き）

いつも、ペロ口です。

第1話は、快斗が予告状を出すまで・・・とこりにじで書かせても
らいました。

少しづつですが更新していくので、よろしくお願ひします。

漆黒の星2

いよいよ今日は予告日。美術館に仕掛けた盗聴機によると、何やらあの”毛利小五郎”とか言つ”探偵”が的外れなこと言つてたけど・・。

あいつ、本当に”探偵”か？

白馬のほうが張り合つての・・・。

まあ、今はその白馬探偵もロンドンに戻つておいでときてる！
今回も楽勝ですな

そうそう、オレは現在東都タワーの上にいま～す

なんか寺井ちゃんが「やめろ」とか言つてつけど・・・。

そういうえ、あの時計台の時のジョーカー・・・。青子が「工藤君のおかげね！」

なんていうから、「誰だ？それ・・・」って言つたら

『謎めいた殺人事件を次々に解決してる高校生探偵』なんだつてさ。つたく・・・何で怪盗相手に殺人専門の探偵が来んだよ・・・。
ん？じやあ、あの時紅子が言つてた”光の魔人”つて・・・。

ふ～ん・・・でもアイツ、あれ以来姿見せてねえよな・・・。
ま、やりやすくて助かるけど・・・あのときの緊張感、楽しかった
のにな

白馬じや物足りないんだもん！－白馬には悪いけどね。

アイツの行動パターン、いつも一緒だからな・・・。

おつと・・・寺井ちゃんが心配してるし、そろそろ行きますか！

「狙いはビッグジュエル、鈴木財閥の至宝”漆黒の星”！」

そう宣言し、オレは東都タワーから飛び立つた・・・。

このときオレはまだ気づいてなかつたんだ・・・。（まあ、当たり前だけど）

まさか予告状を解いたガキが中継点である、杯戸シティホテルにいるなんてな・・・

漆黒の星2（後書き）

「えつや、ペローノです。

とりあえず、飛び立たせてみました。

それから、時計台の事件についてなんですが・・・。軽く触れる程度にさせていただきました。

あくまでも、これは「ナン」と「キッド」の対決のお話なので・・・。
ご了承ください。

漆黒の星3

その一つの小さな”影”は、近づくにつれて、はっきりと見えるようになつてきた。

最初は「違う……気のせいだ……。目の錯覚か。」と思つてたけど、やはりそれは錯覚なんかじやなくて……。

何やらその”影”は、誰かと電話をしているらしい。ま、いいや。

と思って着地したら、その小さな”影”は、はじかれたようにひつちを見た。

うわ～・・・。ちっせえ・・・。小学生？

あ、電話切つた。相手がかわいそつだ。ま、どうでもいいけど。とりあえず、

「ボウズ・・・何やつてんだ?こんなとこで・・・」

それもガキがこんな時間に一人で・・・と心の中で加えておく。すると、

「花火!..」

なんてかわいい(?)答えが返ってきた。

いや、そういう意味じゃなくて・・・いや、そうなんだけど・・・なんてあきれてたけど、そこは血漫のポーカーフェイス!..ちよつとやそつとじや崩れません!と思つてたら、

「あ、ホラ! ヘリコプター! こっちに気づいたみたいだよ!..」なんて言いやがる。ホー・・・それが狙いだったってわけね。やるねえ、このガキ。

「ボウズ・・・ただのガキじゃねえな・・・」と本音がポロリ。すると、「江戸川コナン・・・探偵を・・・」

く・・・空気が変わった！？何者だ、コイツーまじで”ただのガキ”じゃねえや。

探偵？フ・・・おもしれえ・・・。それにコイツ、背中に何纏正在るんだ？

バレバレだよ・・・マジシャン相手にするのに慣れてねえな。ここはひとつ、盛大にやらせていただきますか。

それでは、It's ショータイム！！

漆黒の星③（後書き）

みんなおひるねですか。ペロペロです。

ひとつあげず、もうやく「ナシくんが出来ました。

「ナシくんと会ったときにキッズが何を思つたのか、謎だったので、
ひとつあげず、やけに自分なりに解釈してみました。
はい、キッズたちのショーの始まり、始まり～

漆黒の星 4

オレはステッツから無線を取り出し、「え～・・・。」ひづら茶木だが！杯戸シティホテル屋上に怪盗キッド発見！」「とか、

「え～、ワシだ、中森だ！キッドは屋上だ！」などと、声帯模写をやつたら・・・お？驚いてる、驚いてる・・・。まあ、普通は機械使うところだしね。

それにして、ポーカーフェイスがなつてないね～、探偵君？

「これで満足か？探偵君・・・」

つて言ったところで、中森警部、到着～

「これはこれは、中森警部・・・お早いお着きで・・・」つて言つたら

予告状解いてたつてや。さつすが、長い付き合いなだけあるね
おお～！なんか、いっぱい来た・・・。気合い入つてるな～、中森警部。

「今夜はあなた方の出方を伺うただの下見・・・。

予告状にちゃんと記したはずですよ？April foolつてね・・・」

おつと～忘れてた。ここで呆けてる探偵君に一言・・・

「よお、ボウズ・・・知ってるか？怪盗は鮮やかに獲物を盗み出す創造的な芸術家だが・・・探偵はその跡を見てなんくせつける、ただの批評家に過ぎねーんだぜ？」

では！

本物の予告状はきちんと置けたし、さつと帰りますか。

それにしてもあのボウズ・・・何者だ!?おかげで事が運びやすかつたけど・・・。

もともと警察を呼び出すつもりだつたしね。

只者じやねえよ、あのガキ。調べる必要がありそうだな・・・。

”4月19日

横浜港から出航する

Q・セリザベス号船上にて

本物の漆黒の星を

いただきに参上する 怪盗キッド”

漆黒の星4（後書き）

キッド、逃走しましたー！！

いや～・・・。書いてる本人が1番楽しんでるかもしだれないです。
キッドのあの「よおボウズ・・・」のセリフは本当に氣に入ってる
んです！

キザですよね～・・・。

そこがすきなんですけどね

漆黒の星5

予告日の4月19日までの準備はとてつもなく、しんどかった。

まず、鈴木家に盗聴器を仕掛けたオレの愛鳥（？）のハトを飛ばし、模造真珠が大量に注文されたという情報をゲットとなると・・・ふふふ。

そして、もう一つの情報・・・もちろん、あの”探偵”のこと。白馬とはまた違った雰囲気のある”探偵”は、あの毛利小五郎のところに

居候として住んでいるらしい。

名前は、名乗っていたとおり、江戸川口ナン。偽名かと思つたんだけどね（笑）しかし、その正体は、はつきり言つて、全てが謎。怪盗顔負けだよ、まったく・・・。

そういうえば、毛利小五郎といやあ、あの青子と一緒に真珠を見に行つた時に

すれ違つた鈴木財閥のお嬢さんと一緒に歩いてた娘（？）。あれが、毛利小五郎の娘の”毛利蘭”ね・・・。うわあ・・・。空手の使い手だつて！優勝経験有りかあ・・・。すごいなあ。

なんか、おもしろいことになってきた

彼女になって、”探偵”的ことをもう少し観察していいな。

・・・・・よし、決定

ということで、彼女の服のサイズを知るためにクリーニング屋へバイトに入り、

サイズの情報をゲット

詳しくはわかんないけど・・・。

こういうのって、『役得』って言つていいいのかな？（笑）

さてと！

準備OKだね あとは、当田こーつだけ・・・ね

4月19日、予告日通り。

オレは茶木警視の声を使って、鈴木史郎氏に電話で出航を2時間遅らせるのことを伝えれば。全て完了！

さあ、探偵くん・・・勝負といいうか・・・

漆黒の星5（後書き）

いつもやくです……いつもやく、キッシュヒロナンの対決がメインの場所までやってきました。

時間がかりすぎですね、スマセン。

いつたいどれぐらいかかるのか、不明ですが、最後までお付き合いでよろしくお願いします。

漆黒の星6（前書き）

想像の世界が広がっています。

漆黒の星 6

オレは当初から予定していた通り、まずは鈴木史郎氏に変装して入船した。

そこで挨拶をしていたら後ろから奥さんが出てきて、真珠をつけるようにみんなに言いながら

「それはおろかな盗賊へ向けた私からの挑戦状・・・

さあ、みなさん、胸にお付けください！本物はもちろん一つ、あとは成功に作られた模造真珠です。さあ、盗れるものなら盗つてみなさい！！」

といつセリフを背にして俺はパーティー会場を抜け出し、トイレへ。

そこで史郎氏のマスクをはずし、警官の1人に化ける・・・

これで第1段階終了

そろそろ、探偵くんが一セモノだと氣づいて探しに向かうんだけど・・・

と思つてたら、来た来た。

さてと・・・その危なつかしい探偵くんの最も身近にいる彼女なら、彼を迎えて探しているはず・・・行きますか。

甲板に出ると、田当ての彼女はすぐに見つかった。

「こんな所を歩いていると危ないですよ」と声をかけると、素早く構えやがった。

さつすが空手の使い手！でも、警官だと知つて安心したのか、構えを解いて

「ちょっと人を探してるんです。小学生の男の子、見ませんでした？」と聞いてきた。

「ああ、キッドの変装道具を見つけた子ですか？彼なりも「戻りますよ」

おやじくね。

「あ、そうだったんですか？」

オレはクスッと笑つて

「弟さんですか？」と、答えを知つているのに、聞いてみた。

「あ、いえ。うちで預かってる子なんんですけど・・・すぐにビック
行つちゃつて・・・

よかつた。ちゃんと戻つてて。ありがとうございました。」

「あ、服にホコリこりますよ」と言つて、指に挟んだ麻酔針を
さす。

「あ・・・ありがと・・・」
「ざこま・・・」

うおつと一危ねえ・・・。倒れさせるとひるだつた。

さて、ボートの上に彼女も移動させたし、彼女に変装をせりひらつ
て・・・。

まったく・・・探偵くんももつと彼女に気をつけてないとねえ。
こうやって、いつ何時怪盗が狙うか分からないと？なんてね（笑）

よし、そろそろ戻りますか・・・

漆黒の星6（後書き）

はい、キッドは蘭ちゃんに変装いたしましたー。
いつたいいつ変装したのか勝手な想像ですが、こんななんでも許して
もらえるでしょうか？

次から、パーティー会場に蘭ちゃんの姿で侵入したキッドとしてお
話が進んでいきます。
では、次からもお楽しみトわい。

オレがその場に戻ると、ちよ「ひ」のお嬢さんの話をしていた。

オレってば、グッドタイミング
ほほを赤らめて「ビーセ方向オンチですよー」と言へば、何も疑わ
れなかつた。

警戒心ないんだなあ・・・。

すると、茶木警視が前に出てきて、オレが変装するのを防ぐために
”合い言葉”を決めるつてや・・・。もう遅いよん ここにいるし。
とりあえず、足元にいた探偵くんに、合ひ言葉をどつするか、もち
かけてみる。

「じゃあ、僕がホームズって言つたら・・・」

「私はルパンね！」

・・・あ・・・マズイ。普通はワトソンだよな・・・。
やべえ・・・ついクセで・・・と内心焦つてたら、急に証明が消え
た。

すると、なんかキッドの格好したやつが現れた!!

・・・オイオイ・・・オレ、あんな派手なことしねーよ。いや、
するか? (笑)

奥さんが銃で撃つたみたいだけど、アレもマジック。

・・・あ、やっぱりね。

まあ、オレはあんな風にはならないぜ?

それにもしても、探偵くん気づかぬけずーーーつまんないーーと思
つてたら

気配が出てしまつたのか、急に振り向いた。

あつぶねえ・・・。気配には敏感なわけね。嬉しいことだね～

とりあえず、この手元にしのばせてあるカード。

前でマジックショーやるうとしてる真田氏の貼りつけてみんなに見せてあげますか。

鈴木財閥のお嬢さんと一緒にその中からカードを引いたように見せかけてね・・・。

さあ、探偵くん・・・ゲームスタートだよ

”クレオパトラに魅了されたシーザーの”とく
私はもう貴方のそばに・・・

怪盗キッド”

漆黒の星7（後書き）

「んにちは、ペロコです。

よひやく、キッド行動開始です。

こゝまで長かつた～！

”漆黒の星”は、あと3話か4話ぐらいの予定です。

お付き合いよろしくお願いします。

あと、評価もお願いします。

漆黒の星8（前書き）

かなりセリフが原作とかぶつてますが、許してください。

It'sシートタイム!!

オレは胸につけた真珠を下に落とし

「誰か拾ってください!!」と言った瞬間、用意してあつた別の真珠を大量にばらまく。

今のところ、こっちの~~方~~走通つ 混乱したすきに朋子さんの体を支えるふりをして

胸につけた真珠を・・・よし、GETーすると、鈴木財閥のお嬢さんが気づいたらしく。

指摘すると・・・

「あやああああー!!」

うわっ! ビックリしたあ・・・。そんな悲鳴あげなくとも。

とにかく、警部! いまさら奥さんが本物だつて気づくなんて遅すぎ まだまだね。

さてと! 用事は済んだし、あとはハンググライダーで逃げるだけ! ・・・と思つていたら、急にあの探偵くんに手をつかまれた。それも、

「わかつたんだよ! 怪盗キッドの正体が!」

な~んて爆弾発言がましゃがる。

まあ、いいよ。その推理、しっかりと聞かせてもらおうか、探偵くん・・・。

オレは探偵くんに連れられて機関室へとやつてきた。

とりあえず「ちょっと、コナン君! 機関室よー本当にこんな

ところに怪盗キッドがいるの?」ととせけてみる。

すると探偵くんはその質問を回避して、宝石言葉について聞いてき

た。

知つてゐるかつて？そりや、知つてるとも……なんて答へられるはずもないでの、聞き返す。すると、きちんと説明してくれた。

「真珠の宝石言葉は『月』と『女性』。これにあてはまるのは『鈴木朋子』さんだけ……だから本物はあの人人が持つてたつてわけさ！」

「へー。でも、なんでキッドの正体がそれで分かるの？」

とさらになるとほけてみると、すぐに「カードだよ……」との答え。それも、マジックのタネまで見破つていたかあ……やるねえ。そして

「まさか、怪盗キッドの正体はあの真田つていうマジシャン……」
とさらによるとほけてみると、

「違うよー。あの人奥さんに近づいてないもの……」と否定の言葉。その間もずっとサッカーボールをけり続けていた。うまいじやん、と思つたらやめた。

そして、核心をつくセリフ。

「その人物は床にカードをばらまかせ、拾うフリをしてカード一枚抜き、メッセージを貼り付けた……そして、それを手のひらにしのばせて、あたかもカードの束から引いたかのように見せかけたんだ……だよね？蘭ねーちゃん……いや、怪盗キッドさんよお！」

おお・・・。急に雰囲気が変わった。
さすが探偵。

漆黒の星∞（後書き）

はい、止めたやつをした。いいじだ。
全部書くとあまりにも長くなってしまつたので。以上承ぐださい。
さて、コナンくんの推理後編は次語とこりにになります。
お楽しみに。

探偵くんの推理は続く。しかもそれはおもしろく、まるで全てが正解で……。

しかも、あの日一セモノだから盗らなかつたことまでバレてら。よし・・・・」うなつたら・・・

「わ、わかつたわ。そんなに疑うんなら、電話でここに警察の人を・・・」

「呼びましよう」と続けたかったのに出来なかつた。

ついさつきまで探偵くんの足元にあつたはずのボールが電話にぶつかつて、電話が・・・

電話じやくなつた・・・。

こいつ・・・・・・マジでやべえよ。足は凶器か?

この得意のポーカーフェイスも固まるつて言つたら分かつてくれる?

「ビルの屋上で消えたときと同じ手は使わせねーよ・・・・・あの時お前が警察を呼んだのはオレへのあてつけじゃない・・・・あの閃光の中で素早く警官に扮し、彼らの中にまぎれ、姿をかくすためだ!ハンググライダーで今にも飛ぶかのように見せかけてな!・・・・・あ、バしてたつてことね・・・・

「それにこの場に人を呼ぶなんてヤボなマネは無しだぜ?」こつちはこの警戒の中、たつた1人で乗り込んできた犯罪の芸術家に敬意を表して一対一の勝負を仕かけてやつてんだからよ・・・・・そう・・・・・優れた芸術家のほとんどは死んでから名を馳せる・・・・お前を巨匠にしてやるよ、怪盗キッド・・・・監獄という墓場に入れてな・・・・」

「・・・・へえ・・・・芸術家・・・・気にしてくれてたんだ、あの時言つたこと。

怪盗としては嬉しい限りだけど、
時間^{タイムアップ}切れかな?

「フ・・・参つたよ、降参だ・・・」

宝石を放り投げ、パーティーをめちゃくちゃにしたことを謝る。

でも、これだけじゃ終わらないぜ！？

あ、そうそう……」の服借りて救命ボートで運ばれてる女の子。

んでね

と言つて下着を引っ張り出したら、顔が真っ赤になっちゃった、あ
いつ。おもしれえ。
ま、今の隙に・・・

闪光弹！！

では、さらばだ！
また会いたいねえ
・・・あの
探偵
”

33

漆黒の星⑨（後書き）

ハイ、コナンくんの推理後編でした。

楽しんでいただけましたか？…と言つても、原作どおりなんですね。

とつあえず、次回で「漆黒の星」編は終わりです。
次回も読んでください…！

「ふえ——っくしょい……」

くそ・・・あのガキのせいで泳いで帰るしかなくなつたじゃねえか・
・。

力ゼ引いたらどうしてくれんだよ。寒い・・・。

4月の海はまだ寒いさみんだな・・・。勉強になりました。
あ～あ・・・。寺井ちゃん、迎えにきてくれねえかな・・・。

・・・お?あの光・・・。

「寺井ちゃん!!」

「ぼつちやま!『ご無事で何よりです・・・。わあわあ』

「ふ~助かつたぜ。サンキューな寺井ちゃん。」

「いえいえ、ぼつちやまに何かあつたら寺井は・・寺井は・・・
(寺井ちゃん・・・)

「それより、宝石は?」

「ああ・・・。失敗した。」

「は?今『失敗』とおつしゃいましたか?」

「ん?ああ・・・」

「そうですか・・・。それにしては、なんだか嬉しそうな顔をして
おりますね」

「ああ・・・。おもしろい”探偵”に会つたからな

「”探偵”と言ひますと・・・?」

「正体不明の小学生だよ・・・」

「小学生!?」

「ああ・・・。おもしろかつたよ、また会いたいな・・・」

寺井ちゃん、これは本当だぜ?あんなスリルたまんねえよ・・・。

翌日。

オレは見事にカゼを引いた。

「ひーっくしょん！！」

「まつたう、セリザベス号を見に行つて海に落ちるなんてバカみたい！」

とは、青子のセリフ。

「うつせえなあ・・・」

あのガキのせいで泳いで帰るしかなかつたんだよ・・・
なんて青子に言つてもしようがないから言わない。

「バカはカゼ引かないって、あれ嘘ね！」

「おい、それどういう意味だよ！？」

「そのまんまの意味よ、バ快斗！近づかないでよ、うつるから！」「こんなカゼ、すぐに治・・・ふえっくしょい！」「うー・・・寒氣してきた・・・。

ん？なんか後ろであの探偵くんの気配がしてるけど・・・。
まあ分からぬだろうね、向こうにほ。いつかはしつかりと気配消
してるし。
くそお・・・今度会つた時は覚えてろよ！–

「オマケ~

「なんじゃこりやーーー！」

盛大な叫び声は、新聞を見たせい。

あの探偵くんが1面トップ記事となり写真つきで載っていたのである。

『怪盗キッドを撃退!?』とか、『たった一人で漆黒の星を死守!
!』とか・・・。

オレは撃退された覚えはねえし、「死守」って・・・。

オレ攻撃してねえぞ?精神的ダメージはあつたかもしけれねえけど。

次の対決はオレの勝利で1面を狙うから覚悟しとけよ?探偵くん・・

漆黒の星10（後書き）

とつあえず、「漆黒の星」はこれにて終了いたしました。

次は、「奇術愛好家」です。

キッドのお話、まだまだ続くので、楽しんでもらえたら何よりです。

それでは、今後もよろしく願いします。

奇術愛好家1（前書き）

大変長らくお待たせしました。
奇術愛好家編スタートします。

オレがそのチャットを見つけたのは、偶然だった。

もともと、キッドとしての情報集めはパソコンから手に入れること
が多かつたけど、

たまたまマジックのサイトも見てみよつと思い、のぞいたのがその
サイトだった。

名前は”奇術愛好家連盟”。そのサイトの中のチャットに参加して
る人の中で気になる人物を1人発見したんだ。

それは「イカサマ童子」というHN。ハンドルネーム

これは、春井風伝さんがデビュー当時に使っていた名前だった。

調べてみたら、すぐに分かった。彼本人だつたのだと……。

オレはそのチャットに参加し、「レッドヘリンギング」というHNで彼
がやると言い出した脱出マジックの前日に励ましメールを送つてお
いた。

彼はそのマジックに失敗し、亡くなってしまったけれど……。

そんなことがあつた1ヵ月後ぐらいに、そのチャットのメンバーで
オフ会をやることが決まった。

もちろん、参加するといつ返事を出しておいた。気になることもあ
つたし……。

オレは、怪盗キッドといつ名前を並び替えた”土井塔克樹”という
名前で参加することにした。

気になることは次の2点。

「イカサマ童子」は、亡くなつたはずなのにまだチャットに参加し

てこる」。)

そして、もうひとり・・・。

「魔法使いの弟子」ということで入ってきた、あの鈴木財閥のお嬢さん。

もしかしたら、あの探偵くんのことが聞けるかもしれないしね。

という理由から参加したオフ会のはずだったのに、殺人事件に巻き込まれることになってしまったんだ・・・。

奇術愛好家1（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロ口です。

先日、「早く書いてー！」というメッセージをいただき、至急執筆に取り掛かせていただきました。

遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

さて、奇術愛好家・・・。これも、キッドがカッコいいんですね！ということで、ラストをどんな感じにするかは決めてあつたんですけど、殺人事件の描写がどうにも出来なくて・・・。どうやら、事件の話は苦手みたいですね、うち。

そんなわけで、軽い言い訳をしつつ、これからも頑張つていくので、どうか暖かい目で見守ってやってください。

お願いします m(— —) m

オレがそのペンショーンに着いた時には、あのお嬢様と、「影法師」さんと「脱出王」さんが来ていなかつた。

とりあえず、荷物を置きに部屋へ上がらせてもらひつ。すると、

「お待ちしてましたよ！」とこうオーナーの声が。

お、来たかな？

窓から眺めると、なにやら人だかり。。。

おや、探偵くんまで・・・ん？マスク？風邪でも引いてるのかな？

とりあえず、下に降りてみるか・・・

お嬢様に「あれ？もしかして『魔法使いの弟子』さん？僕ですよ、土井塔克樹！」

ん？なんかがっかりしてる？何期待してたんだか・・・。

「やっぱり女の子だつたんだね～！感動」

すると、「僕も泊まつていい？」と探偵くんの媚びた声。

探偵くん・・・ダダこねるんだ・・・。

あの対峙の時はそんな様子、少しも見せてなかつたの・・・。意

外

さてと、探偵くんも帰つたところで、ボーデリーダーである「脱出王」さんに連絡してみることになつた。・・・が、電話でんわ・・・。

もちろん、この時点で死んでるなんてこと、分かるわけなかつたんだけどね・・・。

とりあえず、自分の部屋のベッドシーツをかえるために再び部屋へ・

・・。

フウ・・・すつと変装してゐのはしだいや・・・。体も重いし・・。

それにもしても、探偵くんが現れるとは思わなかつたな・・・。ハハハ。

ビックリするじゃん！――

そして、そのオレをやひにビックりさせる発言が飛び出したのは、

昼食の時だつた。

奇術愛好家の集まりなだけあつて、やつぱり話のネタといえば「尊敬する日本のマジシャン」。

さりげなく、オレの親父 黒羽盗一を出してくれたオーナーに感動！

で、やつぱりオレも親父は尊敬してゐるわけで・・・。

つて感じで、続いていつて鈴木財閥のお嬢さんの番になつた時、「そりやー、もちろん怪盗キッド様よ！」なんて言つもんだから一瞬気配が出掛かつてしまつた・・・。あつぶね～。気づかれてないと思つけど・・・。

「日本人がどうかも分からぬし・・・」ヒーマカしても、オレと
言い張る彼女。

確かこの間オレに自分ちの宝石狙われてなかつたつけ・・・？
いいのか？お嬢さん・・・

奇術愛好家2（後書き）

みなさま、どうも読んでくれてありがとうございます。ペロコです。
はい、やつちやいました！！

快斗くんのダジャレ攻撃

いつたい何人の人が笑い、何人の人があきれたのか・・・。自分で
も予測不可能ですね・・・。あきれたのが多いに決まっていますよね。
・・。コテコテのダジャレ、失礼しました。

ゼひぜひ「自分はこうだった！」と報告してくれたら嬉しいです。
最後の快斗の疑問は、いつもうちが園子ちゃんに思っていることです。
す。いいのか？と・・。代弁してもらいました。

それでは、みなさん、次は奇術愛好家3でお会いしましょう！
ペロコでした。

。 そんなビックリの昼食も終わり、再び電話をしようと思つたら・
つながらないらしい・・・。つたく、どーなつてんだ!?
そんな中、毛利さんが玄関先へ・・・。どうしたんだろ?

そしてそれが分かつたのはその3分後。毛利さんが探偵くんを抱えて中に入ってきた時。明らかに熱が上がつていそうなその様子にオレは

「まず君の部屋のベッドへ運ぼう。タオルで汗をふいといてあげて」と言い残し、俺の部屋へ大急ぎで戻る。

まったく、こんな時に役立つとは思つていなかつたけど・・・。解熱剤。

「どこで何が起きるか分からぬもんだねえ・・・。

毛利さんの部屋へ急いで向かう。

「見たところただの風邪だと思つので、薬を飲ませて安静にしてればすぐ楽に・・・」

『なると想ひますよ』 という言葉の前に、鈴木財閥のお嬢さんの鋭いツツツツツツ。

「見たところつて?」 と、うので遮られてしまつた。

けつこうイタイとこつくねえ・・・。まさか『銃で撃たれたのを自分で手当したことある』なんていえるわけないし・・・。
「僕、医大生なんですよ!」 と、まかしておいた。ハハハ・・・。

オーナーの提案で再度、「脱出王」さんに連絡を取ろうとするが・・・

。

やつぱり電話がどこかで断線しているらしい。

とこりことで、仮のリーダーを決めることになったんだ。

すると、浜野さんの提案でマジック風に決めることに・・・。

鈴木財閥のお嬢さんに田隠しをして、そして、田中さんが紙に名前を書いていく。

そしてそれを田中さんは鈴木財閥のお嬢さんに渡す。

浜野さんが、×、×の印を描くように指示した。なんでも、は
仮のリーダー、×は宴会部長（（）のオレの抗議は軽く流され
た）、は風呂焚き係らしい。

すると浜野さんは『予警』とか書いて出して、次々に並べていく・・・。

が黒田さん、が田中さん。

（）まではよかつた。

になつたとき、浜野さんは『予警』でオレと書いて出したのだが、
なんと実際は浜野さん自身ーとつあえず、部屋を追い出すようつこ
て、ネタを考えてきてもらひ。

それにもしても、（）のマジック・・・

奇術愛好家3（後書き）

たびたび話していますが、更新が遅れて申し訳ありません。ペロコです。とりあえず、奇術愛好家3は楽しんでいただけたでしょうか？今日は、コナンが再びここへ、ペンションに戻ってきたというのと、浜野さんのマジックですね。

前者はコナンの手当をしていた時の快斗の「まかし『医大生』と言つ言葉がけつこう気になつてまして・・・。

後者は快斗があたりでマジックの仕掛けに気づいていたかということですね。まあ、うちの読み方は最初から！ということなんですが・・・。みなさんはいかがですか？といふか、最後に言つじやんつて？はい、そうですね・・・。

それでは、こんなおまな作者ですが、これからもよろしくお願ひします。また、何かメッセージなど送つてくださいとすくべあります。お願いします。
それではまた。

奇術愛好家4（前書き）

ようやく事件が・・・！

オレの疑問をよそに、とりあえずそれぞれの人が自分の役割についてことになった。

浜野さんは自室へ、田中さんは風呂焚き場へ。

そして、黒田さんとオレはここで晩御飯の準備。

オーナーはワインを取りにワイン蔵へと向かった。

鈴木財閥のお嬢さんは、探偵くんの様子を見に行つた。

さて、準備も順調に進み、みんなほちほちと帰つてきた。

まだ来ていない「影法師」さんと「脱出王」さんの話をしていたら、急に

「来ないよ・・・」

という探偵くんの声がした。

なんと、「脱出王」さんが自宅のマンションで殺されたと言つのだ！そして

「殺された西山さんのそばにあったコンピューターのモニターに伝言^{セイジ}が残されてたんだ・・・」まずは一人目、影法師”ってね・・・

「こう探偵くんの衝撃的な告白！――

わざわざそれを伝えるために戻つてきましたとこつ・・・。

そして、田中の「浜野さんも一人の口論に口を挟んでとぼっちりを受けてたわね・・・」といつセリフに、浜野さんに伝えようといつことになつた。

浜野さんの部屋に入ると彼はおらず、そのかわりに窓が開いていた。すると、その外には・・・！

みんな外に飛び出し、オレを先頭に彼の元へ行く・・・が・・・。

「来るな！来ても無駄だ・・・もう死んでるよ・・・それにこれ以上、現場を荒らしたくない・・・」

すると探偵くんが後をついで、

「見て分からない？死体はロッジから10m以上離れてるし、その死体の周りには、今駆け寄つたあの人の足跡しかないんだよ？」と詳しい説明をしてくれた。さすがだな。

「そう・・・これは翼を持たない人間には到底成し得ない犯罪・・・不可能犯罪だ・・・」

オレたちの間を冬の冷たい風が通り抜けた・・・

奇術愛好家4（後書き）

「んにちは、ペロコです。

奇術愛好家4はいかがでしたでしょうか？いよいよ事件が起こりました。この日は快斗にとつて、災難な日でしたでしょうね・・・。さて、昨日はサンティーにて「まじっく快斗」が4年ぶりに掲載されたということで、かなりハイになつておりました、ペロコドン）ざいます。いやあ・・・。本屋でうちを見かけた人がこれを読んでる中にいのを祈りますね。すごい顔でニヤニヤしてたと思うので、通報されてしまう可能性もあつたわけあります（笑）

さて、奇術愛好家4のお話ですが・・・

ここでは事件が起こつたというのを中心にはかせていただきました。毎回悩むのですが、どこで区切ればいいのかと。原作の方では続いているも、ここでは区切つてしまつたりするので、イライラされてるかたとか、いらっしゃいます？けつこう不安なのですね。1話がだいたい、600~800字ぐらいでいつも書かせていただいているのですが、短いのでしょうか？

何か意見・感想などありましたら、メッセージまたは感想にてお知らせください。

それでは、これからもよろしくお願いします。

奇術愛好家5（前書き）

快斗の意味深なセリフが続きますが・・・。
心境はこんな感じでいかがでしょうか？

『これは翼を持たない人間には到底成し得ない犯罪……不可能犯罪だ……』

「確かにそうね……こんな広い裏庭の真ん中に足跡を残さず移動するなんて出来ないわ……」と田中さん。

「どーして殺されなきやいけないの！？」と、毛利さん。

「理由はまだ分からぬ……今言えるのは死因が絞殺だということ。誰かが細い糸のようなもので、首を絞めて殺し、ここに運んだ」ということだけさ……」のロッジの近辺にいる誰かがね……」

「……はっ！オレは何をペラペラとしゃべってるんだ！？それも探偵くんの目の前で！」

「いくらなんでも、一般人がここまで詳しく話せるわけねえってのに……」

すると、探偵くんが「つり橋は落とされた」なんてすここと言つもんだからつい、

「つまり僕たちは外界と完全に隔離されちゃつたわけだね……」と思わずつぶやいてしまつた……。探偵くん、怪しいと思つたよね……。さすがに。

もう……ポーカーフェイスさまよだよ。ボロボロだ。

とりあえず、中で助けが来るのを待つことになつた。

すると、園子嬢が、「浜野さんが殺されたのは自分のせい」みたいなこと言つから、気にすることはないと励ましておいた。そう、宝

くじと同じようなものなんだから・・・。

それに・・・それにあのマジックは・・・

・・・と、探偵くんいわく、「ここで待ってたら警察呼んできてやる」と毛利迷探偵に言われたらしい。警察かあ・・・。話すの避けたいよな・・・。

とりあえず、みんなで浜野さんたちが殺された原因を探つてみることにした。

で、すぐに結論。

『チャット』

つまり、「影法師」さんが犯人ということ・・・。

「もし、『影法師』さんが犯人だとしたらあの不可能犯罪をしたことになります・・・。僕たちの目の前で血塗られたマジックショーをね・・・」

奇術愛好家5（後書き）

みなさま、じんにちは。ペロ口です。

奇術愛好家5を読んでいただきありがとうございました。年の瀬に、とりあえずここまで投稿させていただきました。いかがでしたか？ けつこうキザなことを連発する土井塔さん。心境はいかがなものかと推測してたら、結果『焦り』ということになりました。

いくら事件が起きてたとしても、普通の人間があそこまで死体の状況を確認できるとは思えませんしね。「医大生」と名乗っていたとしても。ということで、ポーカーフェイスで焦りを隠していましたといふことにさせさせていただきました。

次のお話はもちろん年が明けてからということになりますが、次は今までよりも文字数を増やすつもりです。一氣にお話が進みますので、どこまでいくのかなーと予想立ててみてください。
あ、いやですか？失礼しました。そこは、『ご自分の判断におまかせします。

では、来年もキッドsideをよろしくお願ひします。そして、感想・意見などお待ちしております。

『僕たちの田の前で血塗られたマジックショ―をね・・・』

こんなオレの発言のせいでもみんな固まってしまった。ヤベ・・・。
不安がらせてビーすんだよ・・・。

すると天の助けか、田中さんが「羽織るものがほしい」と言い出し、
さらに毛利さんが探偵くんに着せるものを取りに行くと言ひ出した
ので、ついていくことにした。

用心深く部屋のドアを開ける。

田中さんの「部屋に入るぐらいでビクビクしなきやいけないなんて・

・・」というセリフがいかにも的を得ていた。

着替えながら探偵くんは毛利さんにいなかつた時のことを見てい
る。

と、田中さんが早くしてほしいと頼んだので、中断された。
さて、次は田中さんの部屋。部屋に向かう時オレは必死に考へてい
た。

「影法師」が本当にこのロッジに潜んでいると考えるのは難しい。
オレたち以外に人の気配がしねえ・・・。なら、誰が犯人?

それにもうひとつ気になるのはあのマジック・・・。あれは・・・
と考えていたらパリン!—とガラスの割れる音がして、ボーガンの
矢が壁に突き刺さる。

そしてなぜか田中さんが窓を開けてしまう!

何やつてんだ!—と思い止めようとしたら今度は下でパリン!—と音が。
そして園子嬢の悲鳴!—

あわてて階段を駆け下り、そこへ行くと鏡に矢が!そして、窓が開
いていた・・・。

・・・と、田中さんがやつてきて、外に飛び出してしまった。

「どこの誰だか知らないけど、ansom隠れてないで出てきなさいよー」と

叫んでいる・・・。すこ一度胸。いや、感心してる場合じゃないんだけどわ。

つてあれ?足跡だらけ。

するとオーナーがボーガンを見つけた。

よつて、オレ達の中に犯人はいないといふことになつたのだが・・・

「くそつ！－」

探偵くんが振り返つたが気にしない。これはオレの問題だから・・・。

なんでのマジックの時に少しでも疑わなかつたんだ!

そしたら・・・くそつ！－

とりあえずみんな戻ることになつた。

と、横で園子嬢が滑つたから慌てて受け止める。

「大丈夫?」と聞くと「ええ・・・」と答えた。

本当、おつちよこちよいなお嬢さんだな・・・

奇術愛好家6（後書き）

みなさま、明けましておめでとうございます。ペロ口です。
新年明けて2日目。奇術愛好家を更新させていただきました。この
小説、続々と読者数が増えており、なんとも嬉しい限りです。
さて今回。

前回少し長めと言つたのですがたいして変わらなことが判明しました。やはり長い文章はなかなかかけないのでよ。スマセン。
話の内容としましては・・・。

やはり最後の快斗の意味深な行動の解明に全力をそいだのですが・・・。分かっていただけましたか？
どう解釈すればいいのか、かなり悩みました。快斗は反省してたんですね。あのマジックの時のこと。

一応、詳しく書くのは伏せさせていただきます。
最後にきちんと書くので・・・。

さて、ロッジに戻ったあとのみんなの行動。
次回はセリフが多くなりそうです。
では、今年もよろしくお願ひしますね。
評価・感想お待ちしています。

奇術愛好家7（前書き）

会話が多いですね。今回は。

誰がどのセリフを言つてるのか分からなければメッセージでもください。お答えさせていただきます。

と言つても、マンガを見ればすぐに分かるのですが・・・。
ではどうぞ・・・

とつあえずロッジに戻ってきたオレ達に探偵くんは事件当時のアリバイを聞いてきた。

探偵くん行動開始だな。

やはりみんな外に犯人がいると思つてゐるのか、探偵くんの行動を怪しがる。

ので、助け舟。

「せうだね、この際はつきりさせとこいへ。オレはその頃黒田さんと食器を並べて宴会の準備をしていたよ。……ですよね？ 黒田さん。

」

と言えば、あとは次々と話がつながつていぐ。

「ええ・・・並べ終わつた後キッチチンに行つて手伝いを・・・」

「手伝いつて？」と探偵くん。

「荒さん（オーナー）に言われてツマミを作つてたんだ」

「黒田さんがキッチンにいる時土井塔さんは？」

「あ、ああ・・・宴会用に持つてきてたクラッカーを取りに部屋へ・

・・・

「へー・・・クラッカーねえ・・・」

な、何だよ、その疑いの目は！？ 本当のことだよ！

はつ！ まさかもう正体見破つちゃつてたりする？

と、園子嬢が「コナンくんの具合を見に蘭の部屋へ行つた」と言つと、毛利さんが答えて「一人でこのリビングに降りてきた」と言つた。

田中さんは「薪で風呂を沸かしてた」、オーナーは「ワインを取りにワイン蔵へ」という。

時間は約8分。オープンを使つていたから間違いないそうだ。

「でも、ワインを取りにいくのに8分もかかる？」と探偵くんの抗議。

「ワイン蔵に新しい鍵をつけたのを忘れてて、部屋に録りに戻つてたから……」

「新しい鍵?」

「なんなら直接見てみます?」

とこり」と、みんなでワイン蔵く……

前に泥棒に入られてしまつたやつだ。ちなみにオレドはなーーー！
すると探偵くんはついでに風呂焚き場まで見たいと言に出つた。
ひれしに登れば、誰でも2階にいけることが分かった。

・・・ん？あれ？探偵くんがいない？またあのボウズ……勝手に・
・・

と思つて探しに行つたら、思つたよつすぐ見つかった。
なにやら必死になつて考え込んでるやつが、まつたくオレに気づいていない。

とこり」と、からかい半分に、

「操作は順調に進んでるかい？探偵くん？」と尋ねたら
「まあ、まちまち……」だつてや。

毛利さんたちも追いかけてきたので、おひしてやる。
すると園子嬢にマジックのことを詳しく述べていた。
とこり」とは、だいぶ分かつて来たのかな？探偵くん……

奇術愛好家7（後書き）

はい！みなさま、じんにちは。ペロロです。

奇術愛好家もかなりの人気があるのか、たくさんの方の感想やメッセージありがとうございます。本当に励みになります。今、宿題に追われているのですがそんなことほつたらかしにして書いています（大丈夫なのか？）

さて、話を戻しまして、今回前書きにも書きましたが、ひたすら会話が多いです。まあ、事情聴取みたいな感じですからしうがないんですけどね。あともう一回セリフだらけになるのが、コナンくんの推理シーンですね。これはもう少し先になると想いますが。

それと、「ナンくんが疑いの田を土井塔さんに向けた時のマンガでの土井塔さんのこの「・・・」のセリフ。心中ではこんな風に思つてしましました！…と自分で推理（笑）いかがですか？毎回言つことなんですが、本当に不安なんですよ。

こんな風に思つてないんぢやないか！？と反発の声とかきそつで…。今のところきてませんが、嬉しいかぎりです。じ賛同してくれる方々、本当にありがとうございます。

そして、これからもこのキッズsideをお願いします。それでは、感想・評価・メッセージなどお待ちしています。

中に入つて、コーヒーを入れて落ち着くことになつた。

と、オーナーがワインを持つてきた。「軽く一杯」といひことらし
い。

すると、探偵くんがワインを手にとつて・・・つてあれ? 表情が変
わつた?

あの時オレを追いつめたあの笑み・・・もしかしてこの事件解けた?
と思ってたら急に冬休みの工作をやりたいとか言い出すし・・・。
見間違ひだつたのかな? オーナーについていつた探偵くん。

そんな彼の姿は、5分後消えていた・・・。

オーナーによると、トイレにはおらず、しかもボーガンの矢までな
くなつているらしい。

どういうことだ!?

まさかあの探偵くんがやられることはないと思つんだけど・・・。
と、探偵くんの悲鳴2階で!..ドタドタとみんなで階段をのぼつて
いく。

ようやく発見した探偵くんにホツとしたのもつかの間。

またしても窓ガラスが割れてボーガンの矢が!

そして急に探偵くんは外に飛び出し右側の林へ。

ようやく追いつき、毛利さんにつかまれた探偵くん。

あれ? 笑つてる?

と、園子嬢に呼びかける。「うまくいったよ!」と。

すると、急に園子嬢が・・・これつてもしかして噂に聞いた・・・。

園子嬢が毛利さんにボーガンを取るように言い、浜野さんの部屋へ

行くよに指示した。

そして言った。

「私と蘭とで再現するのよ・・・。今夜この裏庭で犯人が演じた血塗られた奇術ショーをね・・・」と・・・。

探偵くんが後ろで園子嬢の声を出してるみたいだけど・・・。あの機械・・・何！？

とりあえず、ボーガンを持つて毛利さんが走っていく。

そして、オレはついていく。そばにあつた木に盗聴器をしかけて。

「長ーいヒモとハサミがあれば、この不可能犯罪は可能になるのよ・・・」

と前置きし、探偵くんの推理ショーがスタートした。

盗聴器の状態も良好だね

オレはそのセリフを背に毛利さんのあとを追いかける。

さて！

じっくりと聞かせていただこうか、探偵くん？

奇術愛好家⑧（後書き）

みなさまにありがとうございました。ペロロです。

今回も読んでくださいありがとうございました。
さて今回。

奇術愛好家でコナンが動き出しました。よしやくです！ どんだけ時
間がかかつてんだ！？と文句の声が聞こえてきましたが・・・。
スマセン。

自分でもかなりゆっくりになってしまってたなと思ってるのですが
・・・ 2・3日に1話のペースですね。最近は。学校が始まつ
たらもっと難しくなると思つので、もつと早くやりたいのですが・
・。申し訳ないです。言訳がましいですね。

コナンの推理は次回からとことこになります。今回は前置きだけで・・・。

大体、あと3話ぐらいかな、奇術愛好家は。
それでは、これからもよろしくお願いしますね。
評価・感想お待ちします。

奇術愛好家9（前書き）

はい、いよいよやつてきました～！コナンの推理ショーカなり原作に忠実に書いてるつもりですが・・・。多少は省略・言い換えなどあります。ご了承ください。

では、どうぞ～（^ ^）

「盗聴器から探偵くんの推理が入ってくる。」

「まず、一本のボーガンの矢の後端に穴をあけておき、そこにヒモを通して小さな輪を作つて結び、その一つの輪にあらかじめ長さを測つておいたヒモを通すのよ。ヒモの中間に別の一本のヒモを結わえつけた長いヒモをね！そして輪に通した長いヒモの両端をベランダの手すりに結びつければ準備OK。後は、矢を一本ずつボーガンで撃ち放つだけ……。」

「こう声をバックに毛利さんのいる部屋へ……。」

探偵くんのいる木の根元を狙うのか……。了解

「待った！」と言つて、毛利さんの手を止める。

「僕が代わりに撃つてあげるよ……こいつの得意だから……。」

「ランプ銃使つてりやね……。」

「いいかい、園子探偵？」と尋ねると、了承の返事。

「んじゃー、お言葉に甘えて……。」

パシュウ！

お！「ビンゴ」

そして、もう一本をちょうど向かいの木の根元に撃てば……。

「矢によつて作り出されたヒモの形が、まるでヨシトのマストに張られた一枚の帆を形どるよ……だそうだ。」

そして、フトンを縛つたヒモについている小さな輪に、ヨシトのマストに当たる一本のヒモの片方を通す。

そのフトンをベランダからロープウェイのようにならせるべ……。

「死体は見事、裏庭の中央に……。」

浜野さんの場合は、ベルトの穴に通したりよこしと。

後始末は・・・

「ヨシ、マストにあたるもう一本のヒモを矢に結び付けて、左右どちらかの林の上空めがけて撃つてちょうどいい！ベルンダに結びつけたヒモを切るのと同時にね！」

という指示に従つて撃てば・・・

ヒモだけ抜けたんだな、これが・・・。

しかし、問題が一つ。矢が木にささつたままとこいつこと。

「だから犯人はつり橋を燃やして私達を外界から隔離したのよ！警察が来る前に矢を回収するために・・・そうでしょう？犯人の田中貴久惠さん？」

つて言つてる探偵くんの声を聞きながらオレは毛利さんを眠らせて隣の部屋へ今のうちに運んでおく。

おそらく、ここに探偵くんがやつてくるだらうから・・・

奇術愛好家9（後書き）

「んにちは、ペロコです。

いかがでしたか？「コナンの推理第1部」。セリフが多いのが特徴らしいですね。

コナンが一方的に話してゐるのですが、キッドの心情を聞ではむのがけつこう難しいんですね・・・。

次のお話も「んな感じで続くと思いますが、またよろしくお願ひしますね。」

それでは、次はなんと、「1話目なんですね。全部で、ビックリです。」

応援してくれてるみなさま、あつがとうござります。

奇術愛好家10（前書き）

コナンの推理第2部です。

投稿するまでに時間がかかり、間が空いてしまったので、どうまで
いつたか分からぬといつの方は、戻つてお読みください。
でも、最後の一言は冒頭に書いてるんですけどね。

では、コナンの推理をどうぞ～

『 そうでしょう？ 犯人の田中貴久恵さん？』

田中さんはやはり否定していた。『自分は襲われた』ではないかと。しかし、探偵くんにとつてみれば『仕掛けは簡単』らしくて……。

「窓の上の壁にホツチキスのハリを打ち込みそれにヒモを結わえつけ、そのヒモの適当なところにオモリをつけ、あまつたヒモを上の階の手すりの柱に通し、窓の下から部屋の中に入れればいいこと。そして、そのヒモをベッドの上で固定し、洋服で隠しておけば、服を取るフリをしてヒモを切ると、窓ガラスが割れ、それと同時に隠しておいたボーガンを背中越しに撃ち、矢に気をとられている間に、ヒモを再び引っ張り上げ、カーテンを開けガラスが割れているのを見れば、外から矢を撃ち込んだように見えるって寸法よ！」

・・・なんとまあ、すげートリック。でも、あの後風呂場にも・・・

「あの仕掛けも同じく簡単！」と前置きして、推理再開。
要約させてもうひとつ・・・

オモリのついたヒモを風呂場の窓の上にホツチキスで止めて、ヒモを手すりから上に通し、ストッパーをつけ窓の下にはさむ。すると、窓を開けストッパーを外せばガラスが割れる。矢はあらかじめ撃ち込んでおけばOK。

そして、オレらが風呂場へ向かっているスキに仕掛けを回収。ちなみに、林の中で見つかったボーガンは、田中さんがあらかじめ

つけておいた足跡にみんなが氣をとられているすきに放り投げたもの。

田中さんがあの時しりもちをついたのは、木にさわった矢をぬいた反動。

しかし、田中さんはまだまだ食い下がる。『風呂を炊いていたから』と。

「あの時、浜野さんの奇術マジックのサクラをやつてたあなたなら、誰が何の係になるか分かつてたはずよ…」

そつ。あのマジックは、印を仕込んだ紙の順番を知ってる者が紙に名前を書き、それを奇術師マジシャンが言い当てる手品。

田中さんは印をつける園子嬢に、かけないペンを渡したのです！！つまり、園子嬢は目隠しをしていたし、また周りのみんなは書けないペンだと気づかず、園子嬢が書いたものだと錯覚させるマジック。

よく分かつたなあ・・・話聞いただけなのに。

「そんなに言うならあるんでしょうね！？証拠が！！」

「あら、証拠ならあるわよ、あなたのブーツの中に矢の後端に輪がついたもう一本の矢がね！わたし見ちゃったのよ・・・。ここにきてあなたが矢をブーツの中に入れるのをね。影法師もおそらく、事件の罪をかぶつてもうために田中さんが作り出した架空の人物。もつとも、『田中貴久恵』の名もIROも、別の人を使ってるかもしないけどね・・・」

「『田中貴久恵』もそのIROも正真正銘私のものよ・・・あなた達にそそのかされて死に急いだ『春井風伝』の孫娘のね・・・」

奇術愛好家10（後書き）

みなさんーはい、ペロペロでいざります。

奇術愛好家10話目ですね。キリのいいところで、漆黒の星と同様に、10話目で終わらせたかったものの、「長すぎはしつけの作品に似合わない！」と勝手な判断の結果、またしても伸ばさせていただきました。スマセン。これでも、今までの話よりも文字数多いんですよ？

さて、今回は、「ナンの推理第2部」と勝手に命名し、話を書かせていただいたのですが・・・。いかがですか？途中、キッドの要約とさせていただいたのは、あまりにも「」が多くなりそうだったので、という単純なことなのです。まあ、原作をそのまま『』すわけにはいかないので。

さあ一次回は、奇術愛好家ラストです。

終わり方・・・これでいいのか？と自分でも疑問なのですが、受け入れてくれる事を祈つて・・・。

それでは、次のお話「奇術愛好家11」でお会いしましょう（^ - ^）/

奇術愛好家11（前書き）

奇術愛好家いよいよ最終話です。
お楽しみください・・・

『春井風伝の孫娘のね・・・』

「は、春井風伝の孫娘！？」と驚きの声が聞こえる。
春井風伝さんは、田中さんのＨＤを使い、「イカサマ童子」として
交信していたらしい。それに気づいたのは、遺品を整理していた時。
そして、今回の動機は・・・

「許せなかつたのよ・・・おじいちゃんが事故死した後の西山さん
と浜野さんとのあの『メントだけは・・・!』

そう、その『メント、オレも覚えてる・・・

“いやー、舞台の上で死ねて彼も本望でしじう（笑）”
“年寄りの冷や水ってヤツですか？（^ ^・）”

・・・確かにヒドかつた。

しかも、春井風伝さんは、あの脱出マジックが成功したら正体を明
かすつもりだつたらしい・・・。

「でも、彼は気づいてたみたいよ・・・あのシニーの前田におじい
ちゃんに励ましのメールがきてたから・・・」

「彼つて？」

「土井塔くんよ・・・」

「でも、どーして彼が！？」

と、聞いてたら廊下から『シコツ』と足音が・・・

「それはおそらく彼も奇術の使い手だからかな？
（マジック）

土井塔克樹はアナグラム・・・文字を並び替えると・・・」

「「怪盗キッド……」」

力チャヤとドアが開くと、そこには探偵くんの姿。

「見事な推理だつたぜ、探偵くん？」

「蘭はどこだ？」

開口一番それかよ・・・せつかく褒めてんのに・・・
「隣の部屋でかわいい顔して寝てるよ。どうもあの手の顔には弱くてね・・・」

青子に似てるんだよ、あの幼い寝顔が・・・。

「レッドヘーリング・・・おまえのハンドル通り、惑わされるといふだつたぜ・・・」

おいおい、別に惑わすつもりは無かつたし、ここに来たのは、イカサマ童子が交信を続けるのを不信に思つたから。

そして、園子嬢におまえのこと聞けるかと思ったからだよ・・・まあ、後者の方は口に出して言つことじやねえけどな。

「彼女を一目見て孫娘と分かり、サクラの事も見抜けたが、まさか殺人とは・・・気づいた時には手遅れ。情けねーぜ・・・

「感情的な性質は時には推理を妨げ、眞実から遠ざける・・・止めたかつたよ、今回の殺人は・・・

それは違うだろ?」

「オレは探偵じゃねーし、お前は風邪でぶつ倒れてた。仕方ないさ・・・

・・・

つて言ったところで、救助のヘリの到着。もうお別れの時が来たようだな。

「また会おうぜ、名探偵・・・世紀末を告げる鐘の音が鳴り止まぬうちに・・・」

POM

と、ハンググライダーで飛んでいく。へりとすれ違う。
キザつて思われてもいいさ・・・。

探偵くん、気づいたかな？

初めて“名探偵”と呼んだことに。

オレはお前の実力認めてるよ。あの事件、しっかりと解決してみせ
たじゃねーか。

それにも・・・

本当にあのボウズ・・・小学生か！？

奇術愛好家11（後書き）

「、じんじは。ペロ口です。

いかがでしたか？今回で、奇術愛好家編は終了でござります。

ラストは・・・いまだに自分でも疑問を感じた終わり方なのですが、これでいかがですか？何度も練り直して、結局この形で落ち着く事になりました。

キッドが「名探偵」と呼んだのは、これが初めてなのです…ひとつことに気づき、こうなりました。

感想が怖いですが・・・

感想・評価お待ちしております。

これからもキッドsideをよろしくお願いします。

みつなせ～ん！

ここにちは！黒羽快斗です 楽しんでいただけてるでしょうか？
最近、読者数が、2800人を突破しかなり舞い上がっているペロ
コが横で「喜びの舞」を踊っております・・・。

ここは、みなかつたことにしてあげてください・・・。

黒羽快斗の切実な願いです。というよりも、見なかつたことにして
おいたほうがよろしいと思します。もう、それは言葉に出して表す
のも難しいほどものでしたから・・・。

POM

みなさま、こりにちは、怪盗キッドです。

雰囲気を変えるために引っ張り出されました・・・。

さて、この度は、読者様からたくさんのお援メッセージなどいただ
き、先日「奇術愛好家」が終了いたしました。

こりやつて改めて登場させてもらつたのには、理由があります。^{わけ}・

簡単に申し上げますと、ちょっとした休憩場なのです。

長々と語つをやってますと、最近本誌にも載り、忙しいので疲れて
るんですよ。

ところがことで、こりのよつて休憩の場を設けさせていただきました。

さて、休憩と言つても、あまり話すことはありませんが・・・。

そつこえは、前回の終わり方、いかがでしたでしょうか？私が彼の
ことを“名探偵”と呼んだのは、あそこが初めてなのですね。

まあ、あの事件をすぐに解決したあの推理力・そして、毛利さんが

危険だと知った時に、風邪を引いていようと床つてきた時の行動力。
・・。

この時はただ者じゃないとしか考えてませんでしたが、次会った時にその正体に気づくのですね・・・。

・・・もう、お分かりですね？次は、「世紀末の魔術師」をお送りします。

今これを読んで「え～！？」『黄昏の館』じゃないの～！？」と思われた方、申し訳ありません。

冒頭にて、私が述べた挨拶、覚えていきますでしょうか？

『原作すでに書かれていても放送されていなければ、そこはカットさせていただきます。
あ、映画の方もですよー。』

これですーーの『映画』といつのには、「『世紀末の魔術師』をやりますよ」という意味も含まれていたのです。

とこうじとで、次回からは「世紀末の魔術師」をお話せていただきます。

映画だったということで、かなり長めになることが予想されます。なかなか話が進まなくて、たまにわほつてしまふこともあるかもし

れない、勝手な作者ペロロですが、「よろしくお願ひします」と書つていました。

では、また次にいついた休憩の場が設けられた時はお会いしましょう。

ちなみに、ペロロの書いた手紙によると、「題名に『一』とつけていますが、またやるかは未定」なのだそうです・・・。

小休憩1（後書き）

みなさま、じんじちは。ペロロです。

ちょっと息抜き程度に書かせていただきました。

快斗＆キッドのちょっととした裏話的なお話。

あ、ちなみに、「喜びの舞」は本当に踊つてたんです。キッドの音楽、あるじゃないですか？あのBGM。サントラに収録されてるやつなんですが…。あれにあわせて適当に踊つてたら、弟に発見され、冷めた目で見られました…。

本当に、2800人というかなりの方に読んでいただけて嬉しい限りです。ありがとうございます（^ - ^）／

さて、次は「世紀末の魔術師」をお送りします。

これは、コナン＝新一というのがキッドにバレるとこ(?)とで、避けられないお話なので…。

「黄昏の館」だと考えておられた方、スマセン。

では、これからもよろしくお願ひしますね。

構想は、少しずつ考えておりますが、まだ確定していないので…。どういう始まり方にするべきか…。

ではでは、次のお話「世紀末の魔術師1」でお会いしましょう。

世紀末の魔術師1（前書き）

よひやく、スタート！世紀末の魔術師！
まあまあ、冒頭のキッズのシーンからいつてみましょ！
でせじりわー

みなさん、こんばんは。毎度おなじみ怪盗キッドです。

今宵の狙いも、もちろんビッグジュエル！

米花美術館に展示されているトパーズ“月夜の輝き”をいつものように華麗に盗み出すことに成功し、今、私の自慢の羽根、ハンググライダーで米花町上空を飛行中……。
もちろん、おなじみの中森警部がパトカーを何台も走らせてこの私を追いかけて来ています。

ちょっと疲れたので、休むために立ち寄ったとあるマンション。

すると、ベランダの戸がカラカラと開いて、そこには1人の小さな女の子の姿が。

その女の子は

「あなた、誰？ ドラキュラさん？」って聞いてきたんだけど……。
ド、ドラキュラって……（泣）

しかし、ポーカーフェイスをぱつちりとはりつけ、膝まづき、左手を手に取りながら

「いや……飛び続けるのに疲れて羽根を休めていた、ただの魔法使いですよ、お嬢さん！」

と、バツチリとウインク付きで決める。

・・・と、次の瞬間、このベランダをライトが照らした。

私のせいとはいえ、住人に迷惑がかかるのでは？と思いつつ、「じゃあ、またな。お嬢さん」と、あいさつをして、ハンググライダーで飛び立つた。

その後、警察を振り切り、パンドラではなかつた宝石もさりと持ち主に返しておいた。

とうえず、今日の仕事も無事終了。

家に帰ると、寺井ちゃんが部屋で待っていた。なんだか、オレに相談があるらしい……。

その相談内容を聞いたオレはさっそく、計画を練りだした。そして、翌日キッドの予告状を出すことになる。

また、この仕事をしている間に、新たな真実を知ることになった。あのブランドで会った女の子が、小さな探偵くんの知り合いだということ。

そして……

その探偵くん“江戸川コナン＝工藤新一”であること……。

これらは、あのブランドでの一件から、1週間以内で知ることになるのだが……。

オレはこの時全く分かつていなかつた。そう、全く……まさか、オレが狙われるなんて誰が知ることが出来たのだろうか……。

みなさま、こんばんは。ペロロです。

いよいよスタート、「世紀末の魔術師」。最初始める時に、みなさん感想などで「黄昏の館」とか、「空中飛行」のお話のことを話をされるので、どうしようか迷ったのですが、やつぱり、新一の正体がバレる上では、これは抜けない！とこうことで決めさせていただきました。

さて、映画冒頭のキッドと歩美ちゃんのシーン。

盗まれた宝石は、勝手なネーミングですので、ついついまないでいただきたいです。いかにセンスないかが分かりますよね・・・。あはは。

この時キッドは、歩美ちゃんのことを見らなかつたところと云ふところを知らせていただきました。

あと、寺井ちゃんの相談事。

あとに続くキッドの語りから、HUGG関連だと予想は出来ますよね？まあ、確かにそونなんですが。

こちらでは、控えさせていただきます。次のお話でやさしく説明させていただきますね。

あつ、これは、うちの勝手な設定なので・・・。

後で文句を言わわれてもそれは困ります。

それでは、また次のお話でお会いしましょ～これからも、このお話をよろしくお願いします。

世紀末の魔術師2（前書き）

快斗、大阪到着です。

“黄昏の獅子から暁の乙女へ
秒針のない時計が12番田の文字を刻む時
光る天の楼閣から

メモリーズ・エッジをいただきに参上する

世紀末の魔術師

怪盗キッド”

そんな予告状が警視庁に届いたのは8月19日のことだった。
その翌日8月20日、オレは仕掛タネをしかけるために、大阪へと向かつた。

それにしても・・・すごい人だな、おい。

東京も毎日そりや、すごい人だけじゃあ・・・ここまで活氣はねえよな。

あ、一緒に来てくれるのは寺井ちゃんです
その日1日かけて、様々な仕掛タネを仕込んでおく。

「ぼつちやま・・・寺井の頼みを聞いてくれてありがとうございます・・・」

「ああ、別にいいよ。今のところ何か狙つてる宝石があつたわけじやねえし・・・」

寺井ちゃんの知り合いに、沢部って人がいるんだけど、その人が仕えてる香坂夏見さんの曾祖父の書いたエッジの絵が、今回発見された51個目のエッジと違うということで、彼女には内緒で寺井ちゃんに頼みにきてたらしい。詳しくは知らないけど・・・。実際に会

つたわけじゃねえしな。

そう、今回の獲物は、インペリアル・イースター・エッグ。ロシア、ロマノフ朝時代に作られた秘宝。今までに50個発見されてるんだけど、今回発見された“メモリーズ・エッグ”は、ちょうど51個目となる。

その所有者は何とも縁のある、鈴木財閥。

そのエッグは大阪にて展示されてるといふことで、こうしてやってるんだけどね。

毛利小五郎氏にも依頼が行つたらしくて、大阪にやつてくるようだ。つまりは、あの小さな名探偵も。そして、毎度お馴染み中森警部は、ヤル氣満々なのを、しつかりとこの田で見てこつちに来たから、来るだろうね。

まあ、今回彼が警備するなりきっと・・・

結局、中森警部は、21日に、毛利氏は22日に大阪にやつてきた。情報収集のためにオレの愛鳥を飛ばしておいたし、これで準備は完ぺキ！

さあ・・・ここは大阪。

いっちょ、派手にいきますか！！

みなさま、じんじちは。いつも読んでくれてありがとうございます。ペロ！」です。

さて、もう25話目となる「キッドミーデ」、今回の「世紀末の魔術師2」はいかがでしたでしょうか？

前回お話した寺井ちゃんの頼みごと・・・。お分かりになりましたか？こには、うちオリジナルの設定なので・・・って、前に言つたと思しますけど、文句は、受け付けないです。あ、もちろんお褒めの言葉はかなり歓迎させていただきます（笑）

はい。ということで、寺井ちゃんの頼みごととは、この後出てくる香坂夏見さんの執事の沢部さんにエッグのことで相談されてたんですね～。

最後、キッドがエッグを盗もうとした理由を「ナンくんが追求する時に、「エッグが夏見さんの曾おばあさんのものであると知つてた」みたいなことを言つてたので、どうやってそれを裏付けるか必死で考えた結果がこれです。

「調べた」とか、いくらでも言い訳？は出来そうなものなんですが、あえて「いつせせていただきました。反応がかなり気になりますね。

あ、キッドの活躍は次のお話からとれさせていただきます。延び延びでスマセソ～・・・。

それでは、これからもこの小説「キッドミーデ」をよろしくお願いします。

メッセージ・評価・感想をいただけるとかなり跳んで喜びます。うちはほめて伸びるタイプなので・・・（笑）
で、伸びたかどうかは、みなさんが受け取った印象どおりです！

世紀末の魔術師3（前書き）

かなり遅れてスイマセン。

ようやく、第3話目投稿することが出来ました。

これから、かなりペースが落ちるかもしません。

1週間に1話は最低でも投稿するように心がけていきたいと思います。

それでは、キッド様のショー、スタートです

飛ばした愛鳥のハトに取り付けた盗聴器から、中森警部の声が入つてくる。

どうやら、一セモノを展示室に移し、ホンモノは中森警部が自分の田で見張るという作戦のようだ。

よしつ！読みどおりの展開 しつかし……オレの変装見破るには、そりやホッペをつねれば一発だらうけど……痛モーダなあ……。
もひ、見て無くても光景が田に浮かぶな！－

それにもしても、探偵くんは今回の暗号、まだ解けてないのかな？
まだまだだね、探偵くん……？こんななんじや、予告どおりにいた
だいちやつよ

辺りは暗くなり、夜。時刻は、7時をちょっとすぎたころ。

今、私のいる場所は、“光る天の楼閣”

通天閣。

どうやら、探偵くんは今回の暗号が解けなかつたらしく、ここに来る気配はない。

オレの愛鳥もしっかりと役目を果たして帰ってきた。
盗聴器を外して、耳にあてる。……が、特に新しい情報はなし。

セヒト・・・

「レディース・アンド・ジョントルメーン…」

うわ・・・気持ちいい・・・

「さあ・・・ショ―の始まりだぜ・・・」

まずは・・・と、リモコンを取り出し、ピッ！とな。すると、ヒュ
ルルルル・・・と大阪城で花火が盛大に打ちあがる。

「さて、お次は・・・」

と、またリモコンを取り出し、ピッ！変電所にしかけておいた、爆
弾が爆発！

街中が夜の闇に包まれていく・・・。さてさて？

「法円坂・・・ミカド病院・・・ホテル堂島センチュリー・・・天
満救急医療センター・・・ホテルチャンネルテン・・・浪速TMS

病院・・・関西ホテルザワールド・・・おー・ビンゴ
発見！行きますか・・・

さて、向かつてゐ間に軽く説明しておきますと・・・

今回の予告時刻は、7時20分。予告状冒頭の、“黄昏の獅子から
暁の乙女へ”の、12番目の文字は「へ」。これで、最初の2行は
解読完了

また、“光る天の楼閣”は、今いた通天閣のてっぺんが光の天氣予
報になつてゐところから。

それから・・・花火を打ち上げたのは、通天閣から目をそらせるた
め。

変電所を爆発させたのは、自家発電に切り替えさせるため。
ホテルや、病院以外ですぐに自家発電に切り替わった所こそ、警部
のいる場所。

・・・お分かりかな？

なんて考へてゐるうちに、到着。

窓から、催眠ガスを打ち込み、警部たちを眠らせて、今回も樂々とゲットで、逃げようと思つたら・・・下にバイクが1台。乗つてる人は・・・ヘルメットで顔が見えないけど、私と同い年?と、思つてたら・・・

「キッド!...!」

と、探偵くんの声が。近づかせなによつて、煙幕のカーデを打ち込み、その隙に逃走!

目的地は大阪湾の近く。そこで寺井ちゃんが待つてゐるから・・・。

大阪飛行を楽しんでいたら、赤いレー・ザーポイントが・・・!
ハツと気づいた時、咄嗟に避けたが、ほんの少しモノクルをかすめてしまい、

「あ・・・オレ、狙われたんだな・・・」

と思つた瞬間、地に落ちていいく感じがして、そのまま氣を失つた・・・

ペロコです。

前書きにも書きましたが、かなり遅れて申し訳ありません。ちょっと立て込んでおりまして・・・。テストに追われる日々がこれからも続くと思うので、なかなか投稿できなくなるかもしません。

ここで謝ります。スマセン。

さて、気分を改め今回は、キッド様ショー！～墜落まで。「レディース～」のセリフは、英語表記にするか迷ったのですが、カタカナにさせていただきました。

そして、軽く暗号の解説を入れました。今まで入れてなかつたんですけど、飛んでる間のシーンはこんな事を考えてたということで・・・（^ - ^ ;）

さて、キッドは何とか盗み出すことに成功し、（ここでは平次のことを知らないということにさせていただきました。ヘルメットもかぶつてたしね）大阪湾に向かつて飛びます。

その道中（空中？）、狙撃されるんですね～（泣）一瞬銃口のほうを向くので、気づいていたということにしました。でも、避け切れなかつた。

なんだか、キッドの語りとして書くのには、あんまり詳しくかけないということで、かなり短いですが・・・。まあ、気を失つたといふことで。

さて、次回！かなりハイペースに物事が進む予定です。最後の方に力を入れたいので。

墜落してしまったキッド・・・。その安否は…？（つて、知つてますよね・・・・）

では、感想などお待ちしておりますーー！

「 まー坊ちゃんまーー大丈夫ですか、坊ちゃんまーー」

え？ 寺井ちゃん・・・？ 目を開けると、そこには心配で仕方が無い様子の寺井ちゃんの姿が。

「 坊ちゃんまー大丈夫ですか！？」

「 あ、ああ・・・オレ・・・？」

「 ああ！ よかつた！ 坊ちゃんまに何かあつたら、この寺井、盗一さまに顔向け出来ません！」

「 寺井ちゃん・・・大丈夫だから。とりあえず、落ち着いて。ここは？ あれからどうなつたの？」

「 は、はい・・・。えっと、ここは泊まっているホテルでございます。坊ちゃんまが撃たれたのを見て、落ち合の場所から駆けつけ、坊ちゃんまを救い出しました。ただ、モノクルと、エッグ、それに坊ちゃんのハトは・・・。あの江戸川コナンといつ少年がいたために、取りにいけませんでした。申し訳ありません。」

「 そうか・・・。オレを撃つたヤツは？」

「 それも・・・申し訳ありません。なにぶん、暗かったもので・・・」

「 そう・・・。モノクルは探偵くんが・・・。まあ、別にオレって断定できるような指紋なんかないと思つけどね。」

「 中森警部様に、渡しておられました。どうなさいますか？」

警部のところが・・・。つてことは警視庁だよなあ・・・。どうする、オレ！？

エッグの方は、探偵くんが持つてゐるなら大丈夫だろ？、おやぢべ。モノクルは・・・

「今、警視庁で休暇取つてゐる人がいなかどうか、調べてくれる？
夏休みだし、1人ぐらいはいるだろうから。」

「分かりました。ということは、取り戻しに行かれるのですね？」
「当つたり前だろ？ キッドはアレがなくつちやね！」

「ということど、とりあえず再び寝て翌日。

寺井ちゃんの調べで、警視庁の白鳥つて人が休暇で軽井沢にいるらしい。

白鳥つて人なら、聞いたことあるなあ。どつかのお坊ちゃまだつくな。なら、ちょうどいい！

そして、その人に化けてモノクルを取り戻しに行くために、東京へ。

警視庁。一般人なんかはやつぱり入るのに戸惑うこの。特にオレなんかは怪盗なんてもんをやつてるしね。まあ、今は「白鳥」つて人堂々と・・・。

証拠品保管室。

様々なものが立ち並ぶなか、オレのモノクルを発見。しかもラッキーなことに、誰もいないんだなー！ オレつてば運が良すぎ！
ちやつちやともひつて、警視庁を出る・・・はずだったのに！！

「あ、田暮警部！」

そつ、あの1課の警部さんに出会つちやつたんだよ～。

「白鳥くん！ 休暇で軽井沢じゃなかつたのかね？」
まあ、そうだわな、ホンモノは。えーっと・・・

「別荘にいてもヒマなんで・・・事件ですか?」と聞くと、
「ちょうどいい!君も一緒に来てくれ!」

そりやそりだよな。あっけらか〜。。。

つてなことで、成り行き上、一緒に事件現場についてこべりとなつた。

まあ、オレとしてはこの遭遇は幸運だったのかも知れないけど。この時はもううん、「やつべー」としか思つてなかつた。

でもこの後、鈴木財閥の船の上で衝撃の新事実を知ることになる。。。

みなさま、じんじは。ペロ口です。やはり一週間ぶりの更新となりました。本当、だらだらと進んでスイマセン。

さて、今回のお話。快斗、意識が戻る～田暮警部たちにて会つ編ですね。一気にドドドと進みました。軽く寺井ちゃんに説明をしてもらつて状況を知つたのでは？と勝手な想像。そして、警視庁への乗り込み。

警視庁内部の状況はハッキリ言つて知らないので、これもまた想像。こんな感じかなーと・・・。

警視庁で田暮警部に会つたのは不可抗力とさせていただきました。もちろん、目的があつて近づいたのかもしれません・・・。とりあえず、成り行きということで！

さて次回。再び探偵くんとの対面。といつてもあんまり（全くかも・・・）お話ししませんけどね。

またしばらく更新できないかもしないですが、今後ともよろしくお願いしますm(――)m

へりで向かう途中、事件が起きたというその状況について詳しく聞いてみた。

「現場は、鈴木財閥の船の上。毛利君がまたおるようだ……。あの疫病神め……！」

アハハ……。“疫病神”ね……。
そんなに殺人事件に縁があるんだ……。いくら探偵だからって、
そんなに事件に巻き込まれるもんじゃないだろ？！
警部さんも大変なんだな。

警視庁のへりが、その鈴木財閥の船の上に降りる。でっけえ……。
毛利探偵と、鈴木史郎氏が待っていた。

「警部殿！お待ちしておりました！」

「……つたぐ。どうして君のいくところに事件が起ころるんだ！？」

「いやあ……神の思し召しといふか……。」

神……？神つて……。

「毛利さん自身が神なんぢやないですか？……死神という名の……」

・

そう。死神！

いくら探偵とはいえ、行く先々で殺人ばかり起こってたらお先真

つ暗だよ。

まさに一寸先は闇。

目の前には闇しか広がっていない世の中になっちゃうよ。

彼が神　死神であるかぎり、事件は後を絶たないと思つた。

さて、被害者は、寒川竜さん、32才。フリーの映像作家だそうだ。
彼・・・エッグ狙つてた人だよね？

そこへ、毛利氏の気合いで入ったコメント。

「これは、強盗殺人で、犯人が奪つたのは指輪」だといふ。
なんでもその指輪は、あのニコライ2世の三女、マリアの指輪らしい
い・・・けど・・・。
でも・・・

「指輪を取るだけなら、首から外せばいいだけでしょー！でも、部屋
を荒らして枕まで切り裂くのはおかしいよー！」

そうーあまりにもぐちゅぐちゅなこの部屋。おかしくなるー。

・・・って、おかしいのは探偵くじのせいだよ・・・。

小学生なのに、こんな考へずに出来るもんじやないよ・・・。変

だ・・・変すきだの・・・。

すみるとい、鑑識わんが西野さんのボールペンを持つてきた。

とこいつじで、西野さんに事情を聞く事に・・・

世紀末の魔術師5（後書き）

みなさまこじんにちは。ペロ口です。
えっと・・・世紀末の魔術師、本当に久しぶりの更新！！遅くなり
ました・・・。

今回は、ヘリにて鈴木氏の船に降り立ちます。
あの「死神」のセリフ、何を思つて言ったのか必死に考えて、考
えて・・・でも、あんな感じにしか思いつかなくて・・・。どうなん
ですかね？本当のところは。

前回、あとがきにて「探偵くんとの対面」と書かせていただきまし
たが、最後にちょっとだけ・・・でしたね、もしも期待してた方が
いたらスママセン。

でも大丈夫！次回はコナンくんが行動に・・・
そして・・・！？

次回もお楽しみに！
感想などいただけたら嬉しいです。

警部さん・毛利探偵による西野さんへの質問が始まった。

「西野さん、このボールペンはあなたのものに間違いありませんね！？」

「は、はい・・・でも何で寒川さんの部屋に？」

「遺体を発見したのはあなたでしたな？」

「そうです・・・食事の用意が出来たので呼びに行つたんです。」

「その時、中には？」

「いいえ・・・」

「じゃあ、何で部屋に入つてないアンタのボールペンが中に落ちてたんだ!?」

「分かりません・・・」

「では、犯行当時のあなたのアリバイは？」

「えーっと・・・7時10分頃、部屋でシャワーを浴びて、その後一休みしてました。」

もし西野さんが犯人なら、オレを撃つたのも彼なのか・・・？

すると、高木刑事が「ビデオテープがなくなっていた」と報告に来た。

それを聞くと、あの探偵くんが走つてどこかに行つてしまつた。

そして、その後を毛利さんが追つ・・・しゃあねえ。

「警部、犯人は銃を持っている可能性があります。彼女たちを連れ戻してきます」

「うむ。分かった。頼んだぞ。くれぐれも用心することだ。」

了解、と軽く手を上げて彼女を追いかけた・・・と一・電話？

探偵くん、電話中なのか・・・ま、とりあえず・・・と毛利さんの肩をポンとたたくと、素早く空手の構え・・・そういうや、空手やつてたんだつけな。

「白鳥刑事！」と田がまん丸。こいつに何は青子をつくだ・・・。

「蘭さん、銃を持った犯人がうろついているかもしません。早くみんなのところに戻つて下せーーー！」

つて、彼女、空手やつてるしある程度は大丈夫だとは思つけど、銃が相手じゃね。

「でも、コナンくんが・・・」と言いかけるのをやめ、
「彼はぼくが連れ戻しますから！・・・任せてくれださー。」

と、無理やり追い返す。さて・・・

探偵くんの電話内容気になるなあ・・・。こんな時にピリリ電話？
といふことで、気配を消して探偵くんの隣の電話ボックスの近くに
盗聴器（それも、かなり高性能なやつー）を取り付け、その場を離れ、スイッチオン！

「・・・・目を撃つスナイパーじゃと？分かった！調べてみる！1
0分後にまた電話をくれ！」という老人の声。電話の切れる音。
ふーん・・・10分ね・・・。

と思つて氣を緩めたせいか、探偵くんが飛び出してきた！あわてて
隠れたものの、かなり危なかつた・・・。本当、氣配に敏感なんだ
なー・・・。

さて、10分間どうじよつかな。と、ぶらぶら散歩。

あー…と思いつき、向かつた先は、救命ボート置き場。まあ、いざつて時のためにね。

結局、救命ボートは一艘なくなっていたけど…・・・

世紀末の魔術師6（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロ口です。

はい……よりやく、事件が動き始めました……。どれだけスローペースなんだ!? といつ感じもいたしますが。

今回は、警部さんたちの質問～電話の盗聴編。

いかが……ですかね? 最近、キッドがどう思つて動いてるのか想像しにくい場面に入つてきてるんですけど……。やっぱり、裏をかくのは難しい感じがしますね、書いて思つたのは。まあ、いまさらなんですけどね。

まだ、この段階では探偵くん=新一と区別しないところにになります。

正体がバレるのは、次回のお話。

ここが書きたくて、今回この「世紀末の魔術師」をやることに決めたんですが……。みんなさんの反応が怖いです。うち自身のオリジナルなので、こうだつたとはほつきり言つて言えません! なので、その辺りの文句は受け付けないので、そこだけご了承ください。

また次のお話を投稿するまで時間が空くと思います。

そんな次のお話、事件はほつきり言つてそんなに進みません! 下書きは出来るのですが、もう一度チェックをして、気合を入れて投稿するつもりです。

次のお話は、快斗に正体がバレる編!!
キッド

次回もお楽しみに♪

評価・感想など送つていただけると嬉しいです。

それでは、また次のお話で・・・

きつかり10分後、探偵くんは再び老人に電話をかけていた。

「分かつたぞ！シンイチ！ICPOの犯罪情報にアクセスしたところ、年齢不詳・性別不明の怪盗が浮かんだ！！その名は・・・スコーピオン！！」

「スコーピオン！？」

スコーピオン・・・これだけ聞けりや十分だ。と思い、盗聴器の電源を切る。

さて・・・スコーピオンは聞いたことがあるな。インター^{インターポール}ポールがあ・・・

またすゞいヤツを敵に回してるもんだ・・・。ま、かくいうオレもインター^{インターポール}にはお世話になってるけどね。

さて、先ほどの電話を思い返してみよう・・・。

年齢不詳・性別不明・・・って、何にも分かつてないんじやん！

・・・え？待てよ？確かにあの電話の時あの老人は、探偵くんのことを“シンイチ”って言った！？“シンイチ”って・・・。“真一

”？“信一”？IQ400の頭がフル稼働で漢字を変換していく。

それとも……“新一”……？って……ええ！？

あの“工藤新一”！？いやいや……まさかね。

だって、彼つて高校生探偵なんだし。あれは、どう見ても小学生……。

確かに推理力はそりゃもう、べらぼうにすげえこと隠さない……。

そういえば、このHッグの件を知ったときに紅子がいきなりやってきて……

「こんばんは、黒羽君」

「あ、紅子！？何でここに！？」

「黒羽くん、明日から大阪に行かれるでしょ？だから、急いだ方がいいと思って……。Hッグを盗みに行かれる前にお知らせしたいことがあったのよ」

「Hッグって……それはキッドが狙ってるんだろう？オレは関係ねえよ！」

「ふふ……まあ、いいわ。あなたが“もしも”怪盗キッドだとうのなら、しっかりと聞くことね。これは忠告よ」

「忠告？」

「ええ……さつき、占いをしていたら……

『姿変わりし光の魔人 白き罪人を滅ぼさんとす

だがその前に 光の魔人に影がかかる

その影は光の魔人の最も恐れしものなり』って出たから……

。 気をつけてね？ それじゃ」

「お、おい、紅子！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！ ！」

確か・・・ルシュファーだつて？ なんだかんだ言つて、紅子の占い毎回あたつてるからな～。

えーっと・・・“光の魔人” つて言つのは、確か“工藤新一” だつたはず。

ということは、彼 小さな探偵くん、江戸川コナン＝工藤新一ってことか？ しかも、“姿変わりし” だし。あれはどう見たつて、姿変わつてるもんな。もともと、謎な存在だつたし。「江戸川コナン」つてさ。前に調べた時、工藤新一と入れ替わるように現れたのが江戸川コナンだつて分かつたんだしね。まあ、そうだとすりや、あの推理力・行動力が納得できるけど・・・。何で小学生になつてんのかわかんないけど・・・。まあ、オレの周りには「魔女」なんて人がいるから、不思議じゃねえんだけどさ。だとすると、あの電話の相手の老人は、隣に住んでるつていう『阿笠博士』 つて人か？ 確か、発明家・・・。

それにしても・・・“影” つて何だ！ ? 探偵くんの“最も恐れしもの” ねえ・・・。何だろ？

まあ、いつまでも悩んでたつて仕方ないし、もうそろそろ探偵くんも戻つてるだろ？ し、オレもそろそろ戻るかな？

そして、戻ってきたオレが耳にしたのは「待ってください。警部さん！私じゃありません！」と必死に叫んでいる西野さんの声だった。

みなさま、お久しぶりです。ペロ口です。

久々に次のお話が投稿できました 世紀末も7話目ですね。早いもんです。その割にはあんまりお話進んでいないんですけどね；

さて、今回は以前お話した通り快斗^{キッド}に正体がバレる編！！！といつことで、紅子ちゃん出してみました。なんか、紅子ちゃんと哀ちゃんつてかぶるんですよね。雰囲気と/orか。

謎な言葉を考えるのに、結構時間がかかりましたね～。こいつた暗号めいた言葉をきれいに作れる人はすごいな～と思いましたね。

快斗の心理は・・・どうなんでしょうね？

自分の周りに魔女なんて人がいるから、人が伸び縮みしてもそんなに驚かないんじゃないか・・・というのはうちの見解です。いかがでしたか？

次はお話をきちんと進めたいと思います。

戻ってきたキッドが耳にしたのは西野さんの必死な声。
探偵くんが動きます！！
では、また次の話で・・・

評価・感想などいただけたら飛んで喜びます（笑）

「どうやら、西野さんの部屋を調べていたら、例の指輪が出てきたらしい。

で、西野さんは否定してる……と。そういうわけだね。

おー探偵くんが例によつてちよこまかと……。

「「オ～ナア～ン！……」と叫ぶ毛利氏のパンチをスルリと避けて西野さんに「羽毛アレルギーなんじゃない！？」と質問。

西野さんが肯定すると、「じゃあ、犯人じやないよ！」と断言。

ホオ～・・・。こんなにもキッパリと。

と思つて見てたら、こっちを振り返つた。

「いいから続けて・・・」と先を促す。

「寒川さんの部屋、羽毛だらけだつたぢやない！犯人は羽毛枕まで切り裂いてたし、羽毛アレルギーの人があんなどことするはずないよ！」とまたも断言。

さすが、工藤新一・・・。筋が通つてゐし、それに納得だよ。といふことで・・・

鈴木史郎氏に確認を取りに、みんなで彼の部屋を出てロビーへ。

「それが私が承認になります！彼は少しでも羽毛があると、クシャミがとまらなくなるんです！」

なるほどねえ・・・と、そこに探偵くんの声。

「警部さん！スコーピオンって知ってる？色んな国で、ロマノフ王朝の財宝を専門に盗み、いつも相手の右目を撃つて殺してる、悪い人だよ！？」

「それじゃ、今回の犯人も・・・」

「そのスコーピオンだと思うよ！たぶんキッドを撃ったのも・・・。キッドの単眼鏡モノクルにヒビが入つてたでしょ？スコーピオンはキッドを撃つてキッドが手に入れたエッグを横取りしようとしてたんだよ！」

“キッド”という言葉が探偵くんの口から出た時に、肩が震えかけた・・・。あつぶねえ。

ポーカーフェイスが出来てよかったですよ、本当・・・。

ここまで推理した探偵くんに感心していると、横から

「何でオマエ、スコーピオンなんて知ってんだよ？」と鋭い毛利氏のツッコミ。

かなり慌てていたので、思わず助け舟を・・・

「阿笠博士から聞いた・・・」とつぶやいたら、急に振り返った。かなり疑われてるのかなあ・・・やっぱ。

「そうだよね？コナンくん？」

なんか、チラチラ見られてるし・・・もしかしてもう、バレた！？

「しかし、スコーピオンが犯人だとして、どうして寒川さんから奪つた指輪を西野さんの部屋に隠したんだ？」

という、警部さんの疑問。

そして、探偵くんの突然の質問。

「ねえ！西野さんと寒川さんって、知り合いなんじゃない？」

という、質問に西野さんはしばらく考えて、そして思い出した。

三年前にアジアで内戦により、家を焼かれた女の子のビデオを撮つ

ていたのを見つけ、注意したが聞かないので、殴つたりしこりや、恨まれてるだろ? ねえ・・・と思つてたら、毛利氏の迷

推理。

なんとまた、西野さんが犯人と言ひ出した・・・。本当、大丈夫か? 警部さんにもツッコまれてるじゃねえか・・・。

みなさま、こんばんは。ペロコです。

昨日からテストが始まっているにも関わらず、なんと小説の投稿までやつてのけるほど、テストの結果に自信がないのにパソコンをやつているという変な者です（笑）いやあ・・・パソコン触つてないと落ち着かないので、必ず見るようにはしているのですが・・・。

さて、ペロコの個人的な話は置いといて・・・

今回、探偵くんが動きました！といつても、そんなに進んでない気もしますが・・・。小五郎さんがズレた方向に向かうと、すかさず訂正をする・・・。

そんなところにキッドは興味があるので？と勝手に想像。（妄想ともいう）そして、あの白鳥警部の視線・・・となりました。今更なのですが、本当に謎です！キッドって、分からなさすぎて泣けてくるよ・・・。

はい、そんなこんなで進んでいる「キッド side」。今回が31話でした。前話で感想をいただけなかつたので、キッドに正体がバレたところを皆さんがどう思ったのか分からないまま進んでしまいました。

次回は、事件解決・・・までいけるかなあ？

コナンくん次第です（笑）

それでは、評価・感想いただけたらとても参考になりますー。どう思つたかなど率直に教えてくれると嬉しいです。

毛利氏の迷推理にあきれていたり、またしても探偵ぐんの一言。

「でも西野さん、助かつたね！だつて、もし寒川さんがスコーピオンに殺されになかつたら、西野さん、指輪泥棒にされてたよ！」

ところ、LJの特大級のヒントを得て、さすがにひらめいた毛利探偵。

「LJの事件、二つのエッジならぬ、二つの事件が重なつていたんですね！一つ目は、寒川さんが西野さんをハメようとしたもの。彼は西野さんに指輪泥棒の罪を着せるために、わざとみんなの前で指輪を見せ、西野さんがシャワーを浴びている間に部屋に侵入。自分の指輪をベッドの下に隠した……。そして、西野さんのボールペンを取つたんです！西野さんに罪を着せるために……。だが、その前に2つ目の事件が起つた。寒川さんがスコーピオンに射殺されました！目的はおそらく、スコーピオンの正体を示す何かを映してしまつたテープと指輪……。しかし、指輪が見つからなかつたため、スコーピオンは部屋中を荒らしたんです！」

・・・へえ・・・やるじやん・・・。

「スゴイや、おじさん！名推理だね！」

いや、探偵ぐんでしょ？それは。

的確なヒントを「え、確実に」ゴールに導く・・・

「ところことは、スコーピオンはまだこの船のどこかに…？」

とこう警部さんの声にふと思いつく。

「そのことなんですが・・・救命艇が一艘なくなつていました・・・

「

「それじゃ、スコーピオンはそれで・・・！？」

「緊急手配はしましたが、発見は難しいと思います」

「取り逃がしたか……」

「そうかな……まだ、ここにいるような気がするんだけど……。すると、周りからは“安心した”との声があがる。

「しかし、スコーピオンがもう一個のHIGGを狙つて香坂家のお城に現れる可能性はあります……」と叫び、戸惑いが起こった。
「いや、すでに向かっているかも……田暮警部！明日東京に着き次第、私も夏美さんたちと城へ向かいたいと思います！」
と言えば、警部さんの了承をもらえた。

すると、毛利氏が探偵くんを置いていくと言い出したので、
「いえ、コナンくんも連れて行きましょう……」と反対する。
ま、かなり驚かれたけどね。そりや当然じゃないか。だって、彼はあの……工藤新一！

「彼のゴニークな発想が役に立つかもしれませんからね……」「こいつの……？」

「ええ……」と笑みを浮かべる。

“ゴニークな発想”って言つたけど“ゴニーク”なんて、期待していない。

オレが期待しているのは、その推理力。
だって……あの香坂家の城は……

と思つていると、田暮警部が

「ひとまず、今晚はもう休みましょう。鈴木会長、私達に部屋を貸していただけだと助かるのですが……」と尋ねると
「ええ。かまいませんよ」と鈴木会長の承諾。

ところが、今日はもつ寝ることになった。

なんだか慌しい一日だったなあ・・・。あ、寺井ちゃんに連絡入れ
ねえと。
わっと心配してゐるだらう。

そして、オレは寺井ちゃんにメールして、遡ること二回

みなさま、こんばんは。ペロロです。

久しぶりに、「キッズリューチ」の更新をさせていただきました。
事件、無事解決！

ちょっと長めとこりますか、セリフの多い回でしたが、まあ、推理
ところことでお許しください。

最近、感想にて「もつもつと描画を詳しくした方がいい」との「
指摘があります。

で、実際に読み返しても確かにそうだなーと思つことが多い多々あつ
たので、次回からしっかりと書いていきたいと思います。

こうじつた、「指摘はすぐ助かっています。

自分で読み返しても分からぬものなどたくさんあるので、読者様
の意見は大変嬉しいし、しっかりと反映していきたいと思つています。

さて、今回のお話は、事件解決編！

そして、寺井ちゃんのお名前が久々に出ました（笑）
寺井ちゃん、心配してるんじゃないかなー？？といつことじで、じつじ
メールしておくといつ手段に出させていただきました。

次回は、こよいよ香坂家のお城編！

といつても、中の探索までは行かないかもです。

上にも書きましたとおり、たくさんの「意見・感想を心から待ち

望んでおつます。

みなさんの意見を反映してよこみに作品としてここに置いておきたいと思つてこま
す。

これからもよろしくお願ひしますね。

8月24日、晴れ。

船は予定通り東京へと到着。

そこで鈴木氏たちや、日暮警部と別れる。その際鈴木氏にエッグを借りておく。

まあ、理由として少々こじつけではあるが、「証拠品として」である。

うまい理由が思いつかなかつたんだよ……。

でも、黙つて盗ることも出来たけど、“黙つて”つてのは、怪盗の名が^{すた}廃るつてもんだしな！

乾さんは、寄るところがあるというので、別行動になつた。それからオレ達は、2つに分かれて横須賀へと向かつた。

車で山奥に入つていくと、例の城が見えてきた。
みんな、門の前まで来て車を降りる。

「ドイツのノイシュヴァンシュタイン城に似ですね。シンデレラ城のモデルになつたと言われている……」とウンチクを披露していると、また車がやつてきた。
黄色のビートル……。

降りてきたのは、老人1人と、子供達が4人。

あれ？あのカチューシャの女の子……と思つていると、毛利さんが

「博士、どうしてここへ？」

と聞いた。ということは、この老人が例の「阿笠」っていう人だな。
ふーん……。

「いや、「ナンくんから電話をもらひてな。ドライブがてら来てみ
たんじやよ」と答えている横で、子供達が
「まるで、おどぎの国みたい!」「この中に宝が隠されているんで
すね!?」「うな重何杯食えつかな?」と口々に叫んでいる。

で、毛利氏が一喝。

「いいか、お前達!中へは絶対に入っちゃいかんぞ!…」
と怒るように叫つと、

「はい!…」と素直な返事。

と、そここまちしても車が到着。
乾さんが来たみたいだ。

「や〜、悪い悪い。準備に手間取つてな・・・」と大きなリュック
を背負つている。

毛利氏が「何ですか?それ・・・」と聞くと、
「な〜に!備えあれば憂いなし!ってやつですよ・・・」と答えて
いた。

とりあえず、全員そろつたところで中に入る。
その際、毛利氏が鍵をかけさせていた。

と、ここまできちよつやく思い出した。
あの、カチューシャの女の子、以前仕事帰りの羽根休めに寄つたマ
ンションで

オレの事「ドラキュラ」って言った女の子だ・・・。
探偵くんの知り合いだつたんだ・・・。

まつたく・・・世間はせまいねえ・・・

世紀末の魔術師1-0（後書き）

みなさま、こんばんは、ペロロです。

はい！世紀末の魔術師もとうとう1-0話目を迎えたあ……あります！

様々な方から、色々なメッセージをいただき、ありがとうございます。

わわ・・・

今回は、とうとう城到着！&歩美ちゃん＝「ナンの知り合」という事実の発覚でございました。ようやく、最初のあの文章をつなげる事が出来ました・・・時間がかかりすぎですね。

ですが、今日から春休みということで、少しはペースをあげれたらと思っています。「もう少し早く更新して！」といつ意見もありますし・・・。

とりあえず、次のお話からお城内の探検編へと突入していきます。
どんどん描写が難しくなっていく一方ですね。

キッド田線でお話が進んでいくので、描写がうまく書けないと瘤も出でくるかもしれません。

もしも、「こうしたほうがいい」ということがあれば、検討させていただきますので、ぜひ遠慮なさらずに！（笑）

それでは、評価・感想などいただけたら嬉しいです。
これからもよろしくお願いしますね。

中に入つたオレたちは、沢部さんの案内で城の中を見て回る。まずは、1Fから。それにしても……広！…でっけんだなあ……。

で、到着したのは、騎士の間といつといふ。西洋の甲冑とタペストリーが飾られている。すっげえ……。かなりの量があるよ。

ただ、かなり重そうだなあ……まあ、鉄だし当たり前なんだけど。みんなそれぞれ眺めた後は、部屋を出て2Fへ。

まず、貴婦人の間。

沢部さんによると、「大奥様は、よくここ一日中過ごしておられました。」この部屋が一番気が休まるとおっしゃって……」だそうだ。

確かに、すこく落ち着いた感じの部屋だ。かなりの数の絵画が飾らされている。

そして、部屋を出て、皇帝の間といつといふく……。
さつきの部屋とはつてかわって、騎士の気高さといつか……ものものしい雰囲気。

貴婦人の間が“暖”だとすると、この皇帝の間は“寒”って感じかな。

……とか考えていたら、乾さんがトイレに行きたいと言ひ出し、部屋を出て行つた。
ここから出ると合流出来ないかもしねないとこつこつとで、この部屋で待つことに。

待つこと約2分。

突然「うわあ~~~~~！……」とこづ乾さんの悲鳴が！！。
あわてて声のした方へ・・・。つてアレ？トイレの方向じやねえよ、
こづか。

そして、乾さんを発見したのは、れつきの“暖”の部屋である貴婦人の間。

そこにいた乾さんは、金庫に手を入れたまま、しゃがみこんでいた。毛利氏が「こりや、一体！？」と目を見開くのも分かる。なにせ、刀やら剣やらが10本ほど天井からぶら下がっていて、その真下に乾さんはいたのだから・・・。

沢部さんが中に入ってきて説明する。

「81年前、喜市さまが作られた防犯装置です・・・この城には、まだ他にもいくつか仕掛けがあるので、『注意ください』

とこづかと、オレは乾さんの荷物調査を。

そしたら、出でてくる出でてくる・・・。ノーリット・ドール・その他もろもり・・・。

物騒だなあ、もづ。

「つまり、ヌケガケは禁止つてことですよ、乾さん・・・」と釘を刺しておぐ。

すると探偵くんが突然、「このお城に地下室は！？」と聞く。
沢部さんが無いと答えると、「じゃあ、1階にひいおじこさんの部屋はある？」

と聞くと、沢部さんは、

「それでしたら、執務室がござります」といつので、もう一度1Fへ降りて、その執務室へ行くことになった。

世紀末の魔術師1-1（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。

世紀末の魔術師1-1話田。とりえず、ここまでです。

勝手な解釈“寒”と“暖”を入れてしましました。

これは、うち自身が映画を見て思つたことなのです。明らかに、部屋の色が違つたもので。

わたくし、今日は話すことがあまりありません（笑）

次は・・・長くなりそうですね。とにかく長いーとは言つても、話としてはそんなに進まないのですが。

一体、あと何話で世紀末の魔術師は終わるんでしょう？ね？とりえず、春休み中には終わらせるのが、当座の目標でござります。4月はキッド祭りですしね
映画にアニメに・・・

それでは、評価・感想などいただけたら嬉しいです。
また次のお話を会いしましょう。

1Fへ降りてきて、執務室の中へ。

「こちらには、喜市様のお写真と、当時の日常的な情景を撮影されたものが展示してあります」と沢部さんが説明してくれた通り、かなりの写真の数。

ただ、探偵くんが夏美さんに聞いたように、夏美さんの曾おばあさんの写真は1枚もない。

これが示すところ……それは……と考えていると、

「おーーーこの男、ラスプーチンじやねえか?」という乾さんの声が飛び込んできた。

それに反応したセルゲイさんが確認。

「ええ、彼に間違いありません。ゲー・ラスプーチンとサインもしてありますから……」

と言うセルゲイさん。

「お父さん、ラスプーチンって?」

「い、いや……オレも世纪の大悪党だつたところだとぐらいしか……」

といつ毛利親子の会話を聞いて、乾さんが詳しく説明してくれた。

「ヤツはな、怪僧ラスプーチンと言われていて、皇帝一家に取り入つてロマノフ王朝滅亡の原因を作った男だ……。一時、権勢をほしいままにしたが、最後は皇帝の親戚筋にあたるコスピフ公爵に殺害されたんだ。川から発見された遺体は、頭蓋骨が陥没し、片方の目がつぶされていたそうだぜ……」と。

それを聞いた毛利さんが顔色を変えたのを見て、たまらず、

「乾さん、今はラスプーチンよりももう一つのエッジですー。」と話を止めさせる。

それに対しても毛利探偵がタバコを吸いながら、「そうは言つてもなあ・・・こんなに広い家の中からどうやって探しやいいんだ?」と聞いてきた。

それを見ていた探偵くんが突然「おじさんーちょっと貸してー。」と言つて、タバコを手に取る。

「マラ!...」と毛利氏が怒ると、

「下から風が来てるー。」の下に秘密の地下室があるんだよー。」と反論。

もちろん、辺りは騒然。毛利さんが灰皿を取り出し、探偵くんはタバコの火を消しつつ

「・・・とすると、からくり好きの喜市さんのことだから、きっと何処かにスイッチがあるはず・・・」と床を探し出した。

すると、何かに気づいたのか、床の板を一枚剥がすと、そこには・・・

「それは!...ロシア語のアルファベット!...」

「それで秘密の地下室へのドアが開くのか!?」と毛利探偵と乾さんは興奮。

一方、探偵くんは冷静に「パスワードがあると思うよ。セルゲイさん、ロシア語で押してみて!」と指示。

すると毛利探偵が「思い出・・・“ボスボミナーーーH”に違いない!」と言つので、セルゲイさんはその通りに押してみると、・・・が、何も起きない。

「アレ!?」と顔を赤くした毛利探偵を横目で見ていると、

「じゃあ、“キイチ・ローサカ”だ!」と乾さんが気合を入れて

提案。

押してみるが、やはり何も起きない。

セルゲイさんが、心当たりはあるか夏美さんに聞くと、探偵くんが、「バルシエ・ニクカツタベカ……」とつぶやいた。

「夏美さんの言つてたあの言葉、ロシア語かもしけないよ…」と推理する探偵くん。

「おい、何の話だ?」と聞く毛利探偵を「しつつー黙つてー」と毛利さんが黙らせる。

一方、探偵くんたちは、パスワードを必死に解読しようとしていた。切るところをえてみたり……。

すると、急に青蘭さんから「それ、“ヴァルシエーブニツクカンツアーベガ”じゃないかしら?」という言葉が。

それを聞いたセルゲイさんもピンときたらしい。納得したよつだ。

「英語では“The Last Wizard of the Century”……日本語にすると……」といつセルゲイさんの言葉を継いだのは、青蘭さんだった。

「世紀末の魔術師!—」と……。

で、ここでもまたもとぼけるのが毛利探偵。「世紀末の魔術師……?どつかで聞いたような……」「キツドの予告状よー」「そうだ!—こりや、とんだ偶然だな……」と毛利親子の会話。娘さんの方が覚えてるなんて……光榮ですね、お嬢さん。

まあ、偶然ではありませんけどね……。

「とにかく、押してみましょー!」というセルゲイさんが、ボタン

を押してこき、全て押し終わると・・・

“ガガガガ・・・・・”と“く”の音がして、床の板が開き・・・

そこには地下への階段が。

「でかしたぞ、ボウズ！！」と言つ乾さんの声が地下へと響いていた。

世紀末の魔術師1-2（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。

いかがでしたか？いつもよりちょっと増量した、世紀末の魔術師1
2話目。

全部で20話ぐらいになるかもしませんね。まだ分かりませんが。

さて、今回は、地下への扉・・・床OPENまでです。なんか、やたらと会話が多いのですが、まあいいでしょ？と。うち的には、毛利親子の漫才のような会話スキですね。最後の会話のところとか。あそこは、なんとなくキッド口調で心の中でお返事をしていたと勝手に妄想（笑）

もう、妄想だらけですね。このお話。

書いてて楽しいんですけど。

さて、次回。

地下への階段を降りた一同を迎えるのは・・・！？
みたいな感じで進めたら面白いんでしょうか？
まあ、ご承知通りです。どこまで行くかな～？

それでは、評価・感想・意見など、心からお待ちしております。

とりあえず、執事の沢部さんに懐中電灯を持ってきてもらひて、秘密の地下への階段を降りていく。

螺旋状の階段がけつこう長く続いている・・・。階段はここまでみたいだな。

一本道のようなので、とりあえず前進あるのみ。

みんな、氣味が悪いほど一言もしゃべらない。

何で！？と思つていたら、セルゲイさんが会話をスタートしてくれた。

「それにしても夏美さん・・・。ビリジテパスクワードが“世紀末の魔術師”だつたんでしょう？」

「たぶん、曾祖父がそう呼ばれていたんだと思います。曾祖父は16歳の時、1900年のパリ万博にからくり人形を出品し、そのままロシアに渡つたと聞いています」

「なるほど・・・1900年といえば、まさに世紀末ですなあ・・・」

と毛利探偵も話に参加。

それにもしても・・・長えなあ・・・このトンネル。
どこまで続くんだよ！？

と思っていたら、カラカラ・・・とかすかな音が。
気づいたのは、探偵くんとオレだけらしい。

立ち止まつた探偵くんに「どうしたの？」と毛利さんが声をかけると
「今かすかに物音が！？」と探偵くんが答える、「スコーピオンか！？」
と毛利探偵。

「ボク、見てくるー！」と駆け出してしまつた探偵くん。

それを毛利さんが追いかけようとするので、止めて、「私が行きます！毛利さんはみなさんと一緒にいてください！」と言つて、後を追つた。

本当、探偵つて好奇心旺盛だよなあ・・・と思いつつ探偵くんにひいていく。

ライトの光が当たったのに驚いたのか、急に振り返る。

「なんだ、白鳥警部か・・・」とホッとした様子。

一緒にしばらく歩いていると・・・

「ああっ！－オマエらー－－」と探偵くんの叫び声に近い大声。ライトの先には・・・「コナンくん！」と嬉しそうに言つた、むつきの4人の子供たちだった。

事情を聞いてみると、落ちてしまつて戻れなくなつてしまつたらしい。

ということで、危険なので一緒に戻ることに。

毛利探偵たちの元に戻り、テンションの上がつた子供達は歌まで歌いだす始末。

「どういうつもりなんだ！？コイツら・・・」

「いいじゃないですか、毛利さん。大勢の方が楽しくて」と毛利探偵と夏美さんの会話を聞きつつ、角を曲がると・・・

「あれ！？行き止まり・・・」「通路をどこかで間違えたのかしら？」

いや・・・「そんなはずありません！通路は一本道でしたから

それにしても、この双頭の鷲・・・と思つていたら、子供達が「わあ！鳥がいっぱい！」「あれ？変ですね・・・大きな鳥だけ頭が一つありますよ！」と口々に叫ぶ。

その後ろで、小声でのクールな女の子と探偵くんの会話。

「双頭の鷲・・・皇帝の紋章ね・・・」「ああ・・・王冠の後ろに

あるのは太陽か・・・太陽・・・光・・・」

なんか、ここだけ雰囲気が違うような気がする・・・。

あの女の子、紅子に雰囲気似てるなあ・・・。

「もしかしたら！－白鳥さん！あの双頭の鷲の王冠にライトの光を

細くして当ててみて！－」

と、急に指示が飛んできた。

「あ、ああ・・・」と返事をし、実行すると・・・

「あつ！光つたぞ！－」というセリフに重なるように、またしてもゴゴゴ・・・とすごい音がして・・・地面が下がり始めた。
「みんな、下がって！－」と言つてゐるのに、探偵くん、そのままだし・・・。まあいいか。

と、そのまま眺めると

「入り口・・・！なるほど。」の王冠には、光度計が組み込まれてるつてわけか・・・

と感心していたら、オレの立つてる場所も動き始めた。

「わ！」と言つて、飛びのぐ。

階段の出現。

下を照らすと、探偵くんがライトの光に照らされた。

そして、その奥にはまたしてもトンネル・・・

少年が「スッゲー！－」、毛利探偵が「なんて仕掛けだ・・・」と、みんなそれぞれ驚きで

開いた口が塞がらなかつた。

世紀末の魔術師1-3（後書き）

みなさまにちは。ペロ口です。

エイプリルフール！！今日から、4月です。4月1日といえば、コナンくんとキッドが出会った日でもあります。なんだか懐かしいというか嬉しいというかで、自分で書いた「漆黒の星」を読み返したりしてました。

さて、今回は・・・

探偵団との合流。そして、雰囲気の違う2人の会話。
哀ちゃんが紅子ちゃんに似てるというのは、これまたうちの勝手な偏見でござります。なんとなく似てるんですよね。。。//ステリアスといいますか。

快斗に代弁していただきました。

世紀末の魔術師もだいぶ佳境に入つてきて、なんか興奮しています。20話ぐらいですね。やっぱり。

春休み中に終わらせるのが目標なんですが・・・微妙になつてきました。

とにかく、今月はキッド用間！

テレビに登場しまくりですからね~。

こつちの小説の方も、キッドを見守つてやってください。

それでは、評価・感想・ご意見などいただけたら嬉しいです
これからもよろしくお願ひします！！

探偵くんが見つけたさらなる地下への道を進んでいくと、そこは、一つの部屋のような場所。ドーム状のような感じだ。何か、台のようなものもある。

カチュー・シャの女の子が、「まるで卵の中にいるみたい!」と言つたのが、的を得ている表現。

明かりをつけるため、ろうの乗った皿に、毛利探偵がライターで灯りをつけ、辺りはほのかに明るくなつた。そして、そこにあつたのは……

「柩のよしへすね……」とつぶやくと、毛利探偵が近づいてきて、

「造りは西洋風だが、桐で作られている……それにしてもでっかい錠だな……」と、柩を観察。

すると、探偵くんが「あー! 夏美さん! あの鍵! ! ! 」と叫んだ。

鍵? と思っていると、夏美さんも何かを思い出したのか、「そつか! 」と言いつつ、かばんの中から古い大きな鍵を出しながらやって來た。

そして、その大きい鍵を入れると……開いた!!

毛利探偵が「開けてもよろしいですか? 」と尋ねると、了承の返事。力を入れて、なんとか持ち上げた。柩の中には……

「遺骨が一体……それにエッグ! 抱くようにして眠つている……

「夏美さん、この遺骨はひいおじいさんの……? 」と毛利探偵が尋ねると、

「いえ……たぶん曾祖母のものだと思います……横須賀に曾祖父のものだけあって、ずっと不思議に思っていたんです……もしかすると、ロシア人だったために、先祖代々の墓には葬れなかつ

たのかもしません」と答えていたと、セルゲイさん・青蘭さんも近づいてきた。

「夏美さん、こんな時には思いますが、エッグを見せていただけませんか?」とセルゲイさんが申し出た。夏美さんがセルゲイさんに渡す。セルゲイさんが受け取り、エッグを見ていく。
「底には小さな穴が開いていますね・・・」
そして、開閉式のそれを開けると・・・「カラッポ!?」「そんなバカな!?」「どうこうとかじり?」と、毛利探偵や青蘭さんも覗き込む。

すると、カチューシャの女の子が「それ、マトリョーシカなの!?
私んちにその人形あるよ。お父さんのお友達がお土産に買つてきてくれたの!」と言い、それに対し、毛利探偵は「何だ!? そのマト・リヨーシカ・・・って・・・」と疑問を口にする。

答えたのは青蘭さんだった。

「人形の中に小さな人形が次々入つているロシアの民芸品です」と。セルゲイさんも、エッグを見てそう思つたようだ。固定できるようになつているらしい。

と、それを聞いた毛利探偵。悔しそうに「あのエッグがあれば!..」と言つので、

「エッグならありますよ・・・。こんなこともありますからと、鈴木会長から借りてきたんです・・・」と言つて取り出すと、毛利探偵のディアップ。

「オマエ・・・黙つて借りてきたんじゃねえだらうな!?
・・・オイオイ・・・怪盗キッド様はそんなことしねえよ!..
とは、さすがにいえないでの、「や。やだなあ・・・そんなハズないじやありませんか!..」と、まかしておいた。

すると、セルゲイさんが、持っていたエッグを手に取り、はめると、それはもつぱりタリとはまつた！！

「つまり、喜市さんは2個とエッグを別々に作ったのではなく、2個で1個のエッグを作ったんですね・・・」とセルゲイさん。

すると、やつぱり雰囲気の違う子供2人（1人は、年齢詐称）の会話が耳に入る。

「不満そうね？」

「ああ・・・あのエッグには何かもつと仕掛けがあるような気がしてならねえ・・・それこそ、“世紀末の魔術師”の名にふさわしい何かが・・・」

お2人サン・・・いいところこりますよ。

それにしても・・・この紅子似の少女、明らかに変じやねえ？
雰囲気というか・・・年相応の発言をしてないというか。探偵くんは分かるけどや。

何で！？・・・と考えていたら、毛利探偵がエッグをみてつぶやいた。

「それにしても見事なダイヤですね・・・」

いや、違うよと思い、口に出そうと思つたら先に夏美さんが言つてくれた。「ガラスですよ」と。

横目で探偵くんを盗み見ていると、・・・おー！氣づいたらしいね。

「セルゲイさん！そのエッグ貸して！！」と走り寄つてきた。

「また、コイツは！！」と怒る毛利探偵を抑えて、

「何か手伝うことは？」と尋ねると、「ライトの用意を！！」と答えた探偵くんに続いていく。

「ライトの光を細くして、台の中に・・・」と囁つので、台にライトを入れる。

「セルゲイさん、青蘭さん！口ウソクの火を消して！」といつ指示

に2人も従う。

辺りが暗くなり、ライトの光のみの明るさとなる。

「一体、何をやろうってんだ?」と尋ねる毛利探偵にて、「まあ、見てて……」と答え、

エッグのライト光にかぶせるように台の上に置いた。

すると、エッグは明るく光り始めた……

みんなも、じんじば。ペロロです。

世紀末も、1-4話までやつてまいりました。

いつもたくさんのおメッセージありがとうございますーー。もへ、本当に嬉しいです。こんなうちゃんかに、お褒めの言葉、たくさんいただいてしまって、なんか申し訳なく感じてしまつまびらか。

わへ、そんな私情は置いといて、今回は・・・

2個目のロッグ発見＆怪盗の疑問。

怪盗の疑問といつのはですねえ。哀ちゃんのことですね。はい。この段階では、哀ちゃんのこととは知らないことこのことなので、疑問に思つのみでござりになりました。

次の話は・・・

エッグの仕組みについてになるかな?どうも行くが分からぬのですが、まあ、いけるまで・・・(20話)

こんな、計画性のなこやつでせ!やれこますが、評価・感想・ご意見など心からお待ちします!ーー

それでは、これからもよろしくお願ひしますね。

光りだしたエッグの中身がどんどんと透けてきて、中に入っているエッグの中身である、皇帝一家の人形がネジも巻かずにせり上がりってきた。こいつは・・・

「エッグの中に光時計が組み込まれているんですよ・・・」
中に組み込まれているガラスに、ライトの光が次々と反射し、エッグの上部についた大きなガラスから幾筋もの光があふれだした。みんな、ビックリして上を見上げる。そこには

「二、二コライ皇帝一家の写真です！」

「そ、そうか・・・エッグの中の人形が見ていたのはただの本じやなく、アルバム・・・」

「だから、メモリーズエッグだつたってわけか・・・」

「もし皇帝一家が殺されずにこのエッグを手にしていたら・・・これほど素晴らしいプレゼントはなかつたでしょう・・・」と、みんな上を見ながらの会話。

「まさに世紀末の魔術師だつたんですね、あなたの曾おじいさんは・・・」

「それを聞いて、曾祖父も喜んでいること思います・・・」
と、毛利探偵と夏美さんの会話。まったくだよ・・・すげえよなあ・・・」

「ねえ！夏美さん・・・あの写真、夏美さんの曾おじいさんじゃない？」と探偵くん。

「・・・え？」

「あの一人で椅子に腰掛けて撮っている写真・・・」

「ホントだわ！・・・じやあ、一緒に写っているのは曾祖母ね・・・」

やつとお顔が見られた・・・曾おばあさま・・・と感動している

夏美さんに

「あの写真だけ、日本で撮られたのですね・・・後から喜市様が加えられたのでしう・・・」と沢部さんが話しかける。チラッと横目で探偵くんの様子をうかがうと・・・おや?何かに気づいたようですね。

と思つていたら、「写真が消えてきた。時間、きれかな。セルゲイさんがエッグを取りつつ、夏美さんに言つ。

「このエッグは、喜市さんの・・・いや、日本の偉大なる財産のようだ・・・ロシアはこのエッグの所有権を中のエッグ共々放棄します。あなたが持つてこいや、価値があるようですね・・・」

「ありがとうございます」

と言つてはいる横で探偵くんは台からライトを取り外す。それを横目で見ていると、Heggを受け取った夏美さんは心配そうに言つ。

「あ・・・でも、中のエッグは鈴木会長の・・・」

「鈴木会長には私から話してあげましょ。きっと分かつてくれますよ・・・」と毛利探偵が安心させる。

「何はともあれ、メデタシ、メデタシだ!」と毛利探偵が満足そうに言つてはいるのを聞いてたら・・・え? ! レーザーポイント!

偵の前を一発の銃弾が通り抜ける。

「何しやがる、「ナン! ! 」って・・・アンタ、助けてもらつてそれはないだろ・・・とあきれていたら、今度は蘭さん。ライトを拾おうとした彼女に、探偵くんの悲鳴のよつたな声が響く。

「あれば・・・危ない! ! 」と探偵くんも気づいたのか、持っていた懐中電灯を毛利探偵に向かつて投げる。慌てて避けた毛利探偵の前を一発の銃弾が通り抜ける。

「拾ひな……うああ――ん――！」

思いつきり素だな、あれ。彼女の右目にレーザーポイントの光が・・・

・と思つていたら、オレの耳は聞き逃さなかつた。
彼女が小さく「新一・・・」とつぶやいたことを。

これもまた探偵くんが飛び掛つて彼女を間一髪のところで助ける。

「みんな！伏せろ！――」と探偵くんが大声で叫び、辺りは騒然。パニック状態。

そんな中、夏美さんがエッジを取り落としてしまい、犯人が拾つて逃走してしまつた。

「クソツ！逃がすかよ！――」と未だ素のままの探偵くん。
「ダメツ！――」という彼女の制止も聞かず、後を追いかけてしまつたので、

「毛利さん、あとを頼みます！――」と言い残し、後を追いかけた。

走つている途中、右目を撃たれて亡くなつている乾さんを発見した・・・

地下への入り口は、探偵くんが通つた後なのか、開いたままだつた。
そして、その後を追いかけ、上へ上がるとそこは、すでに火の海だ
つた・・・

世紀末の魔術師1-5（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。

結局春休みの間に、キッドsideを終わらせるには出来ませんでした。本日、始業式・・・なんと、高校3年生。受験生なんですね（他人事）

さて！

今回は、HUGの仕組み＆素の探偵くん。エッグの仕組みについて描写するのがとにかく難しくて・・・分かりますかね？

そして、もう一つのテーマ。素の探偵くん。

襲われた時、キッドは何をしてたんだ！ともなりますが、こんなとこりでトランプ銃を取り出すわけにもいかず、毛利探偵が撃たれそうになつた時は、コナンくんの方が早く反応し、蘭ちゃんの時は、毛利探偵の言動にあきれてたということで・・・。（逃）

まあ、普通に考えたら、キッドとしてあるまじき反応の遅さ。

さて、次回は・・・

キッドの思考ですね。そして、探偵くん、コナンくんの推理ショー開幕・・・ぐらぐらまでかな？予定通り、20話ぐらくなになります。

今月はキッド月間！楽しませていただきます

それでは、評価・感想・「」意見などお待ちしておりますーとこりか、送つてやつてください。

これからもよろしくお願いしますー！

彼を追いかけ走っている途中、オレは考えていた。

彼女があの時つぶやいた、彼の本当の名前……“新一”……。彼女は実は知っているのか？彼が工藤新一だということに……。

イヤ、それはないな。今まで何回か彼女に会ってるけど、そんな感じは受けなかつたし。

・・・じゃあ、あれは？！あの時、何で・・・・・

と、ここまで考えていて、唐突に思い出した。紅子の予言を・・・

『姿変わりし光の魔人 白き罪人を滅ぼさんとす
だがその前に 光の魔人に影がかかる
その影は光の魔人の 最も恐れしものなり』

探偵くんの正体を知った時にも考えたけど、あの時は分からなかつた。その“影”的内容に。IQ400のオレの頭は、走りながらもフル稼働している。

もし・・・もしも、探偵くんが自分の正体を隠して、あの幼なじみの彼女と過ごしているのなら・・・・・。オレと同じように、相手に言

えない秘密だから

だから、彼女に隠して過ごしていとしたら……。

探偵くんの最も恐れしもの……“影”の内容は……

“彼女に正体がバレること……”

少なくとも、あの博士って人は知ってるみたいだけどな。彼のこと
を普通に『上藤新一』と呼んでいたし。

探偵くんのことだから、おそらくそれは、彼女を守るためにやつて
いること。

・・・整理するつまりは、何でか知らないけど、探偵くんは子供
になってしまって、それで幼なじみに（彼女を守るため）正体を隠
して生活しているひトコか？

つたく・・・マジで事件体質なんだな。

で、知つてるのは、あの博士って人・・・。いや、待てよ？あの紅
子似のオジヨーサン・・・彼女もやけに探偵くんに意見求めてるつ
て感じだつたな。

何というか、あの2人の雰囲気は、秘密の共犯者みたいな感じが出
てたような気がしないでもないし・・・。うん・・・これは、
保留だな。

それにしても、探偵くん、ドコー?と、思っていたら人の気配。瞬時に気配を消し、その人がいる方へ……と、急に声が響いた。

「ちょっと待つたあ！ テメエだけ逃げよつたって、そりは問屋が卸さねえぜ！」

「え？ この声……毛利探偵！？」

「アンタの正体は分かっている……中国人のフリをしているが、実はロシア人だ！」

つて、今度は、白鳥刑事！？ ……オレ、しゃべってねえぜ？

すると、『声』はさらに続けて言つ。

「……そうだろ？ 怪僧ラスプーチンの末裔まつえい……青蘭さん！！」

この口調……探偵くんか？ ビックリしたあ……。

といふか、相手は国際的犯罪者。探偵くん、勝算はあるのか？ しかも、相手は銃所有……。

といふことで、スーパー・ピオンの正体に驚きつつも、（まあ、探偵くんのことだから、きっと何か策があると思うけど） いつでも補助できるように、トランプ銃を取り出し、そのまま見続けておくことにした。

さあ、名探偵……じつくじとその推理聞かせていただきますよ？

世紀末の魔術師1-6（後書き）

みなさん！「んにちは、ペロ口です。

よつやく・・・よつやく！」今までやつてきました！本当に良かった
（へ・へ・）ほほっヶ月、この話が続いています。ノンビリすぎて
スイマセン（――）

今日は、シークレットファイルの発売日で、テンションが上がった
ため投稿させていただきました（笑）奇術愛好家も入ってるんですね
よ 見た方は、うちのを読んで幻滅しないでくださいね？

さて、今回は・・・

以前お知らせしたとおり、キッドの思考＆コナンくんの推理ショー
開幕でした。

よつやく、以前書いた紅子ちゃんの予言内容につなぐ事が出来てホ
ッとしています。全てが繋がった感じかな？哀ちゃんの件は、きち
んと考えてるので安心を うちの妄想では、哀ちゃんのことも
キッドは知っているといつことになつてているので。

コナンくんの推理は、次の話からとなります
まあ、映画と全く同じですが、実況中継風になつてしまふかもしれ
ませんね：

といつことで、次の話は・・・

コナンくんの推理ショー 全部いけるか微妙なところです。

前回、高3だと言つたら何人かの方が話に乗つてくださつて嬉し
かつたです（*^_^*）勉強も頑張らせていただきます。それでは、こんなうちでよろしければ、評価・感想・ご意見などいただけ
たら嬉しいです。

これからもよろしくお願いします！

未だに隠れたままの探偵くん。が、様々な人の声を使って、スロー
ピオンである青蘭さんを追いつめていく。

そして、たまに移動して銃の弾数を減らしていく作戦のようだ。
タタタ・・・と移動し、そこに2発の銃弾。

「フン！ 最初は気づかなかつたさ。浦思青蘭(ほしせいらん)の中国名、プース・チ
ンランを並び替えると、ラスプーチンになるなんてことはな！」と、
寒川さんの声。

「オ、オマエは、私が殺したばず！！」

・・・そりやね。確かに彼は死んでたよ？と、一体、鎧(よろい)が倒れ、そ
こにまたしても2発の銃弾。そして、彼女がそこに向かつたスキに
またも移動。

そして、一発の銃弾。と、ここで探偵くんの推理の続きを始めた。
またしても白鳥刑事。

「ロマノフ王朝の財宝は本来、皇帝一家とつながりの深いラスプー
チンのものになるはずだった・・・そう考えたアンタは、先祖にな
り代わり財宝の全てを手に入れようとしたんだ・・・」

なるほどねえ・・・。でも、それは違うだろ？だからって盗んでい
うことはねえし。
ましてや、そのために人を殺すなんてありえねえ。

「執拗に右目を狙うのも、惨殺された祖先の無念を晴らすためだろ
う・・・？」

「い、乾・・・」

といふか、改めて考えてみると死んだはずの人間の声が聞こえるつ
てかなり不気味だよなあ・・・。と、ここまで来て、とうとう探偵

くんが彼女の前に姿を現した。

「ボク一人だよ・・・」「何ツ!?

「これ、蝶ネクタイ型変声機って言つてね。。。いろいろな人の声が出せるんだ・・・」と自分の胸元にある、赤い蝶ネクタイを手に取りながら言つ。

ああ・・・これだつたんだ・・・。奇術愛好家の時に、園子嬢の声を出してたの。（奇術愛好家8参照）

「オ、オマエ・・・一体・・・」と言つ青蘭さん。まあ当然の反応だわな。

「江戸川コナン・・・探偵やーー」

・・・「ン、決め台詞なわけ? オレも言われたことあるし・・・。
と、ここからより本格的な探偵くんの推理ショーが幕を開けた。

「寒川さんを殺したのは、アンタの正体がバレそうになつたからだ。・・・。寒川さんは、人の部屋を訪問しては、ビデオカメラで撮つていたからね・・・。とつこのことで裏返すのを忘れた写真・・・それは、恋人なんかじゃなく、グリゴリー・ラスプーチンの写真だつた!グリゴリーの英語の頭文字は「G」だが・・・ロシア語では「(ゲー)」だ。だから、喜市さんの部屋にあつたゲー・ラスプーチンのサインを見てもすぐには繋がらなかつた

・・・へえ?なるほどねえ。

「寒川さんに写真を撮られたと思ったアンタは、彼を殺害しに行つた・・・そつだろ? 青蘭さん・・・いや、スコーピオン!!--

「ふ・・・よく分かつたねえ、坊や・・・
いや、坊やじやねえし。

「乾さんを殺したのは、その銃にサイレンサーをつけているところ

でも見られたつてどこかな?」

「オヤオヤ……まるで見ていたよ! ジやないか!」
え? そうなの? 当り! …? セツスが、名探偵

「でもおつかやんを狙つたのは、ラスプーチンの悪口を言つたからだ! そして……蘭の命までもを狙つた! …」 といつ探偵くんに書斎での会話がよみがえる。

『お父さん、ラスプーチンって?』『いや、オレも世纪の大悪党だつたところ!』とぐらりいしか……』

と、青蘭さんの声が飛び込んできた。

「おしゃべりはそのぐらいにしな! 可哀想だけビ、アンタには死んでもらうよ!」

「その銃……ワルサーPPK/Sだね。マガジンに込められる弾の数は八発……乾さんとおつかやん、蘭に一発ずつ。今ここに五発撃つたから、もう弾は残ってないよ……』
あ、これが勝算だったつてわけね?』

「ふ……いいこと教えてあげる。あらかじめ銃に弾を装填した状態で八発入りのマガジンをセットすると、九発になるのよーつまり、この銃にはもう一発弾が残つているつてこと!」

オイオイ……これはマジだぜ? だが、探偵くんは逃げることなくむしろ、余裕の表情。

「じゃあ、撃てよ……本当に弾が残つてんのならな……』
つて、オーイ!』

慌ててトランプ銃を取り出す。が、やはり探偵くんは動かない。

まだ、何か勝算があるのか? 探偵くんの右目にレーザーポイントの

明かりが合わせられ . . .

「バカな坊や・・・」と彼女が呟いた後、一発の銃声が響いた

世紀末の魔術師1-7（後書き）

みなさま、じんこちば。ペロロです。

今回も読んでいただけてありがとうございます

最近、本当にたくさんの方にこの小説を読んでいただけてるということを実感しています。ありがとうございます(*^-^*)

さて、今回は・・・

コナンくんの推理ショー

キッドの実況中継風になつてしましましたが・・・。たまに、突つ込みを入れる感じで（笑）

今更なんなんですが、ハツキリ言つてこの小説のキッドは、アホですね。もう、これ以上ないくらい。うちの書くキッドはなぜにアホになつてしまふんでしょう？他の作者様の書くキッドはとにかくキザでカッコいいのに・・・。これも、やはり技術の違いですね（泣）精進いたします；

さて、次回は・・・

銃声の響いたあとのコナンくんの行方。そして、脱出して・・・ぐらいでですかね。

だいたい完成しつつありますね、自分で。ようやくですが；うちは、最初下書きをしてからパソコンに入力するタイプなんですが、ただ今1-9話田を執筆中です。

20話・・・かな、やっぱり。楽しみにしてくださいね！

受験勉強もありますので、出来るだけ早く少しでも完成に近づけるのが当座の目標です。なので、世紀末の魔術師の完成を頑張って急いでいます。

そんなついでに、励ましのコメントや、評価を下せる、心優しき方を

お待ちします！（笑）

いや、本当ですよ。待っています

それでは、これからもよろしくお願ひしますね。

世紀末の魔術師 1-8（前書き）

「宣伝」

前回、後書きにて「うちのキッドはアホだ」と書いていましたが、うち自身が出来るだけキザれを追求して書いたのが「鎮魂歌 affective」です。

カッコよれを読みたい方は、そちらもどうぞ

でも、まずは世紀末を読んでくださいね
それでは、ドキドキのシーンへGO

と云ふか、こんな感じで宣伝してもいいのか？

『じゃあ撃てよ・・・本当に弾が残つてんのならな・・・』『バカな坊や・・・』

一発残つていた銃弾は引き金を引いた時正常に作動し、探偵くんの右目へと一直線に向かい、探偵くんの眼鏡を割つて

つて、ええ？！割れない！？というか、弾き返した！？

一瞬怯んだ青蘭さん。そのスキに探偵くんはあの超人キックを繰り出そうとする。

が！スコープピオンである青蘭さんもすぐに我に返り、新たにマガジンを装填する。

で、狙いを定めようと銃を構える・・・ので、危ない！！！と、オレは素早く青蘭さんの銃をトランプ銃から出たトランプで弾き飛ばす。と、次の瞬間。オレも怯んだあの超人キックから繰り出された鎧の一部が青蘭さんに直撃！

・・・痛そー・・・。

もちろん、彼女は気を失つてしまつた。

彼は彼女に近づき眼鏡を取り外しながら説明する。

「あいにくだつたな！スコープピオン・・・このメガネは博士に頼んで特別製の硬質ガラスに変えてあつたんだ！！」と。

・・・博士？ああ、あのじいさんか。確か発明家だったよな。

つてことは、そのメガネだけじゃなくおそらくは、あの蝶ネクタイ

も超人キックを繰り出すためのあの靴も……。そして、以前奇術愛好家のときに、園子嬢を眠らせたのもおそらくは、例の「博士」の発明品つてことか……。

スゲーな。特許とつてるのか？あれ。

と、感じしているヒマはなかつた。城が崩れ始めている。

慌てて探偵くんのところに駆け寄っていぐ。「「コナンくん！大丈夫かい？」と聞くと、振り向くと同時にメガネをかけ直してしまいやがつた。

! !

何かに気を取られた様子の探偵くんを急かす。

何とか火のあまり回つていないとこから脱出に成功し、車のもとへと走る。

後部席に横たえ、メモリーズ・エッジを取り返す。そして、後ろについてきた探偵くんに言つ。

「僕は今から彼女を警視庁に連れて行くから、このヒッグ、夏美さんには返してくれるかい？頼んだよーー！」と有無を言わさぬ口調で言い残し、車に乗つて横須賀を後にする。

道中、無線で警視庁の警部さんに連絡を入れておく。

「あ、田畠警部ですか？今、そちらに向かっているところなのです
が、スコーピオンを捕まえました。現在気を失つておりますが、命
に別状はありません。私は用事があるので、あとはよろしくお願ひ
します」と。

無線の奥では、警部さんとが呆気にとられていたと思つ。
道が空いていたため、案外すぐに到着した。
急いで彼女を引き渡し、オレは用事を済ませにあるといひくと急い
だ。

そう、ある場所とは・・・
米花町2丁目21番地。上藤邸である。

みなさん、こんばんは、ペロロです。
いやあ・・・。ひとつひとつ今まで来てしましたねー自分でドキ
ドキです。

そして、今日はキッドがアニメに登場 しつかりと楽しみたいと思
います

さて、今回は・・・

銃撃戦＆脱出＆工藤邸へ。ところひとつで、一気に進ませていただき
ました。

映画の脱出シーンは書かれていないので、どうじょりと想つたんで
すが、そこは回避^{スル}の方向で（笑）

ただ、その代わりと言つては何ですが会話をきりんと交わしていた
といふことにさせていただきました。そして、道中田暮警部に連絡
も済ませていたといふことで

工藤邸に向かう理由は、もちろんみなさんお分かりだと思いますが、
それは次回！

といふことで、次回は・・・

工藤邸侵入後＆毛利探偵事務所へ。

いよいよ、あの映画のクライマックス しつかりと書かせていただ
くので、お付き合いをお願いします

また、評価・感想・ご意見など本当にたくさんいただいてありがと
うございます！これからも、「こうした方がいい」や「面白」（
え・）などの言葉、お待ちしております。

これからもよろしくお願いしますねー！

やつてしまひました！あの名シーン
・・・・・自信を持つてお届けできたらそれほどいいことは
ないのですが、イマイチかもしれません・・・。
とはいっても、まだラストまではいっていませんが。

あーいよいよクライマックス
楽しんでいただけたら嬉しいです(*^-^*)
では、どうぞ

工藤邸に到着したオレは、いくつかの張り巡らされたセキュリティを難なく突破し、中へと入らせていただいた。小声で一応「お邪魔します……」と呟きつつ。

初めて入る工藤邸の第一印象は“広い……”とにかく広い。これ、本当に一軒家だよなあ……?と驚えつつどんどんと奥へと進んでいく。

暗闇でも、オレの目はキッズをやつしているせいか慣れているので、辺りを見回す程度には見えている。

「2Fかな……」と独り言を言いながら階段を昇っていく。で、昇つてみたら、そこは部屋、部屋、部屋……。さすが金持ち。一般庶民のオレン^{ちゃん}家とは違うねえ。つて、こんなところで時間食うわけにはいかねえんだよ!…どこだ? 工藤新一の部屋は。

仕方がないので、片っ端からドアを開けては閉めていく。4つ目まで来た時、それらしき部屋に遭遇。

ベッド、机、そしてずらりと本の並んだ本棚。大きな洋服タンス。タンスの戸を開け、中を物色させてもらい、帝丹の制服を取り出し着てみる。

・・・ウワ〜・・・ブレザーって着慣れてないせいか変な感じ。サイズはぴったり。

新聞とかテレビで見た感じだと、けっこつ顔立ちはオレに似てたし、いじらなくてもOKかな。問題は髪の毛。記憶にある工藤新一ヘア

ーにセツトし、これで準備は終了。

声も確かに変える必要はねえし、これほど簡単な変装はおやじく、口イツ以外はありえねえな。

とか思いつつ、工藤邸を出ると・・・雨。傘ねえし。さすがに借りるわけにはいかないので、濡れちゃうけど・・・ま、オマエのためだぜ？探偵くん。と、雨の中を毛利探偵事務所を目指して走り出した。

角を曲がると、彼女、毛利蘭さんが窓から顔を出していったので、慌てて隠れる。

彼女が中を向いた瞬間、一気に駆け出し、事務所への階段を昇る。

と、聞こえてきた声・・・彼女の声だ。・・・泣いてる？

「ホントに新一みたいで・・・」って、核心に迫ってるじゃねえか！！

「でも、別人なんでしょう・・・？そななだよな・・・コナンくん。・・？」

・・・？探偵くんの声が聞こえない？ほら、早く否定しねえヒー！と、そつと中をうかがうと、

あ、オレの愛鳥のハト・・・もう、元気そうだな

「あ、あのさ・・・蘭・・・」つてオーケイ！メガネ外し始めちゃつてるじゃねえか！言っちゃダメなんじゃねえのかよ？“最も恐れしもの”なんだろ！？というより、彼女を守るためになんじゃねえの！？もしかして、オレの予想が外れてたつてこと！？

さすがにこれ以上になると危ないので、姿を現すことにした。が、当の探偵くんは気づかずに「オレ・・・実は・・・」と話しあす始

末。

だが、彼女はドアの方を向いていたためにオレに気がついてくれた。

「・・・新一・・・」

「えつ！？」と探偵くんも振り向く。

「ホントに新一なの！？」

・・・・厳密に言つて、違ひね（笑）とこいつ」とで、その質問はスルー。

「あんだけよ、その言い草は・・・おめえが事件に巻き込まれたって言つから様子を見に来てやつたのによー」と言つたら、彼女はオレの方へ走り寄つてきた。

その後ろで探偵くんは・・・あれ、驚いてる。・・・つて、あっちや～。気づいたみたいだね。

「バカ！…どうしたのよ！？連絡もしないで！？」

「え？連絡とかしてねえの？そりや、怒るだろ・・・。

「悪い、悪い・・・。事件ばっかでさ・・・今夜もまたすぐに出かけなきやいけねえんだ・・・」探偵くんからも早く逃げたいし。

「待つて！今、拭くもの持つて来るからー！」と、彼女は階段を昇つていってしまった。

それを見送ったオレは・・・さつれと逃げる」とした。まあ、無理だらうけど。

とか思いつつ、来た道を戻り始め、また雨の中を歩き出した時、声がかかった。

「待つよー盗賊キッド・・・」

はこよ。とまでは言わなくても足を止め、探偵くんの話を聞く」とにする。

「まんまと騙されたぜ・・・まさか、あの白鳥刑事に化けて船に乗

つてくるとはな・・・」と叫び声を背後に、指笛で探偵くんが助けてくれたオレのハトを呼ぶ。

しつかりとしつけられた愛鳥のハトは、開いていた窓から飛んできてオレの肩に。

まあ、今頃、本物が警視庁に帰つてゐるだろつから、警部さん、混乱してゐるだろつから、

世紀末の魔術師1-9（後書き）

みなさま、じんじちは。ペロ口です。
やつてきました。世紀末の名シーン
・・・の前半。（笑）

といふことで、今回は・・・

快斗の変身＆毛利探偵事務所にて、快斗（新一）登場。
いやあ・・・やっぱりいいですよね。この映画。
もう、何も語りません。今回は、素直に受け取っていただけたらい
いなと思います。

次回は・・・

いよいよ、「世紀末の魔術師」最終話！！ジャスト20話といつキ
リのいい感じでいけるのがすく嬉しいです。もちろん、あのシー
ンも書きますが・・・おそらく描写は出来ません。というか、マジ
ックのタネが分かりません；

とこ「う」と、最終話を間近に控えたこんなつひー、励ましの評価・
感想を！そして、ダメだしなど大歓迎！の意見などお待ちしていま
す。

これからもよろしくお願いしますね。

世紀末の魔術師20（前書き）

長い間、お付き合いありがとうございました！――
いよいよ、今回が「世紀末の魔術師」ラストとなります。

約3ヶ月かかった全20話・・・
最後までお楽しみ下さい

探偵くんはびっくり、オレとお話をしたこらしに、びんびんと話しかけてくる。

「オマエ、分かつてたんだな……あの船の中で何か起きた事……」

「え？ いや、全然！ むしろ、成り行き（笑）

と言つのは、何かイヤなので、探偵くんが勝手に推測してくれたので、調子を合わせておく。

「確信は無かつたけどな……一応、船の無線は盗聴をせりもひりたぜ」

と、ウソをつくかわりに、一つネタばらし。

・・・したのに！ 探偵くんはそれをスルーし、まだ話を続ける。

「もう一つ……オマエがエッグを盗もうとしたのは、本来の持ち主である夏美さんに返すためだつた……」

オレは話を聞きながら、ポンポンとハートを空中から出し、体にとめていく。

「オマエはあのエッグを作つたのは、香坂喜市さんで『世紀末の魔術師』と呼ばれていたことを知つていた。だから、予告状に使つたんだ……」

「ほーう……他に何か気づいたことは？」と促せば、すぐに返事が返つてくる。

「夏美さんの曾おばあさんが、二ノワイヤ皇帝の三女、マリアだつてことを言いたいのか？」

「マリアの遺体はまだ見つかっていない……」と後を継げば、すぐ返答。

完全に気づいているんだな、探偵くんは。

「それは、銃殺される前に喜市さんに助けられ、日本へ逃れたから・・・一人の間には愛が芽生え、赤ちゃんが生まれた・・・。しかし、その後に彼女は亡くなつた。喜市さんは、ロシア革命軍からマリアの遺体を守るために、彼女が持つてきた宝石を売つて城を建てた。だが、ロシア風の城ではなく、ドイツ風にしたのは、彼女の母親、アレクサン德拉皇后がドイツ人だつたからだ・・・。こうして、マリアの遺体はエッグと共に秘密の地下室へと埋葬された・・・そして、もう1個のエッグには、城への手がかりを残した。子孫が見つけてくれることを願つてな・・・とまあ、こう考えてみれば全ての謎が解ける。」

はい、正解 長セリフご苦労様。おかげで、オレはハトで真っ白だよ・

ま、さすが名探偵だね。だけど・・・

「キミにひとつ助言をさせてもらつぜ。世の中には謎は謎のままにしといた方がいいってこともあるってな！」と言つと、

「確かに、この謎は謎のままにしといた方がいいかもしだねえな・・・

・」と分かつてくれた。

ではここで一つ、名探偵に質問を。

「じゃあ、この謎は解けるかな？名探偵・・・なぜオレが工藤新一の姿で現れ、やつかいな敵であるキミを助けたのか・・・」と尋ねていると、

「新一！』と彼女の声。時間切れだな。

パチン！と指を鳴らし、俺は退散。ハトが夜空へ飛び立つ中、空中で消えさせていただいた。

さて、解けたかな？あの謎は。

まあ、ハトを助けてもらったっていうのも理由の一つだけど・・・

同じ立場だからさ。

もちろん、探偵と怪盗としては対極の立場なんだけど、幼なじみに正体を隠しているのはオレも同じ。彼女の涙ほど堪えるものはねえからな。

そして、もう一つ……探偵くんに「オマハの正体は知ってるぜ?」と知らせるためかな。

と思いつつ、工藤新一の制服を返しに再び戻ってきた工藤邸。簡単に中に進入し、制服を元通りにして、キッドへと姿を戻してこざり、出発！

つて時に、明かりがついた。

「えっ!?」と後ろを振り返ると、あの紅子似の少女が腕を組んで立っていた。

「……それで？怪盗さんは何の用があつて工藤君の服を？」と尋ねられ、呆然としていたオレはようやく我に返った。

「勝手にお邪魔してスイマセン、お嬢さん。」と頭を下げ、胸に手を当てる。

「我が名探偵殿の窮地を助けるために少々拝借させていただきました」

「……そう。それで、工藤くんはもう大丈夫なのね？」

「ええ、おやじくね。……あの、一つお尋ねしてもよろしいですか？」

「あら、何かしら？」

「彼を……探偵くんを工藤新一だと存知なんですね。なぜ……とお尋ねしても？」

「……彼を救つてくれたのなら、信用してもいいのかしら？」

「ええ。他言は決していたしません」

「そう……ま、彼が何もしなかつたのなら信用してもいいのかも

ね。いいわ、教えてあげる。彼を・・・工藤新一を江戸川コナンにしたのが、この私だからよ。そして、私も彼と同じように姿が小さくなつたもの・・・。これぐらいでいいかしら？怪盗さん？」

「ええ、十分ですよ。答えていただきありがとうございました。それでは、この事は約束したとおり、決して他言はいたしませんので、ご安心を。では、私は帰らせていただきます。おやすみなさい、お嬢さん。いい夢を・・・」

と言つて、工藤邸の窓からハンググライダーで飛ばせていただいた。もう、雨は止み、オレの心の中の疑問と同じように晴れ渡つていた。彼女も知つていたんだな、彼の正体。そつか・・・。今度会う時が楽しみだな。

彼女はきっとオレに会つたことは言わないだろうし。紅子似だから。そういえば・・・やつぱり疑問がまだあつた・・・。どうして彼女、確か・・・「灰原さん」って呼ばれてたな、彼女はオレがあそこ、工藤邸に行つたことを知つていたんだろう？

世紀末の魔術師20（後書き）

みなさま、こんばんは、ペロロです。

やつれやこました～！これにて、「世紀末の魔術師」は終了になりました
います～お付き合いありがとうございました

さて、今回は・・・

気合を入れて臨んだ今回のお話。映画のクライマックスと云ふこともあり、できるだけ丁寧に書いづらーと思つたのですが・・・いかがでしたか？

うち自身が、コナンにハマつたきっかけとなつた、この映画。コナンを初めて見たのがこの映画だったんですね。で、見事にハマりました。

キッドが助けた理由、ハートのことだけじゃないんじゃないかな？という妄想からスタートし、いろんな長いことかかつてしましました。これも、書きたかったひとつなので。

最後の哀ちゃんとの会話は・・・オマケみたいなものです。もちろん、哀ちゃんが工藤邸にやつってきたのは、センサーに反応した影を、阿笠邸で確認したため。工藤邸のセキュリティーは、哀ちゃんのパソコンに繋がつていると、これまた妄想（笑）ゲストのような形で出演していただきました。

さて、次回は・・・

どうなるでしょうか？この後、小休憩を入れたいのでその後ですね。
お楽しみにしていてください。

それでは、こんな長い話に付きましたへだたつ心優しき皆様、本当にありがとうございます！

評価・感想・ご意見などたくさんいただけて、しかも褒めていただき

いて・・・ありがとうございます！パソコンの前で感動しています、いつも。

これからもよろしくお願いしますね！！

それでは、次の小休憩で
いつでも、評価・感想・ご意見など待っていますので、 いただけたら嬉しいです

小休憩2（前書き）

一応、ここで次のお話の予告風なのを書いていますが、読みたくなればスルーしてくださいって結構です。たいした内容書いていませんので・・・では、お読みになる方だけどうぞ

小休憩2

よつー突然・・・つてわけでもねえけど、再びこの「小休憩」に引っ張り出された黒羽快斗です。

・・・ん? 紙?

“キッドに変装するべし”

・・・・・ オイ。これ、ペロコからの命令つてことか?
つたぐ、面倒くせえなあ・・・。

POM

はい、作者ペロコに強制召喚された怪盗キッドです。改めましてこの
んにちは。

今日は・・・羽根休めですね。

今月は特に忙しかったもので・・・。いつも、お時間をいただき
ました。

わて、私情は置いといて・・・

先日までお話ししていた「世纪末の魔術師」、お楽しみいただけま
したでしょ? つか?

このたび、読者数が8500人を越え、いやりとしましても嬉しい
限りです。

作者は・・・今この部屋にはいないのですが、どうせどこかで隠し
カメラでも仕掛けておいて、それを見ながら笑っているのでしょうか・

・・。

とにかく、そんな作者はほっておきまして、『』愛読いつもありがとうござります。

「世紀末～」は、探偵くんに関する様々な情報を知ることが出来た機会でした。

改めて、タダ者じゃないなどという感想は正しかったのだと思いましてね。

だって、初めて会ったとき、誰が「工藤新一」だと予想できたでしょうか？！ビックリしましたよ・・・。心臓に悪い。そして、未だに灰原さんと仰るお嬢さんが、なぜ私が工藤邸に行つたことを知つていたのか掘めていません。

この怪盗キッドにもつかませないとは・・・なかなかやりますね・・。

・・・つだあああ！－めんどくせえ！

キッドは言葉遣い変えないとなんか違和感感じるから、頑張つたけどここからは黒羽快斗として話させてもらひ。一応命令は守つたし、文句はねえだろ。

さてー読者の方々から「次も楽しみ！」とか「次は何するの？」と、次への期待がかなりあり、オレとしてもかなり嬉しい。で、次の話なんだが・・・・

アイツが出るんだよ、アイツ！
ほら、分かんってる？アイツだよ、白バカ！
あの、探偵が集結した「黄昏の館」さー

つたく・・・白バカが余計な話持つてくるから、こんなことになる
んだぜ！？

・・・つと、ここからは次のお楽しみだよ。

つてなわけで、次からも楽しみにしてほしいな。オレとしては
ま、どこかでペロコモをつまみつてるだろ、おれらしく。

そういや、次で45話目なんだってな。なげ長えな、オイ。
いつも、付き合つてくれてサンキューな。

それじゃ、次のお話で よろしく頼むよ。

小休憩2（後書き）

みなさん、はじめまして。ペロ口です。

44話題は、小休憩 本当の羽根休めです。

ということで、勝手に指令を出させていただきました。ふぞけて
いてスマセン。でも、樂しげです。こういうのは。

さて！読者数がとにかく増えていて、本当に読んでいただけてる
んだな～とかなり嬉しいです 感激です (*^-^*) ありがとうございます

文章力の無いうちが、こんなお話を書いていて、さらにたくさんの方に
読んでいただけるなんて、夢でも見ていくのではないかと疑つてしまつほどです。

で、次のお話は本文中でも快斗が言つていたよつて「黄昏の館」
となります。

快斗視点の探さんを書くのはどうも・・・書けるのでしょうかね？
なんか、自分で書くと決めておきながら今更不安になつてきました；
頑張らせていただきます。

勉強がどんどん忙しくなつていぐので、今まで以上に時間がかかる
ことが予想されます。そして、この「キッドside」が完結し
ないまま受験本番に突入することとなると思いますが、これからも
お付き合いでお願いしますー！

次のお話からが「黄昏の館」本編です。

いつ投稿できるか分かりませんが、構想が決まり次第こちらに書か
せていただきますので。

それでは、これからもよろしくお願いしますーー！
長くなつてスイマセン。

黄昏の館1（前書き）

前回、いつ出来るかわからないと言つていきましたが、考え出したら止まらなくなり、第1話が完成しました。

とうとう、「黄昏の館」スタートです
楽しんでいただけたら嬉しいです
それでは、どうぞ！

春眠暁を覚えず。

これは、春は寝心地がいいので、夜明けになつても眠りから覚めないという意味。

そして、もう一つ。秋の夜長。

これは、そのままの意味で、秋は夜が長いということ。つまり・・・

「いい意味に解釈すると、夜の方が時間が長いんだし、夜は起きてて昼に寝てる方が効率がいいってことだよな」

「何ぶつぶつ言つてんの？」

「いや・・・昔の人はいい」と言つたなあつてことだよ

「？」

「アホ子には分かんねえだろ? 先人の素晴らしいしが!」

「何よ、バ快斗! 青子にだつて分かるもん!」

「へえ?」

「・・・つもう! 知らない! !」

「・・・はあ・・・。ねみい・・・」

最近は田舎らしいビッグジュークもなく、きわめて平凡で平和な日々を送っているオレ、黒羽快斗。

・・・そして、怪盗キッド。

外は紅葉が始まりつつある、秋の景色。

「平和だ・・・」

そんな平和だったはずのオレの秋は、一人のたつた一言からバラバラと崩れ去ることになる。

その一言とは・・・

「やあ、黒羽くん。おはよう。元気だったかい？」
といふ、この一言。

言葉の意味としては、朝の風景として別に当たり前の内容。ただ、その声の持ち主に問題があつただけで・・・。ここにいるはずのないこの声の持ち主は、なぜか気配を消して背後から現れ、唐突にオレにこの言葉をかけた。

この、甘つたるいイヤヤミな口調で・・・

「はっ・・・白馬あ！？」

「失礼な人だね、キミは。朝からそんな大声で驚き、さらに人に向かつて指をさすなんて・・・」

「オメハ・・・なんで日本にいるんだ？」

と、ようやくショックから立ち直ったオレは言葉を発することに成功した。が、コイツの切り替えしば、今までのようになに早かった。

「居では都合の悪い」ともあるのかい、黒羽くん？まあ、こいつに戻ってきたのにはちゃんととした理由があるのだけどね

「理由？」

「そうさ。コレがイギリスにいた僕の元へと届いたんだよ」と言つて、ヤツは、黒い紙を取り出し、オレに渡した。

“貴殿の英知を称え 我が晩餐に御招待申し上げます

神が見捨てし仔の幻影”

「あんだあ？」「ん・・・」

「どうだい？興味深いだろ？・・・？」

神が見捨てし仔の幻影・・・ねえ・・・。ふざけたこと抜かしやが

つて！

と、内面は怒り心頭なのだが、表面上はポーカーフェイス。何の興味が無い風を装つて「ん。」と渡された紙を返す。

「おや、いいのかい？」

「なんでオレにそんなこと聞くんだよ・・・」

「ふ・・・まあいいさ。僕がイギリスから帰つてくる間に調べてもらつていたんだが、コレは日本中の探偵たちに送られたそうだよ。最近有名になつてきているらしい眠りの小五郎・・・毛利探偵、そして、この僕含めて6人にな！しかもこれには、200万円の小切手が同封されていてね。それで急遽帰国したつてわけさ！」

「・・・へえ・・・わざわざイギリスにまで送るなんて、面倒なこ

とするな、ソイツ」

「ええ！それは、僕の実力を知つていたからでしょ！なので、僕が帰国して参加できるように、この晩餐会は明日の夜に行われるようです」

「あつそ・・・。じゃ、オレは寝るー。」

・・・アイツ、何考てんだ？わざわざ、あんなもんオレに見せて。もしかして、オレに来てほしいのか？なんぢやつて。

それにも、毛利探偵か・・・接点多いなあ、何だかんだで。つてことは、あの探偵くんもついてくるつてことだよな。

ふうん・・・面白いじゃねえか！白馬の狙い通りつてことがシャクだが、聞かされちゃやっぱ気になるし、今晚あたりにでも下見に行つてみるか。

で、夜。

書かれてあつた場所へと向かう途中にポツンと建つてゐるガソリン
スタンドを発見。

こりや、使える つてことで、下見は終了。
明日に備えて、今日は帰路についた。

みなさま、じんごちはです。ペロ口です。4月ももうすぐ終わり。そして、「ホールデンウェイーク真つ口」中ですが、みなさんの「ご予定はいかがでしょうか?」つけね、おやうぐどこにも行けません：

さて、今回は・・・

とうとうスタートした「黄昏の館」。全部で何話になるのか決まってこませんが、少しずつじっくりと仕上げていきたいと思っています。

冒頭の会話は、なんとなく思いついたものなので、別に深い意味はありません。

探さんに対する快斗は・・・探さんファンには微妙にキツイのでしょうか? 口調が難しい、彼・・・頑張って本物らしく書こう! と意気込んでいたのですが、なんかおかしい; 違和感感じた方がいらっしゃったらスママセン。

さて、次回は・・・

第2話目ですね。まだ、全体の構想をどんな感じに仕上げていくのか決まっていないのですが、ま、原作を読んで頑張ります。コナンくん、出てきまーすよ~（それだけ、決定）

それでは、黄昏の館もよろしくお願いしますね。

まだまだ、評価・感想・そして、「こうした方がいいよ!」という意見をお持ちの方など、メッセージをいただけたら嬉しいです。けっこう、未確定な部分が多いので、反映されることがあると思いますので。

それでは、いかにもやうじへお願こしもかーー！

翌日。白馬が戻ってきて2日目。

いよいよ・・・ってほどでもねえけど、今日が例の晩餐会。
なんか・・・わくわくするなあ あの探偵くんが絡むとどうもね。

つてことで、大した準備をするわけでもなく、家を出る。

向かう先は、昨日発見したガソリンスタンド。

ここに店員さんに変装して、彼が来るのを待つ。

オレのハトに取り付けたカメラから映像が入ってきてるし、いつでも準備OKなんだけど・・・雨降ってきやがったな。雷も鳴ってるし、なんかイヤな感じだ。

と思っていたら、1台の車。カメラをズームにしてみると、運転席に毛利探偵の姿。

よし、行くか!と、ガソリンスタンドから出て、車の方へ森の中を走り、見つけた。
彼の車。

オレはトランプ銃を取り出し、一発。パシュッと音がしてトランプが1枚飛び出し、車のタイヤを切れ味のよくなっているトランプがかすり、タイヤがパンクする。

さて、オレは戻るか・・・。

ガソリンスタンドに戻つて待つこと、10分。彼

毛利探偵が

入ってきた。

「あのお・・・すいませんが・・・」

「はい?」と、店員の格好で出迎える。

「車がパンクしちまつて・・・。タイヤのスペアあります?」

「ええ・・・ありますよ・・・」

「そいつあ～助かったーこの先にある、館に行きたいんだが、何でかパンクしちまつて・・・」

「ああ・・・それなら、せつとコレのせいでせのコレヒーヒ、トランプ銃を構える。

「あん?・・・お、オマエ・・・・・・」

「お休み、毛利探偵・・・」

パシュウッと、トランプ銃から即効催眠性のカードが飛び出し、煙が出る。

その際、マスクをつけることを忘れずに。

ドサッと音がして、毛利探偵は眠りの中へ。では、お洋服お借りしますよ、毛利探偵?

服をはいで、ここでもともと働いていたおじさんと一緒にしばって放つておく。

そして、毛利小五郎としてタイヤのスペアを持って車の元へ走る。

車に到着したオレは、手馴れた手つきでタイヤを取り替え、車を発進。

・・・あ、オレ、無免許だわ。・・・井、いいか。

「お前ら、こっちが近道らしいからこっちから行くぞー」と乗っていた蘭さんと、探偵くんに声をかけ、車は森の中へ。

・・・が、揺れる、揺れる!!ガタンゴトンとそれはそれは揺れる。

・・・・・つたく、何が近道だ!あのガソリンスタンドの親父・・・

199

「これで間違つてたらタダじゃ済まされやぞ！」と、外見は毛利小五郎としてしゃべっているが、内心では、この道は合つていて確信している。

何せ、オレが昨夜通つてんだから……歩きだつたけどさ。

と思つていたら、「あ、やつとまともな道に出たみたい……！」と蘭さん。

「でも、近道つていつのま、本当だつたみたいだね……」

「ん？」そりやそつだろ。

「だつて、ホラ、あれでしょ？ボク達がこれから行く黄昏の館つて……」

「と、後部座席から身を乗り出し、指を指す。

その指の先には……確かに屋敷。だが……

「黄昏の館つていつよつ、まるでドリキューラ屋敷だな……」と弦く。

雨が降り、雷が鳴つているので、それなりの雰囲気は出ている。助手席で、「ほ、ホントにこゝの……？あんなところ……？」と法える蘭さん。

「バーコー！『貴殿の英知をたたえ 我が晩餐に御招待申し上げます』なんて招待状と、200万の小切手もらつたら、行くつきやねえだろ……」と、あくまで毛利探偵として答える。

「でも、その招待状、差出人のところに何か不気味なこと書いてなかつた？」と、蘭さんは尋ねる。

「ああ……『神が見捨てし仔の幻影』とかなんとか……」と言いつつ、バックミラーで探偵くんの顔を見ると、それは嬉しそうな顔をしていた。

「ねえ……やっぱり行くのよそつよ。ホントにドリキューラが出たらしいやだし……」と、蘭さんは未だに怖がっている。

自分で言つたとはいえ……もしかして、お化けとかの類、苦手なのかな？

『メン』『メン』と思いつつ、フォローを入れる。

「フンーー」の日本にドリキュラなんていやしねーよー日本の山奥に住んでるって言つたら、せいぜい山姥ぐらーい・・・・・と言いつつ、視線を前に戻すと・・・そこには、傘を差した・・・

「や・・・山姥ー?」

急ブレーキをかけつつ、思わず叫んでしまった。

どんづらがる妄想ワールド・・・
みなさま、じんにちは。ペロロです。

今回も妄想全開でいかせていただきました
この「ゴールデンウィーク」、やはり一日中家に閉じこもるよつになり
そうですね・・・が、外はきれいな五月晴れ お出かけになる方は、
楽しんでくださいね

さて、今回は・・・

妄想ワールド全開の前半。アニメとして放送された時は、確かパン
クしてたはずとあやふやな記憶を思い出し、書かせていただきました
た。違っていたら・・・じつそりと教えてください（笑）
そして、毛利探偵との会話は、途中からキッドの声になつたつてい
うことで、どこからかは、おまかせです。

さて、次回は・・・

“山姥”と出会いわけですが・・・。探偵たち、何人まで登場させ
ることが出来るでしょうか？未確定です。行き当たりばったりです
ね；

また、出来次第考えます。区切るとこが難しい・・・。

いつも、たくさんメッセージありがとうございます 本当に励み
になります（*^-^*）また、感想や評価、そしてじつ意見などい
ただけたら嬉しいです

「最初から読んでたけど、感想送るの初めて！」と言つ方が何人か
いらっしゃって、なぜかパソコンの前で照れてるひたちですが、これ
からもよろしくお願ひしますねー！

このお話で、読者数が10000人を突破しました
みなさま、本当にありがとうございます(*^-^*)
こんなアホな快斗くんがみなさまに受け入れてもらえて
書いてるうちも、とても嬉しいです

どなたが10000人目のかは分かりませんが、
そのミレニアムなカウントを踏まれた方は、うちがリクエストにお
答えします！

というのはウソです（笑）誰か分からないので・・・。
ってことで、今回も楽しんでいただけたら嬉しいです
ではどうぞ

オレは叫んだものの、さすがにそれはないだろ？と思いなおした。後ろで探偵くんが窓を開け、「おばーさん、どうしたの？」と声をかける。

すると“山姥”は、「見ての通り、私のかわいいファイアットちゃんがエンストしてしまつてね。誰か通りかかるのを待つていたのよ。あなた達もあの館に行くんでしょ？乗せてつてくれないかい？」と、笑顔で尋ねるので、別に断る理由もないし、「んじゃ、後ろの席にどうぞ」と勧める。

“山姥”が車に乗りながらお礼を言つていると、オレの横で蘭さんが「お父さん、行くんなら早く行こ！ 私、トイレ行きたくなっちゃつたし……」と、耳元で話しかけてきた。

・・・・・アップ・・・やつぱり青子に似てるなあつて思つてたら、後ろの“山姥”は突然話し始めた。

「お嬢ちゃん？ 余計な事かもしれないけど、私の町の小学校の校長がよく言つてたよ・・・成功する人間はそれがチャンスだと分かる人間だつて・・・『またいつか同じようなチャンスに巡り合えるやう過ごしてしまつたら、いくら待つてもチャンスは来ない』とね・・・どうしてさつき、ガソリンスタンドに立ち寄つたチャンスに済ませなかつたんだい？」と・・・。

「え！？」と、探偵くんと蘭さん。

そりや驚くよ。そんな話、これっぽっちもしてねえし・・・。

「何で知つてゐるの？ ボク達がさつきガソリンスタンドに寄つたって・・・」

「簡単な事だよ、おチビちゃん」と、“山姥”は話し始める。

「カラッポの灰皿と、その下に落ちてる真新しいタバコの吸殻……。灰皿から零れ落ちるまで吸殻をためてたってことは、ベビースモーカーの証拠。それなのに、灰皿は空から。そんなことが出来るのは、10キロほど前にポツンとあつたガソリンスタンドだけよ……。見知らぬ老婆を車に乗せてくれた紳士ジョントルマンが娘さんの前で車の窓からポイ捨てるわけないからねえ……」と見事な推理。

確かにガソリンスタンドにやつてきた彼は灰皿持つてたな……と一瞬遠い目をして、ふと我に返る。そして焦りつつ、「あ……あんた一体!?」と尋ねると、『山姥』は、「私は千間降代……あなたと同じ探偵よ! 眠りの小五郎さん?」と初めて名前を言つてくれた。

・・・ん?

「千間降代って……」

「安楽椅子に座つたまま、事件の話を聞いただけで解決しちゃうつていう、あの有名な……」

へえ……おもしれえ……。

「とりあえず、この灰皿は預かっておこうかい?」と身を乗り出し、灰皿を手に取る。

「あ、ちょっと!」と焦るが、それは演技。

笑みを浮かべた千間探偵は、「館に着いてからも私の前では吸わないでおくれよ? 私はタバコの煙が大の苦手なのだから……」とダメ押し。

でも、助かった……と思つたのは秘密。

「くそ……」と軽くにうんでおいた。

「さあ! 館は目の前よ! ビュンビュン飛ばしてちょうどいい! ……と、テンションも高く千間探偵は叫んだ……。

雨の中、車を飛ばすこと15分。

ようやく到着した館の駐車場に車をとめ、改めて屋敷を見上げて一言。

「つひやあ～・・・近くで見るとますます化け物屋敷だな・・・・と言つてる間に、蘭さんは急いで館の中へ。

傘を差し、オレらも玄関へ向かう途中、すでにとめてあつた車に目が行く。

「ベンツにフュラーリにポルシェ！」

「物騒な車ばかりだねえ・・・・」

と、次々に見ていくと・・・・・・

「アルファロメオじやねえか！・・・しぶいねえ・・・・と近寄つて見てみると、

「オレの女に触るじやねえ！」という声がとんできた。

え？と振り返ると、「そいつは、オレが5年かかつてやつと手なづけたじやじや馬だ。よその男の汚きたなえ手で触られてヘソを曲げられたら困るじやねーか・・・・。なあ、チョビひげ・・・・」「チョ、チョビヒゲ！？」

オレ！？と目をまん丸にしていると、千間探偵が

「あら、久しぶり！あなたも呼ばれてたのね・・・・」と言い、それに対する返事が

「オウ！千間のバアさんか・・・・」だった。

2人は知り合い？というか、誰！？

「でも、大丈夫？先週シカゴでマフィアに撃たれたって新聞に載つてたけど・・・・」

「フン！そんな昔のことは忘れちまつたよ・・・・」

「どう2人の会話を聞いて、ようやく目の前にいる男が茂木遙史といふ、これまた探偵だということを知つた。

中に入りつつ、未だ千間探偵と茂木探偵の会話は続く。

「で？そろそろ所帯を持つ気になつたかい？あなた、あと3日で40でしょ？」

「フン・・・そんな先のことは分からねえな・・・。今オレに必要なのは、さつきから悲鳴をあげてるこの腹を黙らせる御馳走だけだぜ？」と答えた茂木探偵の後ろで

「なに！？ ロックが急病で来れなくなつた！？ 話が違うじゃないか！ ワシは、晚餐を楽しみにわざわざここへ来たんだぞ！？」

と怒鳴つている男の人と、「も、申し訳ありません・・・ 食材は買ってきてあるんですけど・・・」と謝つているメイドさんの姿。

「じゃあ、厨房を貸したまえ！ ワシが作る！… 美食と殺人はワシの脳細胞を高揚させられる唯一の宝なのだからな！！」と大声で怒鳴つて立ち去る彼。

彼なら見たことある。

「ありやー確かに、美食家探偵の大上氏・・・」と呟く。

「どういうつもりだい？こんな山奥に探偵を4人も呼んだりして・・・」と千間探偵が尋ねると、

「あ、いえ。お招きした探偵は全部で6名です・・・」とメイドさんの返事。

そこに蘭さんがトイレから戻ってきた。

「おいおい、あと二人もいるってのか？」と茂木探偵が尋ねると、「はい。女の方と、少年が・・・」と答えたメイドさん。

「少年つてまさか・・・新一！？」と言ひ蘭さんに、「違うよ！ きっと平次兄ちゃんだよ！」と答える探偵くん。

そりや そうだよな・・・。でも結局來てるじゃねえか・・・。

するとメイドさんは、「いえ、ご主人様にいたいたお呼びするリストにそのお一方も入っていたんですが、工藤様は連絡が取れず、服部様は中間テストが近いからと服部様のお母様からお断りの電話を頂きまして・・・。そのお一方がキャンセルになったので、毛利様のご家族を一人お呼びするのにご主人様からOKが出たんです」

と事情を説明。

「ふーん・・・? そんな経緯があつたんだ・・・。
といひで、『服部平次』って? どうかで聞いたことあるよ! うな・・・?
?

「で? その探偵好きないかれた野郎はどこなんだ?」と尋ねた茂木
探偵に、

「さあ・・・私もまだ会つたことがありませんので・・・
と、メイドさんはピックリ発言をきました。

黄昏の館3（後書き）

みなさまー暑くなつてきましたね～。

関西も夏日が続いていますが、みなさまのどいじゅせじゅですか？と天気情報を語つてみたペロコです。

そして、前書きにも書きましたが、10000人突破ありがとうございます

うちの書く快斗が愛されてるのがすゞく嬉しいです（*^ - ^*）

さて、今回は・・・

いつもより長めでお送りしましたバージョン（？）
登場した探偵は、“山姥”こと千間探偵。

ハードボイルド系の茂木探偵。

そして、美食家探偵の大上探偵・・・。
なんと、まだ3人！！スマセン。探さん出せませんでした・・・。
ちなみに、関東ではあまり名が売れていない設定になつている服部
平次くん。快斗は知らないということで（笑）

次回は・・・

ようやく！ようやく、探偵たちが全員揃います
ここまで道のりが長すぎですよね。スマセン。久しぶりに書く
探さん・・・。快斗視点で進みます。そこだけきちんと覚えておいでくださいね

それから、学校の方が本格的に始まつてきたので更新頻度が遅くなると思います。

こんなうちですが、頑張つて書いていくので、コメントや評価など
していただけたら本当に励みになります！
これからもよろしくお願ひしますね。

テストから解放されて、再びここに来て、
「キッドside」の読者数が5桁といつ真実が
本当に嬉しくてたまりません！！
いつも、読んでくださってありがとうございます(*^-^*)
これからも頑張るので、応援してくれる心優しきお方をお待ちして
います！！

では、4話目お楽しみトセー。

「この屋敷の主人に会つた事もないと言つたメイドさん。

「え？でも、リストもらつたんでしょ？」と尋ねると、

メイドさんは戸惑いつつ話し出した。

「はい・・・確かにリストはメイド採用の面接の時に頂いたんですけど・・・奇妙な面接で・・・割のいい仕事だつたので、応募者が殺到したんですが、いざ面接の部屋にはいつたら、パソコンとの晩餐会の説明書と招待客のリストが机の上に置いてあるだけで、誰もいなかつたんです・・・。私の前に並んだ応募者が次々と首をかしげて部屋から出でてくるので、変だなあとは思つていたんですけど・・・」

すると、蘭さんが尋ねる。

「じゃあ、どうして採用されたか分からんですか？」

「ええ・・・パソコンのモニターの指示通りに書類に印を通してたら、突然音がしてモニターに『あなたを採用します』という文字が出て・・・」

オイオイ・・・。

「でも、声ぐらい聞いたんでしょ？主人から〇〇もらつたって言ってたし・・・」と聞くと、

「細かい話は、全て携帯電話のメールでやり取りしてましたから・・・」と答える。

マジかよー？

すると、千間探偵は

「へえ～。面白いじゃないの・・・。わたしや、やつとゾクゾクしてきたよ・・・」

つて言い出すし、茂木探偵は

「フン！俺はその玄関の扉の妙な柄を見た時からしごれてたぜ？」

と言い出した。

その声を聞いて、蘭さんが注意深く見ていると、

「気をつけな、ベイビィ・・・。たぶん、そいつは血の跡だ・・・」

つて言うもんだから

「ええ！？」と扉からのけぞった。

と、そこに新たな声が飛び込んできた。

「扉に対して、ほぼ45度の入射角で付着した飛沫血痕よ・・・。ふき取つたみたいだけど、この館内のいたるところに血が染み込んだ跡が残つてるわよ。どうやら、この血痕の主・・・1人や2人じゃないみたいね・・・」

と言いつつ、液体を階段の手すりに吹きかけている彼女・・・もしかして、槍田探偵？！うわあ～・・・美人

つて考えに浸つていたら、さらに声が飛び込んできた。

「ルミノール・・・血痕に吹きかけると血液中の活性酸素により酸化され、青紫色の螢光が放出される・・・。さすが、元検死官。いい物をお持ちで・・・」

槍田探偵が横を見ると、立派な鷹がいるもんだから、「え！？」と驚いた。

しかし、オレからはその声の主はバツチリ見えているわけで・・・。

「あ、驚かしてすみません。・・・英國でボクと行動と共にいていたせいか、血を好むようになつてしまつたらしくて・・・。でも、イギリス

わざわざ帰国したかいがありましたよ・・・。長年隠蔽され続けたあの惨劇の現場に、40年の時を経て降り立つことが出来たのだから・・・。ボクの知的興奮を呼び覚ますには十分すぎますよ・・・」

出たああああ！！！！

「ひの甘つたるいイヤミな口調はどうとかなんねえのか！？」

「まあ、ボクがここを訪れた理由はもう一つありますか……そりだよな、ワトソン！」

と鷹に呼びかけるロンドン帰りの坊ちゃん探偵……。

白バカ……いや、白馬……。

コイツが現れて、なにやら変な空気になってしまった。

と、メイドさんが思い出したように

「それでは、今来られた方はお部屋に案内しますので、その他の方はリビングでお待ちください……。晩餐の仕度が整いましたら呼びに参ります」

と言つて、オレ達3人と、千間探偵を部屋に案内してくれた。

黄昏の館4（後書き）

みなさま、じんじばは、ペロロです。
お久しぶり・・・ですね、このお話は。テストだらけだったため、
なかなか投稿できていませんでした。スマセン。
無事、今日終了しました、解放感に浸っています

さて、今回は・・・

探偵だよー全員集合 と、題しまして・・・（笑）無事に探さんを
出すことができました。ま、小五郎の顔して「出たあああーーー！」
と思っていたら面白いなと思いまして・・・。
槍田さんが美人なのは、うちの意見です。クールビューティ

さて、次回は・・・

いよいよ、黄昏の館に集いし目的、晩餐会のスタート どこまで書
けるんでしょうかね？謎です。まだ未確定です。計画性無しです。
そんなうちはですが、しばらくはマイペースではあります、このお
話投稿できる状態にありますので、頑張って更新していくたいと思
います！

では、評価や感想や、ご意見などお待ちしています
これからもよろしくお願いしますね。

メイドさんはついて、部屋へと向かう。その途中で千間探偵の部屋で千間探偵と別れ、オレ達はそちらで奥へ。

「毛利様たちは、いらっしゃりでござります」

いつも、とお礼を言つて中に入り、荷物を置いて着替える。あ、ちやんと蘭さんは別の場所でだよ？

で、着替え終わったオレ達はみんながいのリビングへ。そこでは、みんな座つてオレ達を待っていた・・・いや、白バカと茂木探偵はビリヤードをしていた。他にもチエスだの、トランプだの・・・けつこう色んなものがある。暇つぶしには持つてこいつてわけね。

てなわけで、オレは千間探偵とチエスを、蘭さんと探偵くんは槍田探偵とトランプすることにした。

しかし、千間探偵・・・^{強え}・・・。ポーカーフェイスもつぶれて、思わず渋い表情になつちまつよ・・・。

「うーん・・・」と、次どうこうつか悩んでいたら、突然「きやああああーーー」という蘭さんの悲鳴が。

「どーしたんだ、蘭ー?」と思わず立ち上がり振り向くと、血の付いたトランプが・・・。

千間探偵がトランプを手に取り、

「おやおや、ここにも血が飛んでたみたいだねえ・・・」とのん気に言つ。

すると茂木探偵が「そういうえば、メイドが言つてたぜ？」の館の物は、犯行当時のままほとんど動かしてねえってな・・・」とそちらで言つ。

そのせいで「じゃ、じゃあ、」のリビングでも惨劇が……」とますます怯えてしまつた蘭さん。

と、「」でギイツ・・・とにぶい音をたててドアが開いた。
「きやつ！」と黙つて飛びついてきた蘭さん。・・・役得
ドアの外にはメイドさんの姿。

「晚餐の仕度が整いました。『ご主人様が食堂でお待ちです』と云々に来たようだ。

ゾロゾロとメイドさんの後をついて食堂へと向かう。蘭さんはすっかり食欲を失つてしまつたようだ。顔から血の気が引いている。マジで大丈夫なのか？

で、食堂に到着。長いテーブルの向こうには、いかにも怪しげですと言いたげな“ご主人様”の姿が。そして、言葉を発した。

「崇高なる六人の探偵諸君！我が黄畠の館へよくぞ参られた。さあ、座りたまえ。自らの席へ・・・」

なうんて言つ。テーブルの上には並べられた食器と名札。

ということで、それに従いみんな着席。

と、その直後、“ご主人様”は再び話しあした。

「君達を招いたのは、私がこの館のある場所に眠らせた財宝を捜し当ててほしいからだ。・・・私が長年かけて手に入れた巨万の富を・・・命をかけてね・・・」

え？

「い、命だと…？」と言い返した瞬間、ドオオ・・・ン…と外で爆発音が！

大上探偵が「な、何だね、今の音は…？」と叫ぶと
「案ずることはない。君たちの足を断つたまでのこと…・・・
・・・それってつまり…・・・

「まさか、車を！？」

「私はいつも警察や君たち探偵に追われる立場・・・たまには追い
つめる側に立ちたいと思いましてな・・・。もつとも、ここに来る
途中にあつた橋も同時に落としましたから、車があつたとしても逃
げるのは不可能。もちろんここには電話はなく、携帯電話も圏外・
・。そう。つまりこれは、その財宝を捜し当てた方だけに財宝の半
分を与え、ここからの脱出方法をお教えるというゲームですよ・
・。気に入つてもらえたかな？」

大変遅くなりました……（――）
みなさま、こんにちは、ペロ口です。大変お久しぶりで、ざわこまます。
なかなか更新できず、申し訳ありませんです。

前回、ようやくテストが終わつたと言つてゐたのですが、何なつと
やる」とは多數存在していまして・・・。今更の更新になつていま
す。

さて、今回のお話は・・・

ようやく、“ご主人様”的影が出せました
もちろん顔には出していませんよ？（笑）

本当に、どうでもいいらしいのか謎なお話です。

さて、次回は・・・

うちのお気に入りシーンが登場します
探偵一人ひとりに対する快

シの気持ちを楽しんでもらえたかななど思います
問題は、いつ更新できるか分からぬといつことだけですね・頑張
ります。

やべ、これでみなさんに質問ですー。

原作・アニメで「」覽になつた方はよく分かると思いますが、あと2話ぐらいあとから、快斗も含めた探偵たちの騙し作戦が決行されます。はい、ここで質問です。どう進めたらいいと思いますか？原作に忠実に、最後までタネ明かしは置いておくのか、それとも、騙している心境を書きつつ進めていくのか・・・。

多くのみなさまの意見を聞きたいと思っておりますので、それも含めたご意見・ご感想などお待ちしています。

叱咤激励など大歓迎です！

では、次のお話でお会いしましょうね
これからもよろしくお願ひします。

わおーーー！話題ですって（他人事）

いつも読んだくさつてありがとひびきやります（*^-^-*）
読んでくださっている皆様がこじてこの小説だと思っています。

これからもよろしくお願ひしますね。

では、記念すべき50話題に来た、「黄昏の館6」をお楽しみ下さい。

うちのお友に入りが来て、なんかちょっと嬉しいです

どうやら、“ご主人様”はオレ達を脱出不可能にしたうえで、財宝を探し出させ、見つけた人にはその半分と脱出の仕方を教えるという『ゲーム』がしたいらしい。

すると、“ご主人様”に向かつて左側に座っていた茂木探偵が立ち上がり

「フン・・・虫が好かねんだよ、てめえみてえな面を隠して逃げ隠れする野郎は！！」

と叫びながら、“ご主人様”の頭にかかつっていた布を取り外した。が・・・・

「さあ！！腹が減つては戦は出来ぬ！存分に賞味してくれたまえ。
最後の晚餐を・・・」

「マネキンの首にスピーカー！？クソッ！？」

そう、“ご主人様”の姿はマネキンとスピーカー。つまり、本人はこの場にいなかつたということだ。

「だ、誰が・・・一体誰がこんなことを！？」
と毛利探偵らしく咳く。すると、

「あら、毛利さんともあろうお方が知らずに来たんですの？？？
ちゃんと招待状に書いてあつたじゃない・・・『神が見捨てし仔の
幻影』って・・・」

「幻影つてーのは、ファントム……神出鬼没で実態がねえ幻つて
こつた……」

「にんべんを添える『仔』といふ字は獸の子供……ホラ、『仔犬』
とか『仔馬』とかに使うでしょ？」

「『神が見捨てし仔』といふのは、新約聖書の中で神の祝福を受け
られなかつた『山羊』のこと……つまりこれは『子山羊』を示
す文章……。英語で山羊はGoatだが、子山羊のことにはいづ呼び
ぶのだよ……」

「Kid……」

「な、なに!？」

「いひいえば、もひとつ分かりやすいでしょうか……? Kid t
he Phantom thief……」

「お、おい、まさか……」

「まさかそれって……」

「そう……狙つた獲物は逃さない、その華麗な手口はまるでマジ
ック……」
あ、ビーも↙千間探偵↙

「星の数程の顔と声で警察を翻弄する天才的犯罪者……」
いやあ……天才だなんて!褒められて喜ぶところなのか分かりま
せんが、一応、褒め言葉として取らせていただきますよ、槍田探偵?

「我々探偵が生睡を飲んで待ち焦がれるメインディッシュ・・・あ、オレ、メイン？やりい サンキュー、大上探偵

「監獄にぶち込みてえ気障な悪党だ・・・」

わお！過激だね、茂木探偵。

「そして、僕の思考を狂わせた唯一の存在・・・。闇夜に翻るその白き衣を目にした人々はこう叫ぶ・・・怪盗キッド！――！」

あらり。オレ、白バカの思考までくるわせてたの？

しつかしまあ・・・」ここまで褒められると嬉しそうで、「キッド」の名前が出た時、ビミョーに気配出したぜ、オレ。

さあ・・・気づいたのは6人の探偵のうち誰？

もちろん、これはオレからの挑戦状。気配に敏感な探偵くんは気づいたかもね。

漆黒の星のときもエッグの時も気づいてたし。

あとの5人は・・・どうだろ？みんなポーカーフェイスだし・・・

黄昏の館6（後書き）

みなさま、こんばんちは。今回も読んでいただきありがとうございました。ペロ口です。

最近、どんどん暑くなってきて、夏バテ気味です；

さて、今回は・・・

キタ━━━(^ ^)━「黄昏の館」の中でのお気に入りシーン一応、誰が言つてるのか分からぬ方のために、「誰が言つたか」を快斗が言つてない部分を順番に名前を挙げておきますね。

槍田探偵 茂木探偵 千間探偵 大上探偵 探さん 毛利探偵（快斗） 探さん 毛利探偵（快斗） 蘭ちゃん。です。どうも、白馬探偵とは言えない・・・（笑）

一人ひとりに対する快斗の心情を書きたくて、黄昏の館を書き始めたときから、ここを楽しみにしていたんですね（*^-^*）書けてスッキリ。

さて、次回は・・・

そうですね～。ここまで続けるでしょうか？（え）自分でも分かっていないので、ここでは「不明」ということで、結論付けていいですかね？ いけるところまで・・・です！！

いつも、読んでくださつてありがとうございます。これからも、評価や感想、それにご意見などを待ちしていますので、気軽にコメントしてください。

夏休みの間に「黄昏の館」を仕上げきつてしまつつもりです。今とのこと。どうなるか分かりませんけどね？

それでは、いかにもおじいちゃんの願いをめざして（――）

黄昏の館7（前書き）

執筆遅れ氣味で申し訳ありません。

51話目。かなり長くなっていることに
ふと気づくんですが、大丈夫でしょうか?
なんか、長編になつてきました。（いつの間にか）
どうかで2つに分けるべき？

とりあえず、黄昏の館を頑張ります！
では、7話目どうぞ

「そ、それじゃあ、怪盗キッドが我々をこの晩餐会に招いたって言うんスか？」

と、口火を切る。

「ああ・・・どうやら世間に名の通つた我々六人の探偵を集めて、知恵比べをやるっていう趣向らしい・・・自分が今までに盗んだ財宝と我々の命を懸けてね・・・」

とは大上探偵。ま、オレはんなことしねーし、しかも“盗んだ財宝

”つて・・・。オレは返してるつづーの!!

「多分、今もどこかで私たちの様子を見てるでしょう。この館の至るところに隠しカメラが設置されてたから」と槍田探偵。

「ええ!?」とわざとらしく辺りを見回すが、もちろんその存在は把握済み。ま、様子を見るつてのは当たつてるけどね?肉眼を通してだけど。しかも、今日の前にいるよ〜んなんて、内心でふざけていたら、ドアが開きメイドさんが登場。

「やつと来たわね、彼が言う最後の晩餐が・・・」と槍田探偵。メイドさんが“最後の晩餐”をテーブルの上に置きながら言う。「オードブルのフォアグラのマーブル仕立て、トリュフ入りジユレで!”わいします。どうぞお召し上がり下さい」

うひょー うまそーーー!と感動し、興奮していたら千間探偵が一言。

「ねえ、メイドさん?もしかして料理をテーブルに置く順番も『主 人様から言いつけられていやしなかつたかい?』

「あ、はい・・・。白馬さまから時計回りにと・・・

え?白馬?何で?と疑問を口に出す間もなく、

「いやね・・・ゲームは始まつたばかりだといつのこ、最後の晩餐

「こうのが私にはちょっと腑に落ちなくてねえ……」と千間探偵が呟く。

すると、

「ハハハ……毒なんか入っちゃおらんよ！料理はワシが作ったのだから！」と

大上探偵が弁明。そしたら白馬が

「でも、それを口に運ぶフォークやナイフやスプーン……そして、ワイングラスやティーカップもあらかじめ食卓に置かれていますし……。僕たちはこの札に従つて席に着きました。まあ、彼が犯罪を犯すとは思えませんが、僕たちの力量を試す笑えないジョークを仕掛けている可能性はあります。自分のハンカチでグラスやフォークなどを拭いてから食べた方が賢明でしょう……」

・・・・・おい。オレは喜ぶべきなのか？いやいや、そんなことはねぇ！それにしても『笑えないジョーク』って……と半目になりかけた時、横に座っていた茂木探偵が

「違えねーな……奴のペースで事が進むのも気にくわねーし、なんならジャンケンでもして席替えするか？」

なんて言うから、焦つて

「し、しかしそれで運悪く毒に当たつたら……」といふと、「フン！ そんときや、それだけの人生だつたと棺桶のなかで泣くんだな……」

と言い捨てられた。そんな無茶な……。

オレ、興味本位でこんなトコ来るんじゃなかつた……。

で、みんなでジャンケン。勝つた人から好きなところに座ることに。“ご主人様”に向かつて左回りに、大上探偵、オレ、千間探偵、白馬、茂木探偵、槍田探偵、探偵くん、蘭さんの順番に。気を取り直し、食事スタート！！

「「」りゅーうまいーー！」 つん、来てよかつた！

「どうやら思い過ごしだったようだねえ・・・」

「いや、まだ分かりませんよ・・・」 と言ひ合ひていると、

「どうかね、諸君。私が用意した最後の晩餐の味は・・・？」 と

“ご主人様”が話に参加。

「フン・・・おいでなすつたな・・・」 と茂木探偵。

「では、そろそろお話しよう・・・。私がなぜ大枚をはたいて手に入れたこの館をゲームの舞台にしたのかを・・・」

え・・・。まだ食つていたかつたのに・・・。

「まずは見てくれたまえ！今、諸君の手元にあるフォーク、ナイフ、スプーン・・・そして食器類の数々を・・・」

そして、みんなそれぞれが見て、

「鳥？クチバシが大きくて、不気味な鳥のマークが付いてる・・・。
と蘭さん。
ん？」

「これ・・・鳥じゃねーか？」

「だとしたら、これはもしや・・・」

「もう、お分かりかな？それは半世紀前に謎の死を遂げた大富豪、
鳥丸蓮耶の紋章だよ・・・」

「か、鳥丸蓮耶！？」

つてあの・・・かなり長生きした大富豪だよな？！

「食器だけではない・・・この館の扉、床、手すり、リビングのチ
エスの駒からトランプにいたるまで全て彼が特注した代物。つまり
この館は鳥丸が建てた別荘・・・いや、別荘だつた。4年前、この
館で血も凍るような惨劇が起こつたあの嵐の夜まではね・・・」
と、“ご主人様”は語りだした。

黄昏の館 7（後書き）

毎度毎度、待たせてスイマセン。ペロコです。
夏休みに突入し、決意を新たに「執筆を頑張ろう！」と思つていま
す。（普通は「勉強頑張ろう！」のはずなんですか？）

さて、黄昏の館も7話目。楽しんでいただけましたでしょうか？
よつやく、“ご主人様”が語り出す場面まで到達。・・・かかりす
ぎですね。もう少しペース上げたほうがいいのかな？全部で何話に
なるんでしょう。

探さんに対する快斗の反応だけはどうも、普通の高校生として。で、
他の探偵たちにはキッドとして接してるように気がしますね。書い
てて。

さて、次回。“ご主人様”的語りから・・・どこまででしょうか？
できるだけ進めたいと思いますね。うん。頑張ります！！

いつも、コメントありがとうございます！勉強頑張れ！などのメ
ッセージもいただけで大変感動しておりますー！それに、辛口コメ
ントも・・・もう、じょんじょん書いてくださいーしつかりと頑
張りますのでー！

それでは、これからもよろしくお願ひしますね。

「分けた方がいいのでは？」という意見をいただきました！－！他の皆様は、どう思っていますか？ぜひ参考にしたいので、これからも「メントお待ちしています！」

では、第8話で

語りだす“ご主人様”。

「有能なる名探偵諸君なら、この館に足を踏み入れた時にすでにお気づきでしょう。飛び散ったおびただしい血の跡に・・・。そう、それは、この館がまだ美しさを保つていた40年前のある晩・・・。この館に財界の著名人を招いてある集会が開かれたのだよ。9歳で他界した“鳥丸蓮耶を偲ぶ会”と銘打つてな・・・。だが、その実態は鳥丸が生前コレクションしていた高価な美術品を競売するためのオークション。その品数は300点を越え、オークションは3日間行われる予定だった・・・。そしてその2日目の夜。オークションがたけなわ（＝1番の盛り上がり）だつたこの館に、ズぶぬれの2人の男が訪ねてきたのだ。その2人の男は、寒さに震える唇でこう言った・・・。“この嵐で道に迷い、途方に暮れていたところでここにいさせてくれ”と。オークションの主催者は、最初彼らを入れるのを渋つていたが、彼らからお金の代わりにと一枚の葉を渡され、態度が豹変した。主催者は彼らに言われるままにその葉を紙に巻いてタバコのように吸い、みるみるうちに陽気になり、彼らを館内に受け入れたのだ・・・。その様子を見た他の客たちも彼らに葉を勧められ、館内にその葉の煙が充満した・・・

・・・え？

「ま、まさか・・・まさか、その葉っぱって・・・
ま、マリファナ・・・・・・。

おいおい、何かドンドンやばい流れになつてきたじゃねえか・・・。
それにもしても、“ご主人様”はよくしゃべるなあ・・・。だが、ま

だまだ止まらない。

「しばらくすると、客だったある男が悪魔を見たような悲鳴を上げ、自分が競り落とした美術品を抱えて走り出し、ある女は涙が涸れるまで泣き続け、またある男は嬉しそうに自らの腕を手にしていたペンで刺した・・・。やがて客同士で美術品を奪い合うようになり、オークションの品だった名刀や宝剣で殺し合いが始まり、オークション会場は地獄絵図と化した・・・。そして、悪夢のような一夜が開け、八名の死者と十数名の昏睡状態の客達を残して、その2人の男は美術品と共に消えていた、というわけだよ・・・」

あ、終わった。

「し、しかし、なんでそんな大きな事件が世間に知られていないんだ？」と口に出せば

「おそらくその客の中にいたのだよ・・・。政界に顔の利く名士かもしくはその一族がな・・・」

「なるほどねえ・・・。誰が誰を殺したかわからないその状況にそんな人がいたのなら・・・」

「ヘタに解明される前に事件をまる」と握りつぶした方が得策と判断したんでしょう・・・

「フン・・・それもその2人の男の計算のうちだつたんだろーがよ・・・」

「まったく・・・食欲をそそるステキな昔話だわね・・・」

と、集まつた探偵たちが次々と言葉をつなげていく。これだから探偵つてのはヤなんだ・・・と思つていたら、メイドさん再登場。お、食後の紅茶だね よかつた。水だけかと思つてた・・・。すると再び“ご主人様”は言葉を発する。

「さて、もうお分かりかな?私がなぜこの館を選んだのかが・・・。それは、君達探偵諸君に再びあの惨劇を演じてほしいからだ・・・。

この館の財宝を巡つて奪い合い、殺しあうあの醜態を・・・

「フン・・・ぐだらんな・・・」と大上探偵が一蹴。

「まあ、闇雲に搜せるのは酷だから、ijiで一つヒントを『えよう・・・』

「ヒ、ヒント！？」

「『』一人の旅人が天を仰いだ夜、悪魔が城に降臨し、王は宝を抱えて逃げ惑い、王妃は聖杯に涙を溜めて許しを乞い、兵士は剣を自らの血で染めて果てた』・・・」

「それってさつきの・・・」

「苦労しましたよ、この館に残る惨劇になぞらえて暗号を作るのは・・・まさに、これからこの館で始まる命がけの知恵比べに相応しい名文句だと思わないかね？」

・・・・・名文句・・・・・。

「バカね・・・」と槍田探偵。

「殺し合いつていうのは、相手もそうだけど、こっちもその気にならなきや・・・」

と、ここで“ご主人様”が割つてはいる。

「無論、このゲームから降りることは不可能だ・・・。なぜなら君達は・・・私が唱えた魔術にもうすでにかかりてしまつてしているのだから・・・。さあ、40年前の惨劇と同じように、君達の中の誰かが悲鳴を上げたら知恵比べの始まりだ・・・。いいかね？財宝を見つけた方は、中央の塔の四階の部屋のパソコンに財宝の在処を入力するのだ・・・。約束どおり、財宝の半分と脱出方法をお教えしよづ・・・」

パソコンに答えを入力・・・。

ג' עיון

?

「べつに おもてなしは ない。」

おしゃれ！

一
な
ん
て
な
・
・
・
「

・・・・・・・おいおい

悪いが、俺は降りるぜ。宝探しには興味がないんでね……」

「おお、どうも、おめでとうござる」と喜んで立たせる

「ハシニミナ海の島と伊豆の離て云々」も同様である。三河を近

けずり回りや、運がよ

「諸君！」といつて残し、

が

とオレの左側で大上探偵が『悲鳴』を上げて倒れてしまつた！！

みなさま、じんじは、ペロロです。

いよいよ、第8話。そして、少々長めに挑戦。

つてことで、今回は・・・。

さつきもこつたように、長めです。とはいっても、少しだけなんですが・・・。これ以上は、無理です！（笑）いよいよ、40年前の惨劇の内容も語られ、そして、ついに事件が・・・！大上探偵、ぶつ倒れました。悲鳴がかけない・・・。うまく伝わってたらしいですね。実際、どんな風に苦しむのかって分からぬで、こんな感じで。

さて、次回は・・・。

次回も、ちょっとだけ長めに挑戦するつもりです！ので、やつぱりどこまでいけるか分かりません。でもまあ、そろそろ、騙し深入・・・かな？・・・やつぱり未定です。

夏休みに入っているので、少しでも早く更新できるように、頑張りますね！！

いつも、「コメントありがとつづけてます！」前書きにも書きましたが、分けるか分けないかの意見は随時募集中です。みなさまの意見を聞かせてください！

それに、評価や感想、ご意見などもお待ちしています！

これからもよろしくお願ひしますね。

黄昏の館⑨（前書き）

まだまだ分けるかどうかの、「意見
お待ちしております！

では、今回もちょっと長めに挑戦しました。
楽しんでいただけたら嬉しいです

『悲鳴』を上げて倒れてしまつた大上探偵。

ま、マジで！？さすがの茂木探偵も戻つて来て、声をかける。

「おい、オッサン！一度目はもうウケねーぜ？」

いや、ウケる、ウケないの問題ではないだろう・・・。といつか、ウケを狙つていたのか、茂木探偵は！？その横で、白馬が決定的と言・・・。

「22時34分51秒、心配停止確認。この状況下では蘇生は不可能でしょう・・・」

「何だと！？」

「そ、そんな・・・」

オレはいくら毛利探偵の格好をしているとはい、殺人とは縁がない人間。

どうしても近寄れず、遠くから眺める。

槍田探偵が、元検死官らしく、的確に検死していく。

「唇の色調が紫色に変化するチアノーゼが見られないわ・・・。それに、この青酸ガス特有のアーモンド臭・・・」

「じゃあ、さつきオッサンが飲んでた紅茶に青酸カリが！？」と

茂木探偵が言えれば、その横では千間探偵が10円玉で調べ中。が、

「うんにゃ・・・酸化還元反応はないよ・・・。どうやら、原因はこの紅茶じゃないみたいだねえ・・・」

「だつたらいつたいどーやつて！？」

と、オレはそのまま疑問を口にする。というか、さすが探偵たち・

・。別に何か大きな一つのこととして捉えるんじゃなくサラッと進めていっちゃうんだ・・・。

「さあ、賽^{さい}は投げられました……自らの死をもつてこの命がけの知恵比べを華々しくスタートさせてくれた大上探偵のためにも、財宝探しに精を出してくれたまえ……」

と、冷たい声で言う。“ご主人様”。

「コイツ……マジで何考えてんだよ！人の命を何だと思って……とつかみかかるとしたが、茂木探偵の方が動きが早かった。すぐさまかけよって、

「てめえ……ふざけるな！！」と首元をつかむと、マネキンの首がカソン！と音を立てて床に落ちた。そこにあるのは、カセットテープ……。

カセットテープ……？

「タイマーにも繋がっているみたいだねえ……」

「食事をここに運ぶ時間も決められていたんですか？」と白馬がメイドさんに尋ねると、

「はい・・・オードブルからメイン、紅茶の時間まで細かく……と、肯定の返事。

「じゃあ、犯人は私たちの様子を見ながらしゃべっていたんじゃなく……」

「テープの声を流してただけってわけね……」

と、ここまで来ていつになく静かだった、といつても、他の人が次々に言うから口をはさなかつただけかもしけないけど、探偵くんが口を開いた。

「これで2つ分かったね。犯人は最初から大上さんを狙つてたってことと……もしかしたら犯人は、ボク達の中にいるかもしないってことが……」

なつ！――

「！」この中に犯人がいるだとお！？」

もう容疑者の中に入るのはやなんだけど……。あのオフ会で懲り

たんだけど……。

それに今この場は探偵だらけ。オレ……マジでここまでくるんじやなかつた……。何で白馬のあんな誘いに乗つちまつたんだ?つて、今更だけどさ。

と、探偵くんがオレの疑問に答えてくれていた。自分の思考で少々混乱していたが……。

「だつて、そのテープの声もこの中の誰かが前もつて仕掛けておいて、『ご飯食べながらみんなと一緒に聞いてるふりしてたかもしけないでしょ?』

「た、確かにそうだが……」

オレは違つ!-!断じて違つ!-!すると、白馬は探偵くんのあとを継いだ。

「そして、この大上さんと同じ食卓についていた僕たちに気づかれず、犯人は彼に青酸カリを飲ませて毒殺したんです……」

「ああ……俺たち五人の探偵の目の前でな……」

え?あ、そうか。探偵くんは勘定に入つてないんだ……。そりや、子供だもんな。見た目は。

「しかも、そのテープの声の内容からすると、この人が死ぬ時間も犯人には分かつていたようだねえ……」

「問題は、彼が倒れる直前まで口にしていたこの紅茶から、青酸化合物の反応が無かつたこと……」

そうだよな~……。

「じゃあ、まさか毒は紅茶の中じゃなくてティーカップの飲み口のところに……」

と、オしなりの推理を語つのですが、槍田探偵に一瞬で否定された……。

「彼、2、3度この紅茶を口に運んでたから……」

・・・・あ、そう。なんだかな～・・・と落ち込んでいたら、蘭さんが久しぶりに口を開いて、オレの機嫌は浮上した。なんつてつたつて・・・

「で、でも、皆さんが言つてる犯人つて、怪盗キッドのことなんでしょ？彼つて人殺しなんかしないって聞きましたけど・・・」

つて言ってくれたんだから おお～～！もちろん、そうですよ、お嬢さん♪

少なくとも、私が人を殺めるだなんて・・・。

つて、そうか・・・。自分がここにいるからオレは分かつてるけど、みんな“ご主人様”＝キッドって思つてんだ・・・。すっかり忘れてた。アハハ。

「ええ・・・僕が知る限りでは初めてのケースです・・・」

と、白馬らしい意見の言い方。まるでオレのことは何でも知つてます、みたいな？

んなこと主張しても別に何の得にもなんねーだろ・・・。

「まあ、だべつても埒らちが明かねえ・・・。とりあえず、見に行つてみねーか？オレ達の車が本当に吹つ飛ばされたかどうかをよ！」と、茂木探偵が提案するので、それに乗る形でみんなで外に車を見に行くことになった。

出て行く直前、探偵くんが大上探偵の爪を見ていたのを横目で見ながら・・・。

みなさま、こんばんは、ペロロです。

8月ですね。毎日暑い日が続いていますが、体調の方はみなさん大丈夫ですか？

今回は・・・。

探偵たちの考察、ですね。あと、快斗の激しい後悔。（笑）まあ、あんな簡単な誘いに乗っちゃうんですからね。自業自得です。（冷たいかな・・・？）

次回は・・・。

車を見に行く」とになった探偵たちと、その他。そして・・・。
ぐらいですね。（バツサリ）

少しでも早く更新できるように頑張ります。

「」意見として、「心理描写が少ない」というのをいただきました。今回は、前回の話よりも快斗の心情を書いてみたのですが、これでもやつぱり少ないでしょうか。探偵たちの考察に、納得したり反発したり・・・。つていうぐらいしか書けてないんですけど。もし、何かまだありましたら、遠慮なく言つてほしいです。

評価や感想、そして、上に述べたような「」意見なんかをお待ちしています。

まだまだ未熟ですが、これからもよろしくお願いしますね。

黄昏の館ー〇（前書き）

まだまだ分けるかどうかの、意見
お待ちしております！

では、今回もちょっと長めに挑戦しました。
楽しんでいただけたら嬉しいです

外へ出たオレ達は、ボー然と突っ立っていた。
現場は、火事と言つていいほど明るい。車はもううん火だるま・
・。

「オ、オレのレンタカー、丸こげ……」

「私のフュラーリもミディアムね……」と横で言つ槍田探偵。
あ、槍田探偵のだつたんだ~と思つていたら、やらないその横で
「オレのアルファも、大上のオッサンのポルシェもパアだ!」
と茂木探偵。あ~あ。せつかく手に入れたつて自慢してたのにねえ。

「じゃあ、あのベンツ、君の?」

と、槍田探偵が白馬に尋ねると、返つてきたのは否定の言葉。
「僕はバアヤに車でここまで送つてもらいましたので……」

はつ! バアヤも大変だ。・・・ん? 待てよ? つてことは……
「変だねえ・・・私は毛利さんの車に乗せてもらつて来たし・・・
誰だい?あのベンツ・・・」

と、オレが初対面で“山姥”呼ばわりした、千間探偵が疑問を口に
すると、メイドさんが返事をくれた。

「じ主様の車だと思います・・・私が朝早くこの館に来た時には、
もう停まつていましたから・・・」と俯きつつ。

それに素早く反応したのは蘭さんだった。

「だ、だつたらやつぱり、この館には私たちの他に誰かいるんじや・

・・
と、不安そうに言つ。すると、メイドさんが爪を噛みつつ、
「この分じゃ、私の車も向こうで燃えちゃつてるかな・・・」と言
つた。
え?

「向こうつて……メイドさんの車、ここに停めてないの?」と探偵くんが尋ねれば、

「ええ……裏門に停めるよ! じ主様に言われてたから……とメイドさん。

「裏門の場所は!?」と尋ねつつ、走り出す。

「中庭を通り抜けて……」と説明をしだしたメイドさんの声を聞きながら、裏門へとみんなで走る。そして、ドアを開けると、そこにはあつたのは……

「おー! 無事じゃねえか!」

メイドさんの車がそのままの状態でポツンと停まっていた。槍田探偵が

「何か怪しくない?」この車……と疑うのも分かるが、

「どーせ、奴が爆弾を仕掛け忘れたんっスよ!」

と、オレはきわめてプラス思考で考える事にした。だって、いつまでも落胆なんにしてらんねえしな。すると、千間探偵がメイドさんから鍵を借り、ドアを開けつつ、

「じゃあ、本当に橋が落とされているか見てこようかねえ……」

なんて言つから、オレを含めて茂木探偵と白馬も

「オレも……」といいつつ車のドアを開けて、乗ろうとした。

・・・・・ のだが、

「これこれ、船頭が多いと、船が沈むよ……」と千間探偵に止められてしまった。

と、ここで白馬が一言。

「確かに……怪盗ならぬ、幽霊船になりかねませんね……」ファンタムシーフ

真顔で言つてくれやがった。

・・・・・ 白馬・・・ オ、オメエはやっぱりいつもこいつなのか……?

が、集まりし探偵たちはそれを見事にスルー。ケケツ。報われねえ

やつだな、オマエって。

すると、「探偵くんが

「じゃあ、どの探偵さんが行くか、コインで決めれば?ボク、ちょうど小銭5枚持ってるし……」と言つて、5枚の硬貨をボンネットの上に出した。

すると、それを見ていた千間探偵。

「あら、おチビちゃん。気が利くじゃないのー」と手を伸ばしてコインを取つた。

・・・あれ?何でわざわざ?

「原始的な方法ではありますガ・・・」

「まあ、しゃーねえか

「じゃあ、コインの表の出た奴が・・・」

「車で橋を見てくるつて事で・・・」

と、白馬・オレ・茂木探偵・槍田探偵の順にコインを手に取り、いざー

ピーン!といい音がして、左手の甲の上にパシッ!とキヤッチ!!

で、結果は・・?

「行くのは、私と毛利さんと茂木ちゃんだね?」といふことで、オレは行く方に決定!

つてことで、運転席には千間探偵、助手席にはオレ、後ろに茂木探偵が乗り、橋の元へと出発。

・・・したわけだが・・・

いや~な沈黙が車内に漂つっていた。

誰もしゃべらず、ただ車が進むだけ。

そんなに遠いわけではないので、5分ほどで着いたのが救いだった。到着後、オレと茂木探偵は車を降り、橋の方へ歩いたわけだが・・・

。「うひやー・・・ひでえな、こりや・・・」

「橋が完全に落とされちまつてゐる……」

“ご主人様”的言つたことは本当だつたつてわけか……。

「オーケー！千間のバアさん！ヘッドライトを近めにしてくれ！足元が見てーんだ！」

という茂木探偵の申し出に「アイゴー」と氣のいい返事が返つてきた。

「犯人……動くかねえ……」

と尋ねると、

「ああ……これで終わるようなタマジやねえよ……」と茂木探

偵。

そんな会話をしていた次の瞬間。

背後でドーン！と車が爆発し、オレ達のほうへと走ってきた！何とか両端に避けてオレ達は無事だった。車はそのまま下へと落ちてしまつたが……。

「せ、千間をーん！！

と、オレは下へと叫んだ。背後で茂木探偵が笑つているのを感じながら・・・。

黄昏の館1-0（後書き）

みなさま、毎日暑いですね～。ペロロです。
とうとう「黄昏の館」も1-0話田てー時にとかかってスイマセン。

さて、記念すべき1-0話田は・・・

メイドさんの車に乗つて、茂木探偵＆千間探偵と橋を見に行つた快斗扮する毛利探偵。そして、ここでまたも災難が！！千間探偵の乗つた車が橋の下に落ちてしまつたのです！！

・・・とことくなっています（爆）

そんな危ない状況の次回は・・・

いよいよ！（本当にいよいよですね：）

この話のメインといつても過言ではないでしょう！探偵たちの騙し作戦が決行されますー！これからは、完全にオリジナルが入つてきますので、「注意を

まだ、しっかりと辻褄を合わせたいので考へ中です。ので、更新はまだ先になつてしまふかもしれません。出来るだけ早く更新できるよつに頑張りますね！

いつも、感想やご意見ありがとうございます。

まだお待ちしておつますので、これからも読んでくれたら本当に嬉しいです！！

いつものことですが、異常に後書きが長くなつてスマセン。

車が落ちていったあとをしばらく眺めていたと、背後で「さて……」と茂木探偵が話しかけた。

「帰るか、チョビヒゲ……」

相変わらずオレのことは「チョビヒゲ」って呼ぶんだもんな。

だが、「ああ」とだけ答えておく。

彼女は、おそらくもう……。

「チョビヒゲ……分かつてんだろう？ 千間のバアさんがオレらを呼び出したつてことだが」

「ああ……あのコインを選んだ時にな」

「へえ～？ 眠つてなくとも多少は出来るんだな、え？ 眠りの小五郎さんよお？」

ハハハ。確かに、本来のあの人だったら、こんな答えは出でこないだろうな。

「オレだって探偵なんだから！」

と、怒ったフリをして言い返しておくことにどめた。

現在夜9時。雨上がりということもあり、少々冷えている。オレと茂木探偵は、来た道を歩きながら戻っているのだが。問題は

……。
「千間さんをどうやって問い合わせるか、だなあ」

と、ふと口に出す。

独り言のつもりが、静かな夜にオレの声はよく響き、もちろんオレの横を歩いている茂木探偵にも聞こえたわけで……。

「そうだなあ……」と返事がかえってきた。

とりあえず……！

「とりあえず、槍田さんたちに『死んだ』って教えねえとな…」

「ま、それから考えるか。あのメイドさんと、お嬢さんと、あのボウズにはどうかに行つてもうりつとして」

あ…

「たぶんコナンなら参加すると思つぞ。どれだけダメだつて言つても…」

ま、探偵くんだからねえ。ダメつて言つても盗聴とかはするだらうな。

「そんじやあ、いいんじやね？」

「え。いいのか？」

と言つていると、田の前に館が見えてきた。

「いいも何も、あのボウズがコインを選ばせたんだし、それなりに教え込んでんだろ？ 眠りの小五郎さん？」

あれは、素だけどね；

「あ、ああ」

「そんじや、ま。『探偵会議』とこきますか！」

といつ茂木探偵が言つて、館のドアを開けた。すると、そこにはオレらの帰りを待つていた槍田探偵と白馬、それに探偵くんが立っていた。

槍田探偵がまず口を開いた。

「おかえり。…それで？」

それに茂木探偵が答える。

「ああ…『j覧の通りだ』」

といつか、もうみんな千間探偵だつて分かつてゐるんだね。まあ、オレにも分かるぐらいだから、当たり前なのかもしれないけど。さすがといつか、何といつか…。

と、ここで探偵くんが口をはさんだ。

「蘭ねーちゃんとメイドさんは、食堂で待つてもうりつてるよ！ ボ

クたちはおじさんたちが帰つてくるのを待つてたんだ！」

「ちなみに、ここはカメラの死角ですから、もし音声が聞こえたとしても、小声ならばある程度は大丈夫でしょうし、『安心を』と白馬があとをついた。

「それで、どうするつもりなの？」

「ああ……それを相談しようと思つてな」と、オレが槍田探偵に言つ。

「そつちは何か考えあるか？」

と、茂木探偵が言つと

「ええ。このボウヤがね……死んだフリをするのはどうか、つて……」

「は？ 死んだフリ！？」

「うん！ あの人筋書き通りに探偵さんたちがお互ひを殺しあつていくんだ！ そのあと、ボクが千間さんに推理を話して、脱出方法を聞くよ！ 子供相手だつたらきっと教えてくれるでしょ？」

「だが……」

探偵くん……頭の働きがすでに小学生じゃ誤魔化しきれないぐらいになつてるけど、大丈夫なの！？

「僕は反対ですよ！ そんな子供だまし……」

と、白馬は反対の様子。すると、オレの横で黙つて話を聞いていた茂木探偵が

「よしつ！ その作戦でいこう！ どっちにしろ、オレらが生きてる間は問い合わせても吐かねーだろー！」

と探偵くんの案に賛成。

まあ、確かになあ……。それもそうな気がする。

「よし、分かつた！ 僕も乗つた！……だが、ビーやつて『死ぬ』んだ？」

「それなら、部屋に拳銃があつたから、あれを利用したらいんじやないかしら？」

と槍田探偵もヤル気。

「しょうがないですね。それならキッチンからケチャップを押借りましよう。モニターで見ているとすると、ケチャップも血に見えるでしょうし……」

と、白馬もしげしげながら合意。

「蘭ねーちゃんとメイドさんには眠つてもらおうつー。」

と、探偵くんがいい、みんなそれにほすんなり合意。

「それじゃ、コナンー！おめえにかかるんだから、しつかりやつてくれよー！？」

といいながら、背中をたたく時に盗聴器を仕掛け、準備OK！

「分かつてるよ……」

と苦笑した探偵くんを見て、茂木探偵が一言。

「そんじゃ、いきますか！」

その声が合図となり、オレらは、作戦をスタートさせた。

黄昏の館1-1（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。

まだ先になるかもしないと書いていましたが、

とりあえずここまで完成したので投稿させていただきました。

ということ、今回は…

完全にオリジナル！『探偵会議』です。会話をしている場所は、玄関を入つてすぐのところ。というイメージで読んでください。

次回は…

探偵たちの騙し作戦決行です！原作どおりに進めるつもりですが、快斗の心情が入ってくる…つまり、作戦を実行してるとこひとつを理解したうえでお進みくださいね。

いつも、感想ありがとうございます。

ご指摘いただいた三点リーダについてですが、完全にうちが勘違いをしておりました。申し訳ありません。このお話から訂正します。

これまでのお話は、自分への“戒め”のような形として、残しておこうと思います。もし、そのせいで読みにくかったりするのであれば、必ずご連絡ください。メッセでも感想でも構わないのです。その際は、全て訂正するという方向に考えさせていただきます。

では、これからも感想などお待ちしますー！

次からもよろしくお願いしますー！

とつあえず、槍田探偵と探偵くんは食堂へ。

白馬はキツチンヘケチャップをとりに行つた。

オレと茂木探偵は、時間をおいて食堂へと向かつ。

「チヨビヒゲ、しつかりやれよ？！」

「ああ…」と、小声で会話をしながら。

ガチャヤと、食堂のドアを開けるとみんながオレらを待つていた。

「どうだつた？」と聞く蘭さんに、オレは

「ああ…完全に橋は落とされてたよ」と答える。

「しかも、千間のバアさんが殺された」と茂木探偵が言つ。

「ええ！？」とか「そんな…！」とかいつた反応が返ってきたのは、

当たり前だよな。

「ああ…車のライトをいじると爆発するよ！」と細工されてたみてーだぜ

と茂木探偵は真剣な表情。おおっ！ バッヂリージャン、演技！

「そ、そなんあ」と蘭さんは涙を浮かべている。

青子と似た雰囲気のある蘭さんの泣き顔は見たくないので、焦った表情を演技半分、本気半分で作つて言つた。

「とにかく、待つていてもやられるだけだ！ 本当に我々の他に館に誰かいるか手分けして捜してみよつー」と。

すると、槍田探偵が

「じゃあ、私たち女3人でチームを組もうかしら。その方が連れシヨンも出来るしね」

とウインク付きで言つた。

あ～。なるほど～。トイレで眠らせるのね。すると茂木探偵がさり気なく、本当にさう気なく、

「おい、そういえば茶髪で色白の兄ちゃんはどうした?」
と、槍田探偵に聞いた。確かに、この場にいねーのに聞かねえのは

変だもんな。

「さあ……彼が連れてた鷹に餌でもあげてるんじゃないの?」
と意味深な笑みと共に返事が返ってきた。ま、実際はキッチンでケ
チャップを袋につめてるけどな。

とりあえず、蘭さんとメイドさんを眠らせるのは、元検死官の槍田
探偵に任せるとして、オレらは館探険といきますか!

ということで、茂木探偵と探偵くんとオレの3人で近くの一室へ。
部屋に入ると、そこにはグランドピアノが置かれていた。

「ホオー、シャレたもん置いてあるじゃねえか……」

と茂木探偵が一言だけ咳き、ピアノの周りを3人で探索。

「ピアノのふちに引っかいたような真新しい傷がついてるな……」
と言つと、茂木探偵がピアノの鍵盤を叩きながらすぐに答えてくれ

た。

「そいつはおそらく鷹の爪跡だ。あの兄ちゃんもこの部屋に探しを
入れたってわけよ」

「へえー。白馬がねえ。

「あれれえー? ピアノの鍵盤の間に何か挟まってるよ!」

と探偵くんが子供の口調で言うもんだから、何か気が抜けちゃつた。
脱力?

茂木探偵が挟まっていたものを手に取り、見る。

「こ、こいつは!! 奴が言つてた宝の在処を示した暗号!ー?」

と、茂木探偵が叫ぶ。それを横から覗き込みつつ

「しかし、何でワラ半紙にガリ版刷りなんだ?」

と、探偵くんが何やら嬉しそうな顔をしているのを気配で感じつつ
尋ねた。

「多分、まだコピー機が無かつた時代に、誰かがこの文章を大量に
刷つて何かの目的で大勢の人間に渡したんだろうよ。つまり、奴が

言つてた40年前にこの館で起きた惨劇つて話も、それになぞらえて作つた宝の隠し場所の暗号つてヤツも、みんな眉唾もんだってこつた！」

「へえ～。なるほど。それにしても、さすが探偵。筋が通つてるなあ……。

そして、さつきから気になつていたピチャ…という水音。探偵くんがやつぱり子供らしく

「あれえ？ このピアノ濡れてるね？」

と言つ。側には槍田探偵の持つていた霧吹き。にしても、かけすぎだろ、これ。

「こいつは、あの姉ちゃんのルミノール液…」

と呟いた茂木探偵に、

「じゃあ、彼女もこの部屋に…」

来てたんだ、と言葉を続ける前に彼に言葉をさえぎられた。

「おい、チョビヒゲ…！ 明かりを消せ…！」

「へ？」

「早く…！」

つたく…何だつてオレが。しかも、チョビヒゲだしさ…と内心ぶつくさ言いつつ、電気のスイッチを切ると、そこには……。

「ピ、ピアノに血で書いた文字…？ やつぱり何かあつたんだ。40年前に何かが…」

“私は鳥丸に殺される 暗号解読の切り札をやつとつかんだというのに

千間恭介”

と書かれていた。

「切り札…」

と茂木探偵が呟く中、オレは唐突にひらめいた！ 切り札つてことは、つまり、トランプつてこと。それと、例の暗号を合わせて考え

れば…と思つた瞬間、

「ダーン！！」と銃声が響いた。

「じゅ、銃声！？」

「中央の塔の方だ！！」

と、オレらは叫んで白馬の元へ。探偵くんとはじけでお別れとなる。
この銃声は始まりの合図。さあ、千間探偵・つまく引っかかるべ
れるかな？

黄昏の館1-2（後書き）

みなさま、じんにちは。ペロロです。

久しぶりの連載の更新。お待たせいたしました。短編にうつつを抜かして、連載ほつたらかしておりました。とりあえず、12話目です。

今回は。

毛利小五郎＝快斗ということだけは忘れないでくださいね！？男3人で館探索。コナンくんは、ほとんどしゃべっておりません。多分、前もつて探さんと槍田探偵と一緒に見に来てたんじゃないかな？と、裏設定を作つてみたり…（笑）

次回のお話は。

突如響いた銃声。それは、作戦がスタートしたという合図。始まる悲劇（の演技）。千間探偵の再登場は、次々回を目途にしてあります。

いつも、感想ありがとうございます。もうすぐ夏休みが終わつてしまつので、必死でござります。といつか20日から補習再開。つまり、暑い中学校へと行つて参ります。さらに更新が遅くなるかもしれません、出来るだけ頑張るので、お付き合いお願ひしますね！まだまだ、感想やご意見、それに評価なんかもしてもらえるとすごく喜びます

白馬のもとへ駆けつけたオレ達。オレはまず、白馬が持っていたケチャップを素早く取り、左側の内ポケットへと入れる。

茂木探偵が抱き起こして、

「ダメだ…心臓を撃ち抜かれてやがる…！」

と確認のふりをしている横では、カンカンカンと階段を昇つっていく足音が響いている。

「だ、誰かが階段を！」

と叫び、オレはそれを追いかける。まあ、『誰か』＝槍田探偵ってことは分かりきつてんだけどさ。今起きてるのって、探偵くんとオレらを除いたら彼女しか残つていらないわけだし。

塔の階段を昇りきり、突き当たりのドアを勢いよく開け、中へ入る。すると、そこの中には一台のパソコンが置かれていた。
「そういえば、宝の在処が分かつたら、ここへ来いって奴が…」
そつか。ここだつたつけ、そういえば。そして、ふと足元に目をやると、

「そ、槍田さん！？」

彼女が倒れていた。何でこんなところだ？

「見ろよ！ 内側のノブを回すと針が出る仕掛けになつてやがる！」
と背後から茂木探偵がやって来て言った。

「宝の在処をパソコンに入力した奴が部屋を出よつとしたら、毒殺される算段になつてたんだ」

な、なるほど。それで槍田探偵は『死んだ』という設定なわけね。
「し、しかし、犯人はいつたいどこに…？」

とオレがわざと聞くと、茂木探偵は、懐から銃を取り出し、オレに

突きつけながら言った。

「とほけんな！ この姉ちゃんが自分で仕掛けた罠にかかるわけねーし、あんたの娘とメイドはトイレでおねんねしてたぜ？ あの銃声がフェイクだとしたら、殺しが出来るのはあんたと俺の2人だけだ。俺じゃねーってことは、あんたしかいねーだろ？」

と言つやいなや、ドン！ と銃が火をふき、オレの右側約10cmのところを通り過ぎた。その瞬間オレは、服の上からケチャップの入ったポケットを押さえつけ、ケチャップが服に広がるようにする。

「フン…疑わしきは罰せよ。悪く思うなよ、眠りの小五郎さんよ」と茂木探偵がタバコに火をつけつつ言い放つ。

それを聞きながら、壁にもたれかかり、そのままざるざると座り込んだ。

そして、そのタバコを口にして、茂木探偵が毒にやられたフリをして倒れこみ、探偵くん以外は死んだことになった。

そして数秒後、彼がやつて來た。カメラの死角を通り、スイッチを切る。

そして、パソコンに入力。…慣れてるな、やつぱり。カタカタとキーを打つ音が室内に響く。

打ち込んだ彼は、部屋を出て行つた。

それから30秒後、オレは起き出し、パソコン画面を見る。そこには、

『宝の暗号は解けた 直接口で伝えたい 食堂に参られたし 我は7人目の探偵』

と打ち込まれており、

「はつ、キザだな～」

と思わず呟いた。そして、盗聴器のスイッチを入れ、スピーカーを通してみんなにも聞こえるようにする。白馬も階段を昇ってきて、

探偵くんに推理を拝聴することに。

「ところで、チョビヒゲ。お前、何で盗聴器なんて持つてんだ？」
と茂木探偵。

「え、ああ…。近所に発明家のジイさんが住んでんだよ。その人が
作ったのをもらつただけだ」

と、『毛利小五郎』なら変ではない（だらりと思われる）答えを返
す。すると、

「すごい方なんですね」

と白馬が感心した。そうだよなー。これは、オレお手製だけね

その時、スピーカーを通して探偵くんの声が聞こえてきた。

「通常、車に爆弾を仕掛けた人物が、自殺以外の目的でその車に乗
るのは考えにくいが、例外はある。その爆弾で自分が爆死したかの
ようにカモフラージュするケースだ。そうだよな？ 千間探偵」

「始まつた、始まつた」

とスピーカーの探偵くんの声に呟く。

「そう、爆発の直前に車から抜け出し茂みに隠れ、こっそりこの館
に戻ってきたあなたは、館内に取り付けた隠しカメラでオレ達をど
こかで監視してたんだ」

「バカねえ。私は間一髪のところで爆弾に気づき、爆発から逃れて
たつた今、この館にたどり着いたんだよ」

おいおい、それだといぐら何でも帰つて来るの、遅すぎだろ。どん
だけゆつくり歩くんだ？

「それにあの時、車に乗る人はコインを投げて決めたんじゃなかつ
たかい？」

とまだまだ白々しい千間探偵の言い分は続く。が、

「投げる前からあなたが車に乗ることは決まってたよ。最初からコ
インを表にして左手の甲に乗せてたんだから。そのコインの上から

別のコインを持った右手をかぶせて隠し、はじいたコインをキャッチしたフリをして地面に落とし、最初に甲に乗せたコインを見せれば何回やっても表だ！」

と、探偵くんにあつとこつ間に返された。そして、どじめの一言。

「大上さんの紅茶を調べるために出した10円玉が手元にあつたあなたなら、これくらい出来るよな？　“神が見捨てし仔の幻影”さん？」

「でも、彼女は“KID”じゃねえぞ？って、探偵くんはオレ＝毛利小五郎って気づいてんのかね？」

「ホオ…大上さんを殺した晩餐会の主催者が私だと言うのかい？ だったら教えてくれよ。私がこの食堂でどうやって大上さんだけに青酸カリを飲ませ、そしてどうして、その時間さえも予測する」とが出来たかを」

さあ！ ここからが推理ショー本番！ しつかりやってくれよ？
探偵くん？

黄昏の館ー3（後書き）

みなさま、じんじちは。ペロロです。

まだまだ残暑の厳しい今年の夏。体調などは大丈夫ですか？クーラーのつけ過ぎはしていませんか？（うちがします・・）

今回のお話については。

まず、前回のお話で、千間探偵の再登場は次々回と言つてこましたが、今回出てきました。最後の方に少しだけですが。白馬・槍田探偵・おっちゃん（快斗）・茂木探偵と、続々と死んでいく中で彼＝探偵くんことコナンくんの姿は見えませんでした。どこに隠れてたんだろうね？（疑問にするなよ・・）

まあ、とりあえず、探偵くんは千間探偵を食堂に呼び出し、推理ショーをスタートさせたわけですが…。スマセン！途中でエンジンが切れたので、ここまでです：

そんな次回は。

今度こそ！推理ショー部分になります。どちらかといつと、快斗の心理は会話に突っ込んだり納得したりだけになるかもしませんが、そこのことよろしくお願いしますね？

いつも、感想やメッセージありがとうございます。いつもいつも、励まされています！本当に。更新スピードはどんどん遅くなっていますかもしませんが（今回はちょうど一週間）、今後ともお付き合いよろしくお願いします！

スピーカーから聞こえてくる探偵くんと千間探偵のやり取りを、離れたところで聞いているオレ達は、探偵くんがどう攻めるのかを静聴していた。

「彼の紅茶には毒は入ってなかつたし、私の席と彼の席の間には毛利さんがいた。それにあの席はジャンケンをして適当に決めた席じやなかつたかい？」

と、まずは青酸カリを飲ませた方法についてのようだ。

「席順なんて関係ないよ。あなたは前もって全員の分のティーカップに毒を塗つっていたんだから。塗つた場所はカップの取っ手のつなぎ皿の上。そこは、大上さんがティー カップを持つ時、右手の親指の指尖が触れる位置であり、彼が考え事をするときに思わず噛んでしまうツメのそばでもある。ツメを噛んだのは、あなたが声を変えて録音したテープが、宝の隠し場所への暗号を発表した直後。メイドに指示して紅茶を出す時間をその少し前にしておけば、暗号を聞いて考え込み、ツメを噛む大上さんだけを時間通りに毒殺できるってわけさ」

あ～。確かに噛んでたね、ツメ。

「でも、あの時みんな用心のために一度食器類を拭いてから使つてたはず」

と千間探偵が言えば、

「確かに、名探偵として名の通つた大上さんにしては不注意すぎるけど、彼がこの晩餐会を企画したあなたの相棒だったとしたら、自分が殺されるわけないと高を括つて、それを怠つたのも無理はない

た、確かに。大上探偵もオレの名前を使った1人だったのか！

「メイドさんがこの館に来た時すでにベンツが止まつてたと聞いた時から疑つてたよ。こんな山奥の館にベンツを放置するには、ベンツに乗つてくる人間と別の車でその人を迎える共犯者が必要だからね」

相変わらずすげえな、名探偵は。

「ちなみに、あなたがわざわざ待ち伏せて毛利探偵の車に乗つたのは、タバコ嫌いなのを彼に印象付けて食堂で死ぬの大上さんだけにするため。指先に青酸カリがついた状態でタバコをつかみ、クチにくわえれば、あの世行きだ。さつきの茂木探偵みたいにな」

「あれ、待ち伏せだつたんだ…」

とポツリと呟く。

「そういうチヨビヒゲ、千間のバアさんと一緒に来てたもんな」とあの世行きになつたはずの茂木探偵が言つ。

「あ、ちゃんと手は洗つたぜ？」

と笑いながら。

「あのメイドさんを選んだのも、ツメを噛むクセを持つていてのを面接の部屋の隠しカメラで知り、同じ手口でいつでも殺せると思つたから。そう：あなたは共犯者の大上さんを殺し、自分も誰かに殺されたかのように見せかけて、ここに招いた探偵たちを心理的に追いつめ、あの暗号を解読させて、隠された宝が見つかれば皆殺しにする気だつたんだ。40年前、烏丸蓮耶がやつたようにな！ ピアノに書かれた血文字の最後に名前があつたよ、“千間恭介”って。あれは多分…」

「私の父の名前だよ…」

「おっ！ とうとう千間探偵が自供開始したよ！」

「そろそろ向かうとすつか！」

と茂木探偵の案により、みんな中央の塔から出て階段を降りていく。もちろん、スピーカーのスイッチは入れたままでね。

「ところで毛利さん？ 一つ聞きたいのだけど、よろしい？」

と槍田探偵。

「何スカ？」

「あのボウヤ… 何者なの？」

「は？」

「確かにそうです。小学一年生にしては、言葉遣いや推理の組み立て方などおかしな所が多くいる」

と白馬までオレを追求する。

「な～に！ あれはオレの教育の賜物つすよー 日頃からみっちり特訓してやつてんスから！」

「そうですか…」

と渋々納得してくれたようだ。さすがに、

「そりや、彼は工藤新一。つまり、高校生なんだから！ それも“日本警察の救世主”とまで言われたね」とは言えねえよな

な～んてやり取りをしていると、探偵くんと千間探偵の会話も進んでいた。

「針で手紙に穴を開け、びつちり書かれている父の字を見つけたのはね。そこには、宝の隠し場所を示した暗号の事、父のほかにも学者が大勢呼ばれている事、そして、死期が迫り業を煮やした鳥丸を見せしめのために、学者達を一人ずつ殺し始めたことが書いてあつたよ。たとえ宝を見つけても自分は殺されるとね」

「その事、警察には言つたのか？」

「いや、針の字に気づいたのは20年も経つた後だつたし、その頃は蓮耶も死に絶えて、鳥丸家は衰退し館も人手に渡っていたからねえ。その話を2年前に大上さんにもらしてしまつたのが事の始まりだよ。彼はさつそくこの館を見つけ出し、目の色を変えて宝探しを始めたけど、結局暗号は解けずじまい」

名探偵として名が通つてゐるのに？ あ～あ。

「多額の借金までしてこの館を購入し、引っ込みがつかなくなつた彼は、ある口ひり言い出したんだよ…。『名探偵を集めて解かせよう！ 探偵たちを釣るエサは怪盗キッド！ 奴を招待主にして命がけのゲームを仕掛けるのだよ！ ワシとあんたが途中で彼に殺されたかのように見せかけてな！ そうだ、実際にメイドでも殺そうか？ 本当に命が懸かっているとなると、本気にならざるを得んからな！ なーに、罪は全部キッドがかぶつてくれるさー』」

「へ～え…？ このオレ様の名を使つただけでなく、殺人者扱いまでしたわけか？ しかも、オレ、『エサ』だと？！ ふざけんじゃねえ！

と内心は腸が煮えくり返つてゐるのだが、他の探偵たちの手前、ポーカーフェイス。

「じゃあ、あのメイドさんを選んだのって…」

「大上さんだよ。自分のクセからメイドの殺害方法を思いついたと喜んでいたけど、まさか自分がそうやって殺されるとは思つてなかつたろうねえ。そう…彼があの時ツメを噛んだのは、私が予定外のことをテープに吹き込んでいたから。彼は食事の後にメイドを殺す計画を立てていたからね」

「でも、どーして大上さんを？」

と、探偵くんが尋ねた時、食堂が見えてきた。ということで、スピーカーのスイッチは切る。食堂のドアが開いているから、話は聞こえるしね。

「宝の在処が分かつたら、彼は私も含めて皆殺しにする氣だと氣づいたからだよ。みんなの部屋に仕込んだ拳銃による同士討ちに見せかけてね」

あちゃう。そりやダメだ。…ってあの人、本当に名探偵って呼ばれてたのか！？ 殺人計画をオレの名前を使ってたてるなんてありえないだろ！

黄昏の館1-4（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。
まだまだ残暑の厳しい今年の夏。京都は蒸し暑さです。…厳しいに
変わりありませんが。

文化祭の準備で日々忙しくにかまけて、勉強がおろそかになつてお
ります（苦笑）

今回のお話は

推理シヨーー！…の途中まで。まだ、最後までいつておりません。
長いんですね；最後に近づくにつれて、字数が増えるのが、この小
説の特徴のようです。

探偵たちは、現在、食堂のドアを一枚隔てた外にいます。そこで、
直にコナンくんの声と千鶴探偵の声を聞いているということ！
探偵たちの追及は、『いまかすこと』で何とかやりきった快斗くんでし
た

そんな中、次回のお話は。

よ、ようやく推理関連は完結、のはずです！ キリよく60話でい
ければいいんですけど…終わつた後の、オマケみたいなつてやつ
ぱりほしいですよね？ なので、もしかしたら中途半端な数字で終
わるかもしれません。次回更新は…出来た日に（爆）

いつも、感想やメッセージありがとうございます！ 本当に本当に
励まされています！（と毎回言っていますが）ありがたいな～と
思っています（*^-^*）

もう、ラストスパートに入つているので、出来るだけお待たせはし
たくないでの頑張つて更新したいと思います！
これからもよろしくお願ひしますね。

食堂のドア越しに聞く、千間探偵と探偵くんの会話。

「鳥丸に取り憑かれたようなあの男を止めて、探偵たちに暗号解読を続行させるには、ああするしかなかつたけど、結果は40年前と同じ。暗号は解けず、惨劇を繰り返しただけだつたねえ…」

なんだか、千間探偵の声がどんどん弱々しくなつていてる気がするんだけど、大丈夫なのか？

「いや、あなたのお父さんは暗号を解いてたみたいだぜ？」

「え？」

ドアの隙間から覗くと、探偵くんは暖炉の上によじ登り時計を見ながら言い出した。

「変だと思わないか？　こんな大きな館なのに、時計はこの食堂にしかないんだぜ？」

まあ、確かに。他のどの部屋にも時計はねえよな。

「そう…暗号の頭の『二人の旅人が天を仰いだ夜』とは、時計の長針と短針がそろつて真上を指す午前0時！　まずは、それに従つて針を0時に戻して、と」

と、探偵くんは指で時計の針をぐるぐる回し、時間を0時にセット。

「そして、続きの暗号を解くカギは、あなたのお父さんが血文字で書き残した『切り札』！　切り札とは、英語でトランプのこと…暗号の中の王と王妃と兵士はトランプのKとQとA…そして、宝はダイヤ、聖杯はハート、剣はスペイドを意味してるんだ。つまり、宝と王はダイヤのK！　聖杯と王妃はハートのQ…剣と兵士はスペイドのAつてわけ」

とスラスラと説明。さすが探偵くん。3度の飯より暗号が好きってか？

「この館にあるアラシングの、それらの絵札の顔の向きに従つて、0時の状態から、左に13、左に12、右に11と動かすと…」

といいつつ、そのように針を動かし、動かしきつた瞬間、ガコツと音がして時計が外れて、カシイインと音を立てて床へと落ちてしまった。オイオイ、高いんじゃねーのか、その時計？

「塗装がはがれて内側から金が…。それに、この重さ。やつか、この時計、中身は純金なんだ」

と探偵くんが呟くように声に出すと、

「やれやれ」

と千間探偵はなんだか呆れた感じの声を出した。

「たつたそれだけのために父が命を落としたとは…現実とはこんなものかねえ？」

いや、ガツクリきてる？

「さあ、約束だぜ千間さん？ この館からの脱出方法を教えてくれ！」

と、とうとう探偵くんは千間探偵に要求する。が、しかし千間探偵の答えは

「そんなもの、最初からありはしないよ。私はここで果てるつもりだったのだからね。大上さんは食事のあとでこいつそり教えるという私の言葉を信じていたようだけど」

だつた。ありやりや、やつぱり？ と思つたオレのすぐ横で茂木探偵が千間探偵へと口を開いた。

「フン、だろーと思つたぜ、千間のバアさんよお？」

なんてカッコつけながら食堂のドアを開く。効果音が鳴るなら、パンパカパーン！ って感じ？ 探偵4人（見た目は）が集結！ つてね。

茂木探偵に続いて、オレもずーっと氣になっていたことを言わせていただぐ。

「どうしてくれんだ、オレの一張羅…」

毛利探偵に返すのに、クリーニングしなきゃなんねえじゃん！ ケチャップは落ちにくいつてのによ。

「だから言つたんですよ。こんな子供だまし無意味だと」と白馬は口についたケチャップを拭いながら呆れたように言つ。槍田探偵は、それに言い返す。

「あら、文句ならあのボウヤに言つてくれる？ 子供相手ならきつと脱出方法を教えてくれるって言い出したの、あの子なんだから」「まさか、私からそれを聞き出すために、死んだフリを？」と千間探偵は目をまん丸にしている。まあ、そりやね。死んだと思つてた人が目の前に出てきてんだしね。

「ああ、暗号を解いた奴も殺そうとしてたからな」と茂木探偵はタバコを吸いつつ答える。ついでにオレも「オレ達が生きてる間は問い合わせても吐いてくれないと思つてね」と加えておいた。

「モニターで見たらケチャップも血に見えるしね！」

と槍田探偵がケチャップを手に言つ。

「でもまあ、蘭さん達を眠らせたのは正解でしたね。この悪趣味な芝居は若い女性のハートには酷すぎる」

白馬…。オメエ、やっぱり、ダメだ。ホラ見る、探偵くんも半目だぜ？

「い、いつから私が犯人だと？」

「このボウズがオレ達にコインを選ばせた時からさ」

と茂木探偵が探偵くんの頭の上に手を当てながら答える。

「あの時バアさん、手を伸ばしてわざわざ遠くにある10円玉を取つただろ？ それでピーンときたんだ。あんたは他の奴に10円玉

を取らせたくなかつたんだつて。青酸カリがついた指で10円玉を触られたら、酸化還元反応が起こり、トリックがバレちまうからな！」

「だから私達、犯人をあなたに絞りすぐに結束できたつてわけ！」
「死体の右手親指のツメを見た時点でトリックは読めてましたしね」と、茂木探偵、槍田探偵、白馬の順に千間探偵の質問に答えている声を背に、窓へと近づく。わざわざから氣になるこの音……。

「さて問題は、ここからどうやって脱出するか」

「あら、何の音？」

「あ、多分、僕が呼んだ警察のヘリの音ですよ」と白馬。け、警察！？

「『呼んだ』？」

と怪訝な表情の茂木探偵に、笑顔の白馬。

「ワトソンのアンクレットに取り付けた手紙を、夜明けと共にガケ下に待機させていたバアヤの車に届けてくれたんでしょう！ よかつた、他の車と見分けがつくように×印をつけておいて」ハハ。バアヤも大変だ。それにしても、この音。ヘリの音だけじゃなくて：

「それならそうと、早く言つてよ！」

「あんな猿芝居させやがつて」

と2人に詰め寄られるが

「鷹は鳩と違つて帰巣本能に乏しいから不安だつたんですよ……」と主張している白馬の声を聞いていたら、ようやく音の正体が分かった。

ヘリの音と……建物の壁の剥がれる音だ。

黄昏の館1-5（後書き）

みなさま、こんばんはー。ペロロです。
約1週間で更新を頑張っている日々ですが… 今回ばかりと遅れ気味でした。スマセン。

さて、今回は…
まだ、キッドは出しません。スマセン。結構楽しみにしてくれている方が多いんですけどね。焦らします。とはいっても、次に出来る（はず）です。今回は、探偵くんことコナンくんの推理＆探偵たちのネタばらしがですねえ…話すこと、特にないです（爆）

次回は…

お待たせいたしました！ キッド登場です！

最後の最後まで出てこない彼が持つていった意味深なセリフ…つまりの解釈で言わせることになります。

みなさま、いつもコメントありがとうございますー。

ほほ、完成に近づいてきています。最後までお付き合いしてくれたらしく嬉しいです(*^-^*)

それに、コメントをくれたら、もしかしたら更新が早くなるかも…？（分かりませんが。）

やる気になるのは、間違いないです！

今後とも、よろしくお願ひします。

さて、事件も全部解決したし、（警察のヘリだけ）救助も来たみたいだし！

「蘭たちを起こしてこねえとな」

「じゃあ、私が行くわ。一応女子トイレだし？」

と、榎田探偵が起こしてくれることになった。

「こう」と、オレ達はヘリが待つていい、というか、そこにしかヘリを下ろせないのだが、中庭へ先に行くことになった。メイドさんについていき、中庭に出て、みんなでヘリに向かって手を振つて降りてくるよう促す。

「う」と音と風。着地…した。

いくら館の中庭が広いとはい、けつこうギリギリなんだけどなあ……。

上手だわ、誰だか知んないけど。

ヘリが着地したら、蘭たちがやつて來た。

「蘭！ もう大丈夫か？」

「うん…。眠らされた時はビックリしたけど、榎田さんが説明してくれたし」

「ヘリが来てくれたし、とりあえずこれで…どこに行くんだ？」

と、最後は白馬に向けて聞く。

「警視庁のヘリですので、警視庁ですね。『血狂へはそこから…』

「そうか」

勝手知つたる警視庁つてな。

「では、参りましょ」

と白馬が言つてすぐ

「おじさん！ 高所恐怖症でしょ？ 外側に乗らないほうがいいよ

！」

と探偵くんがいい、それに乗つかるよつて
「やつでしたか。では、まず僕が乗らせていただきますね」
と白馬もいい、ヘリに搭乗する。

探偵くんの一言によつてオレの“外側に乗つてあわよくば脱出しよ
う！”作戦は脆くも崩れ去つた。トホホ。

で、結果として…。

前列左側から、白馬、オレ、茂木探偵、千間探偵。
後列左側から、メイドさん、槍田探偵、探偵くん、蘭さん順番に
なつた。

そして、全員座つたところで

「行つて下さい」

とオレの左側で白馬がいい、ヘリが再び飛び上がり、警視庁を田指
す。

さて、困つた。

え？ 何がつて？ それがさあ…。視線が痛いワケよ。

左に座つている白馬と、後ろに座つている探偵くんの視線がね。

これ…完全に正体バレてんだよな？ 探偵くんはともかく、白馬は
何でだ？

あ〜、とにかく居心地が悪いし、早く出たいんだけど、探偵くんに
オレの作戦を封じられて出られねえし。

どうじょうつか。

と、表情は変えずに必死で悩んでいたと、後ろから蘭さんの声が聞こえてきた。

「結局来なかつたのね、怪盗キッド」

おや？

「あら、来て欲しかつたの？」

「あ、いえ…」

おやおや？ 『用とあらばすぐ』でも参上いたしますの。元オレの右側では、茂木探偵と千間探偵が会話をしている。

「俺達を心理的に追い詰めるのは、大上のダンナの計画だつたんだろ？ 何で奴を殺した後、死んだフリなんかしたんだよ？」
あ、そういうえば、その謎は解けてなかつたね。

「どうしても解いて欲しかつたんだよ、父が私に遺したあの暗号を。私が生きているうちにね。あなた達のような名探偵が集まる機会なんてもう一度ないと想つたから…。どうやら、鳥丸蓮耶に取り憑かれていたのは私だつたのかもしれないねえ」

千間探偵…。そこまでして、謎を解きたかつたんだ…とヘリの空気が重くなつた時、千間探偵がヘリの扉を開け、空中へとダイブしてしまつた！！

「バ、バアさん？！」

と茂木探偵が扉から下を眺めている横を押しのけるよつて、オレは千間探偵の後を追つた。

ヘリからば、

「お父さん！…」

と蘭さんの驚いた声が聞こえる。千間探偵に追いついたところで、一気に毛利探偵の変装を解き、千間探偵をお姫さまダッコする。

あ～、久しぶりのオレの顔！ 何だかスッキリした感じだ。

千間探偵には、丈夫なヒモをくくりつけておく。

これらの作業が終わり、オレから千間探偵に一言。

「オイ、バアさん！ 死に急ぐには年食い過ぎてんじゃねーの？」

が、千間探偵の返事はオレの予想とは違っていた。

「バカ言つてんじやないよ！ あなたを助けてあげたのさ」

「え？」

「あなたの名を騙つて晩餐会を開いたお詫びにね。こーでもしなきや、あなた逃げられなかつたよ？ あの子達から。特に、妙な時計であなたを狙つてた、あのおチビけやんからはね！」

「あらー、バレてたのね…」

オレの正体も、探偵くんから逃げられなくて困つてるのも、探偵く
んの方が手ごわいくつてことも。

「タバコだよ」

と千間探偵は種明かしを始めた。

「毛利小五郎はヘビースモーカー。あなた、館に来てから一度も吸
わなかつたでしょ？」

あはは、未成年なもので。

酒とタバコは20歳からだしね。

「何者だい？ あの子達」

え？ うーん、そうだなあ…。

「“最も出会いたくない恋人”ってところかな？
よしつ！ 決まった！」

「でも、残念だつたねえ。あんた、烏丸の財宝を狙つて来たんだろ
？」

んなわけねえじゃん！ 白馬に乗せられて来たんだよー！

：とは言えるわけがないので、

「ああ、やのつもりだつたが止めとくよ」

と言いつつ、手を離す。

「あんな物^{もん}、泥棒の風呂敷には包みきれねーからな」

ハンググライダーを操り、もう一度だけ黄昏の館を見てからオレは
家に帰った。

黄昏の館1-6（後書き）

みなさま、じんじは。ペロロです。
1週間で更新できました！ ありがとうございます。

さて、今回は…。

キッド様登場 出せました。前回の後書きで、「意味深なセリフは～」のところ、次に持ち越します。もちろん、うちなりの解釈で。キッドにとつての認識は、探偵くんへ白馬って感じですかね。しかも、それが千間探偵にバレていたと。（笑）

さて、次回は…。

ん？ 次回？ はい！ その通りです。

『うちが何のオマケも準備せずに書いていると、本当に思いますか？』（鎮魂歌キッド風）

オマケあります。今回も。ですが、はつきり言ってたいしたことはありません。大体のイメージは出来ているので、出来たら早めの更新を予定しています。

がしかし、出来ない可能性もありますので、そこだけは許してください。

今回のお話で、60話目。なんかすごいことになつてきました。いつも読んでくれてる皆様、本当にありがとうございます。評価やコメント、かなり嬉しいです（*^-^*）まだまだ、感想もお待ちしています！

これからもよろしくお願ひしますね。

黄昏の館1-7（前書き）

「黄昏の館」オマケ話です。

ですが、以前から言つてはいたように本当に… 大した話ではあります。

次に繋げる（！）という意味では大事っちゃ あ大事なんですけど、読まなくとも害はありません。

ではでは、ここまで了解した上でお読みいただき、楽しんでいただけたら嬉しいです

「黄昏の館」でのことから、2日経った今日は月曜日、
といふことは、学校もあるわけで。

登校してきて早々ではあるが、オレはこいつものよつて夢の世界へと
旅立っていた。

そのせいなのか、またしてもアイシの一句で嫌な一日の幕開けとな
ってしまった。

…寝てて油断してたオレが悪いのか？

「“最も出会いたくない恋人”ですか…。光栄ですね、黒羽くん？」

「んあ？ 白馬？」

「はい」

「ふーん、白馬……ん？ 白馬あ！？」

「やつと起きましたか」

「おめえ、まだいたのか！？」

「失礼な。先週、僕が君に見せたあの招待状のことについて来た

んですよ

「ああ…なんか変な招待主だつたやつのことだら？」

「ええ」

「んで？ どうだつた？」

「僕が推測したとおりでしたよ。昨日の新聞にも載つていたでしょ
う？ キッドの名を騙つていただけのようですがね」

「ああ、そういうや何か書いてあつたなあ

「ああ…なんか変な招待主だつたやつのことだら？」

「ですが！ 新聞にも書いていなかつたことがあります。それは、
本当にキッドが現れたといふことです」

「何ッ！？」

「オヤ、白を切るのですか？」

「…オレが何の白を切つてるんだよ」

相変わらず鎌賭けばつかりだなあ、コイツ。

まあ、そんなんじや天下の怪盗キッド様はのせらんねえぜ？

「そのキッドが飛び降りた千間探偵に言つていたそうですよ。僕と、そして『キッドキラー』と称されるメガネの少年のことを、『最も出会いたくない恋人』であるとね」

「キッドがか？」

「ええ。彼女に聞いたから間違いありませんよ。…光榮ですよ、黒

羽くん

「は？ 何が？」

「“恋人”ですよ。“最も出会い系”といふことは、つまり、“出会い系”といふのが、出会った時は楽しい相手”といふことじやないですか」

「いや、オレに言われても困るんだけど……」

まったく、やだね、探偵つてのは。ここまで深く一言一言を考えなきゃやつていけねえのか？ マジで夢ねえよ。

「かういと！ 何話してんの？」

「あ、青子…」

つたく、マズイ時に来やがつて。

「僕が“恋人”と言われたことについて話していたんですよ

「こ、恋人！？」

「え、快斗、そっちの趣味があつたのか？！」

「おい、黒羽！ どういうことだよ！？」

「…」

は～～く～～ば～～。この騒動何とかしてくれよ。
何でそんな誤解の生じるような言ひ方すんだよ！

「オイ、違うに決まつてんだろ！ オレはいたつてノーマルだよ！
何考へてんだよ。しかも、何？ このギャラリーのなかで…」
「当たり前でしょ。あまりにも白馬くんがサラッと言つもんだから、
本当のことかと思つたんだもん」

「青子サン…」

オレの「」と、何だと思つてんだよ？

「ホラ、白馬も何とか言つてくれよ！ …つて、アレ？ 白馬は？」
「白馬くんなら、イギリスに帰る飛行機の時間がもうすぐだから、
警視庁に一回寄つてから空港に行きたいしつて言つて帰つたよ？」

「は？」

あん一二やロ～。逃げやがつたな！？

「で、快斗！ 本つ当のところなぜだつなの？」

「まだそのネタ引つ張んの？ …オレは普通です！」

と呆れつつ主張したところで、チャイムが鳴つた。白馬の奴、何し
に来たんだ？

「青子、オレー限サボるつて先生に言つといつてくれ」

「ええ！？」

「じゃ」

「あ、ちよ」

と、青子に文句も言わせる間もなく、屋上へ。

「はあ～。今日はサボろつかなあ…。…よしつー… サボりつい…」
と即決し、今日は帰つた。後で青子に怒られるだらうなあ。

帰った後、何をするわけでもなく、テレビを見たりマジックをしたり、のんびり過ごした。

夕方になって、夕刊が届いたのを見て、新聞を読もうと思いつ立ち夕刊を開いたオレは、ある記事に田をとめて…「は？」とだけ感想、目がすごいスピードで活字を追つた。

『怪盗キッドの深まる謎』と見出しが出ている。

『一昨日、故・鳥丸蓮耶の館にキッドの名を騙つて探偵たちを集め事件について、新たな証言が寄せられた。それは、実際にその現場にキッドが現れたというものである。証言によると、怪盗キッドは、毛利小五郎探偵に変装しており、ヘリコプターから飛び降りた千間降代探偵を助けた後飛び去つた。その際、ヘリに同乗していた白馬探くんと江戸川コナンくんのことを“最も出会いいたくない恋人”と称していたといつ。

江戸川コナンくんといえば、以前鈴木財閥の黒真珠、ブラックスターを守つた少年として有名であるが、キッドとの関係はいかなるものなのか。以前から謎の多いキッドではあつたが、今回のことですます謎は深まつた。』

白馬あ~~~~~！ オメエ、次会つたら覚えてろよ！？
こんなこと、いちいち警察に報告するもんじゃねえだろ！

…まさか、このためにギリギリまでこひりこひりしたとか言つただろう

か。

フツ：なめたマネをしてくれますね、白馬探偵も。

黄昏の館1-7（後書き）

みなさま、こんばんは。ペロロです。
1週間よりも1日早く更新できました。あ、そんなに変わりません
かね；

今回は…

実はひそかに準備していたオマケ話。嬉々として個人的には楽しみ
つつ書けたんですが、完成度はイマイチではないかと思います。
どうしてもある意味深なセリフを探さんに追求してほしかったんで
す。うちは、こいつ解釈しましたが、みなさんそれぞれ違うと思います。

天然青子ちゃんは久しづぶりに書きました。多分、普通の青子ちゃん
とは違うと思います。

：新聞記事は、もう突っ込みでくださいね（汗）
最後だけは、キッド口調にしてみました。出番少なかつたしね。

ではでは、感想などいただけたら嬉しいです。
こんなオマケ話でスマセン。

：前書きの部分は深読みあります（笑）

ではでは、これからもよろしくお願ひしますね。

よつ！ みんな。黒羽快斗です。

「ここにちは！」 ペロロロ（ペロロ・以下「」回）
お、いいことに来たな、ペロロ。一つ聞きたい」とがある…。
「何や？」

あの終わり方は何だああああつ…！

「何つて…。恋人騒動？（笑）」

笑つてんじゃねえよ！ オレが可哀想じやねえか！

「可哀想つて言われてもなあ。最後にいつもより出番少なめやつた
から、キッドにしてあげたやん！」

お気遣いありがとうございます、お嬢さん♪

「キ、キッド…」

でなくて…！

「あ、戻った」

オレは探偵くんとはよきライバルなのー。何で変な関係にされなく
ちゃなんねえんだよー！

「いやあ、」の方が面白いかと思つてさ

ペロロのシボと、」の小説を読んで下さつてる読者様のシボは違つ
んだぞ？

そんな無責任なことしちゃダメだら、普通。

「それは分かつてんねんけどさ…。根本的には、キッドとして
あんな意味深なこと言つからアカンねやう？」
うつ…。

「それに、せつかく探さん出てきたから追求させてみたかつてん。

快斗に』

：それが本音か。

「もちろん！　あ、まだ理由を挙げるなり、まじ快ワールドにした
かつたからかな」

何でだ？

「何でって…。気づいてないのか。じゃあ聞くけど、何でこんな風
に話してるの？」

……何で？

「それでもIQ400かよ。見たら分かるでしょう。普通に考えてみ
ておかしいやん、この状況。こんなことできるのは、最後だから特
別に！　つてことに決まってるやんか」

あ、なるほど…。つて、え！？『最後』！？

「そうだよ？」

何で！？

「『何で』ばっかり言つてるなあ、もつ。前々から決めてたよ？
あまりにもダラダラと長くても携帯から見てくれてる人は特に読み
にくいやろうし。それに、個人的な事情ではあるけど、受験生やし
ね。これでも。だからけど…？」

そ、そんな。

「心残りは、キリよく60話で終わるなかつたことかな。小休憩挟
みすぎたし」

じゃあ、この後のオレの活躍はどうなるのやー…？

「うん、それも考え中。中途半端で終わるのも何だし、続けよつか
なつて思う自分と、そんなことできる時間はあるんかなつて悩む
自分がいるからさ。読者様の反応を見て決めよつと思つてんだよね
マジかよ…。」

「まあ、中断というか、これで終わりになつた場合は、話の最後が
恋人騒動になるわ、天然青子ちゃんに迫られるわで災難な終わり方

になつてありますけど、まあ、それも運命やと思ひや。 （笑） 「

ゲッ。それはやだ！ しかも、せつかく忘れかけてたのこ思ひ出せ
せるなよ、そのこと。

「紅子ちゃんも出てほしかつたけど、ムリだった…。残念」
出なくていいから！

「まあまあ。あ、話は戻すけど、連載として書けへんかった時は、
オマケのような後日談的なものだけ短編で書きたいと思つてゐるし、
安心してな！」

あ、マジで？ やうこりとは早く言えよ。よかつたあ。

そうだよな、ペロコがオレ様の魅力から逃れられるわけねえもんな！

「うわ。当たつてるだけになんか悔しい…」

まあ、あれだな。この話の未来は読者様にかかるつてわけだ。
「やうこり」と。

そういうえば、ペロコつて関西弁なんだな。普段後書きでもそんな感

じしないから、不思議な感じがするぜ？

「あ、そう？ これが一応普通になるんやけど。後書きとかはどいつ
しても敬語になるしね。快斗相手にわざわざ敬語つていうのもねえ
？」

失礼なヤツだな！ ま、いいけどな。

「それはよかつた。これも個性の一つとこり」とでー。」

まあ話は戻して、今後ともよろしく頼むよ。ペロコにはムリしてでも
オレ様の魅力を書き続けてもらわねえとな。

「何でそんなに偉そうなんや」

こんな反則して、これで終わつてダメだろ。

「いや、そなんやけど…なんか押されてる感じ？」

「氣のせい、氣のせい。」

「せ、かなあ。まあいいや。とりあえすせ、ここがでお付き合って
ありがと「」やこました！」

そうだな。こんなに続けられたのも一重に読者様のおかげだしな。
「うそ。かなり助けられたもん。やつぱり自信なかつたし。あ、今
回は、後書きは書きませんので、ここで最後になります」
あ、そうなの？

「だから、ここで改めて」挨拶してくるやん」

そうだったんだ。

「こうことで、こんなつまらない会話にお付き合つてありがと「」
ござました！ 時間的にかなり厳しい時もありましたが、本当に書
いて楽しかつたですし、コメントももらえて幸せでした！『名
探偵コナン』キッズside』は、これで一応完結となります。
全部で62話があ。す」「にな…。あと、コメントもお待ちしてあり
ます！ それに、希望も…」

ペロコこそ他人事じやねえか…。

「いいじやん、まさかこんなに続けられると思わなかつたんだもん
やつぱり読者様のおかげだな！」

「うそ」

とこつことで、また会つ口まで…

「ありがと「」やこました。これからもペロコをよろしくお願ひし
ますーー！」

(&快斗)

2007.9.29

ペロ口

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827b/>

名探偵コナン～キッドside～

2010年10月9日17時33分発行